

郷土の文化財 28

MASHITA MARUYAMA SITE

間下丸山遺跡

平成 18 年度 国庫補助事業・総合流域防災事業に伴う
間下丸山遺跡発掘調査報告書

2007 年（平成 19 年）3 月

長野県諏訪建設事務所
長野県岡谷市教育委員会

郷土の文化財 28

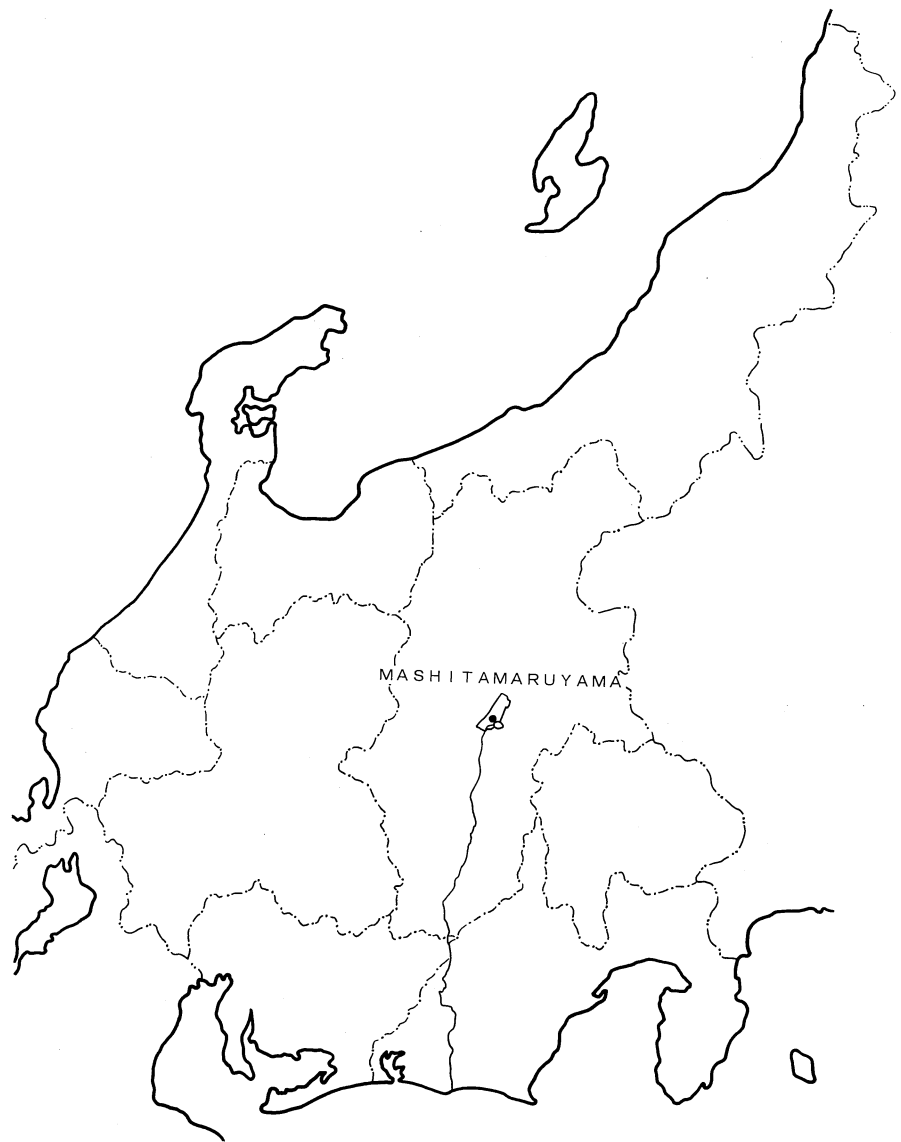
MASHITAMARUYAMA SITE

間下丸山遺跡

平成 18 年度 国庫補助事業・総合流域防災事業に伴う
間下丸山遺跡発掘調査報告書

2007 年（平成 19 年）3 月

長野県諏訪建設事務所
長野県岡谷市教育委員会



長野県内における遺跡の位置図

序

岡谷市の市街地中心部にあたるこの地は、三沢勝衛先生によって「塚間川段丘」と名付けられ、北は現在の中央道岡谷インターに位置する中島 A、中島 B 遺跡にはじまり、諏訪湖に半島状に突き出た海戸、岡谷丸山遺跡まで、西山山地山麓を含め数多くの遺跡が並び、学術的にも全国的に著名な遺跡が多くあります。

間下丸山遺跡は、『諏訪史第一巻』にも紹介され、古くから知られた遺跡であります。本格的な調査は平成 9 年の丸山橋線拡幅工事に伴う発掘以来久しく、その時には縄文時代中期の住居跡ならびに古墳、平安、中世各時代の住居跡や遺物が発見され、長期にわたる集落であったことが判明しました。

今回の調査は大川の左岸に近いところであり、当時の人々の水辺における生活の痕跡の発見が期待されていました。そして、2 ヶ月に及ぶ調査では、縄文時代後期の土壇墓をはじめ 54 基に及ぶ小竪穴が発見され、川の際まで人々の生活の跡が見られたことは貴重な成果でした。

本書はこうした調査成果をできる限り記録にのこすために掲載し報告するものです。今後この報告書が岡谷市の原始・古代の生活の様子を解き明かし、学術・文化の向上に少しでも寄与できますことは意義深いことと嬉しく思っています。

平成 18 年 7 月の豪雨災害では市内各地に大きな爪跡をのこし、多くの人命を失いましたことは、大きな悲しみでありました。大川流域におきましても浸水の被害を受けられた方もいらっしゃいます。調査地に造られます遊水池がこのような災害を防ぐ施設であり、皆様の生活の安全が確保されますことを喜ばしく思っています。

最後になりましたが、埋蔵文化財の保護に対しまして、深いご理解ご協力いただきました長野県諏訪建設事務所、(株)岡谷組をはじめとする工事関係者、地元間下区、新屋敷区の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成 19 年 3 月

岡谷市教育委員会

教育長 北澤 和男

例 言

1. 本書は、平成 18 年度国庫補助事業・総合流域防災事業に伴う、間下丸山遺跡発掘調査を実施した、その報告書である。
2. 調査は長野県諏訪建設事務所の委託を受けて、岡谷市教育委員会が行った。
3. 発掘調査の主体者は、岡谷市教育委員会である。平成 18 年度内に調査と出土品整理を実施した。調査団の組織は第 1 章 3 に挙げた。
4. 本書は、教育委員会生涯学習課文化財担当が編集、第 1 章に調査の概要を掲載して、整理作業、執筆分担を第 1 章 3 に明記し、稿末にも記した。
5. 調査の方法、資料整理及び報告書作成の基準、範例の詳細は第 1 章に詳述した。
6. 出土品、記録類はすべて岡谷市教育委員会が保管している。

目 次

序

例言

第1章 調査の経過と概要	1
1 調査の経過	1
2 調査の概要	1
3 調査組織	9
第2章 遺跡の位置と環境	11
1 遺跡の環境	11
2 周辺の遺跡	11
3 調査区の土層について.....	13
第3章 遺構と遺物	14
1 住居址と遺物	14
(1) 14号住居址	14
2 小竪穴と遺物	15
(1) A類 一括土器を伴う小竪穴	15
(2) B類 集石を伴う小竪穴	18
(3) C類 骨片、焼土を伴う小竪穴	21
(4) D類 炭化物を多く含む小竪穴	21
(5) その他	21
3 遺物	21
(1) 石器	21
(2) 土器	30
(3) 土製品・石製品	34
4 平安時代～中世の出土遺物	37
第4章 まとめ	38
附表 小竪穴一覧表	39
石器属性表	40
おわりに	48
写真図版	49
報告書抄録	



第1図 遺跡 (○印) 位置図 (1 : 50,000)

第1章 調査の経過と概要

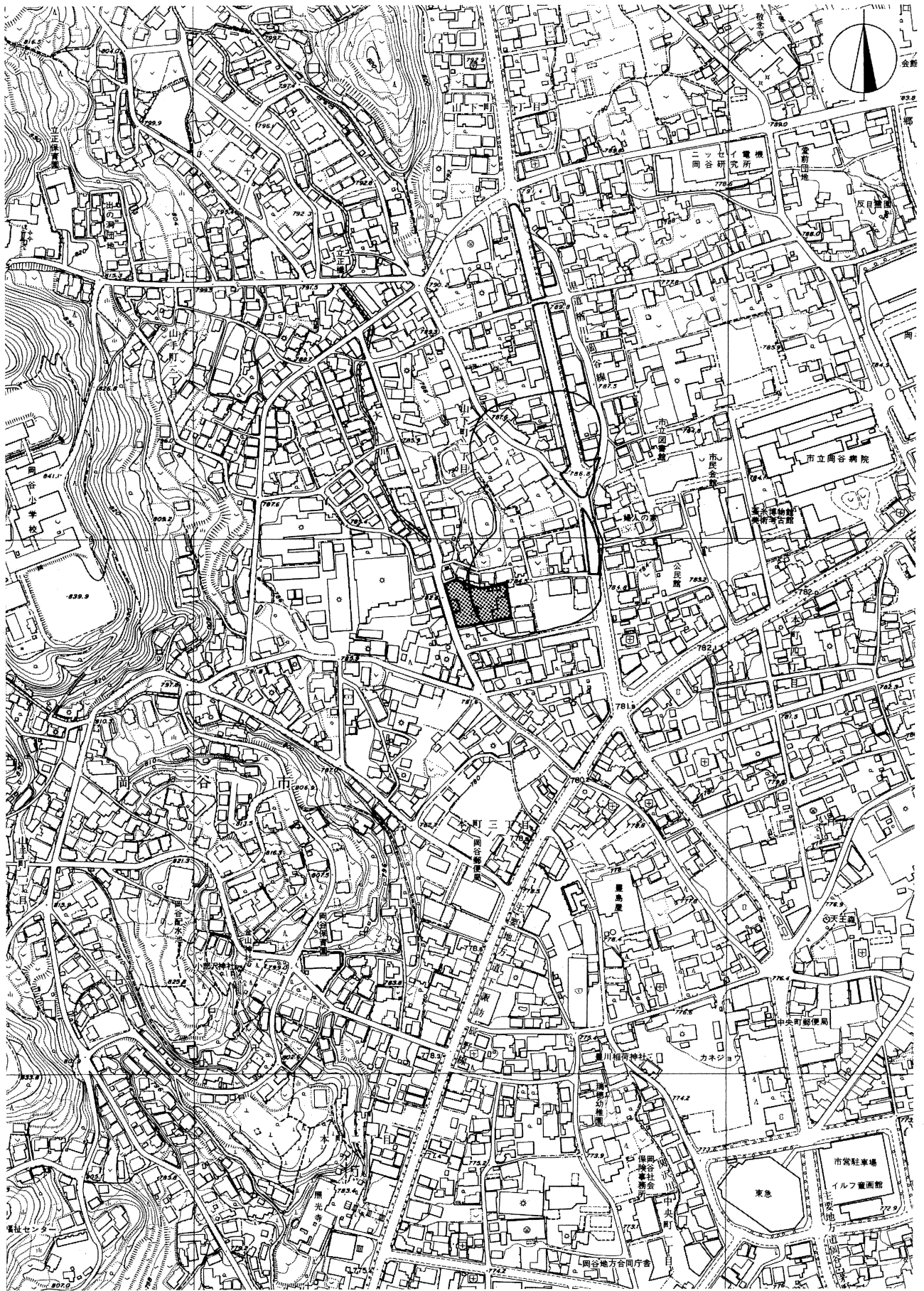
1. 調査の経過

平成17年5月15日	長野県諏訪建設事務所長が長野県教育委員会へ「土木工事のための埋蔵文化財発掘の通知書」を提出する
7月27日	長野県諏訪建設事務所長が岡谷市教育委員会教育長へ「平成18年度以降実施予定の公共事業等に係る埋蔵文化財及び史跡・名勝・天然記念物の保護について（協議）」を提出する
8月3日	間下丸山遺跡発掘調査について長野県諏訪建設事務所計画課、岡谷市土木公園課、岡谷市教育委員会生涯学習課の三者にて保護協議を行う
平成18年3月5日	長野県諏訪建設事務所長が岡谷市教育委員会教育長へ「平成18年度国補総合流域防災事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する見積もりについて（依頼）」を提出する
3月15日	岡谷市教育委員会教育長が長野県諏訪建設事務所長へ「平成18年度国補総合流域防災事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する見積もりについて」を提出する
4月3日	長野県諏訪建設事務所長平沢清を委託者とし、岡谷市長林新一郎を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結する
4月13日	工事施工業者株式会社岡谷組土木部と工事日程の打ち合わせを行う
4月19日	間下丸山遺跡発掘調査について長野県教育委員会文化財・生涯学習チーム、長野県諏訪建設事務所整備チーム、(財)長野県建設技術センター、岡谷市教育委員会生涯学習課の四者による保護協議を行う
5月30日	調査対象地内において発掘調査を開始する
9月25日	現場作業を終了する
9月26日	出土資料整理作業に入る
平成19年3月15日	間下丸山遺跡発掘調査報告書上梓
3月16日	埋蔵文化財発掘調査業務委託を完了する

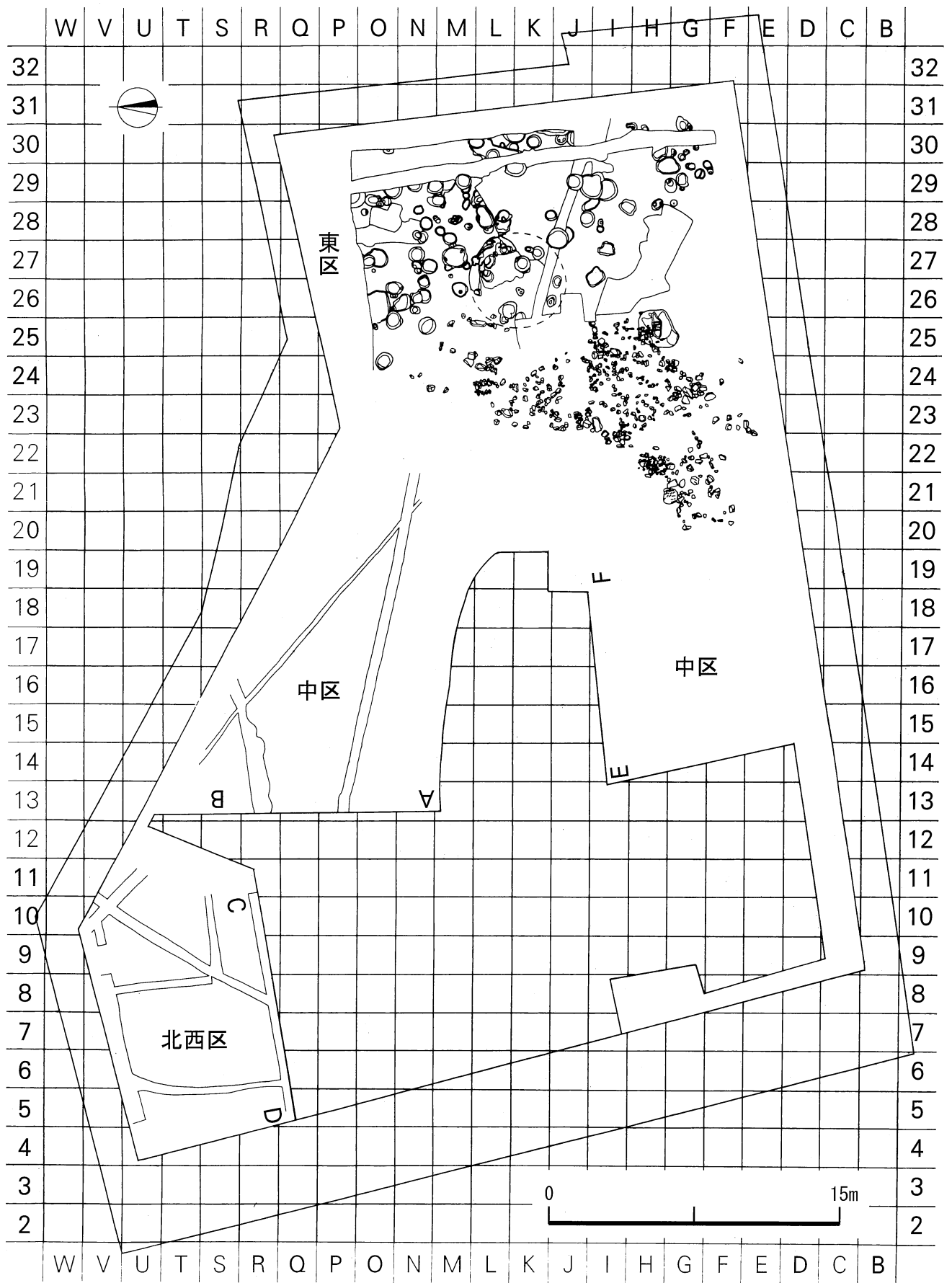
2. 調査の概要

(1) 事業抄録

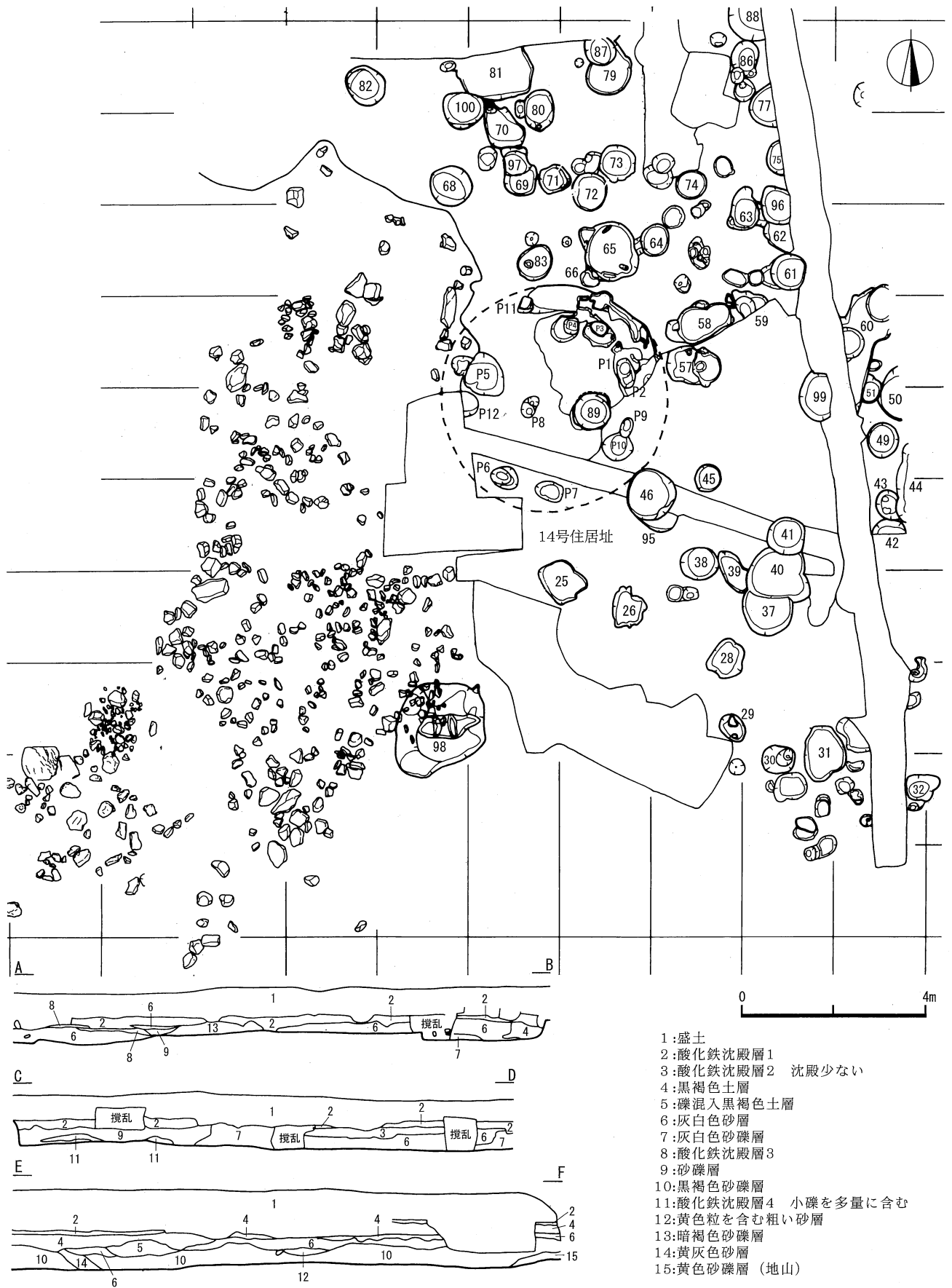
遺跡名	間下丸山（ましたまるやま）遺跡（岡谷市遺跡地図 No.83）
調査の目的	平成18年度国補総合流域防災事業



第2図 遺跡の立地と調査区位置図 (1 : 5,000)



第3図 調査区全体図 (1:280)



第4図 遺構全体図 (1:120)

事業主体者 長野県諏訪建設事務所
 発掘調査主体者 岡谷市教育委員会（生涯学習課文化財担当）
 発掘調査期間 平成18年5月30日～平成18年6月8日
 平成18年7月26日～平成18年9月25日
 （詳細は経過参照）
 遺物整理期間 平成18年10月～平成19年3月

（2）調査

調査方法

①発掘区の設定

間下丸山遺跡では平成18年度国補総合流域防災事業に伴う発掘調査が行われ、遊水地設置地点に発掘区を設定した。

②発掘地区の呼称について

調査区を北西区、中区、東区に区分し、さらに小竪穴集中部を小竪穴群とした。

③グリッド表記について（第3図）

2×2mのグリッドとし、南北方向をアルファベット、東西方向を数字にて設定した。

発掘調査面積 1486.44 m²

（3）発見された遺構

縄文時代 住居址 1棟

小竪穴 54基（内中期11、後期28）

（4）発見された遺物

縄文時代 石器

土器（中期～晩期）

弥生時代 土器（前期）

平安時代 土師器・須恵器

中世 土師器皿（カワラケ）

第1表 石器 器種別点数

石 鏃	182	原 石	538	磨石類 { 磨石	11
石鏃未製品	153	o b 剥片	1,972		{ 凹石
尖頭器	2	石 匙	5	石 皿	4
石 錐	37	打製石斧	32	砥 石	6
ob不定形石器	597	磨製石斧	20	石 棒	1
両 極	1,180	石 錘	28	不定形石器	14
石 核	110				

第2表 土器片点数

時期\地区	東区小竪穴群	北西区・中区・東区砂礫層	14号住居址	小竪穴
縄文時代中期	11	43	5	41
中葉	241	578	23	111
後葉	62	48	2	59
後期	144	354	12	124
後期～晩期	41	129	0	4
晩期	3	26	0	2
弥生時代	0	19	0	3
平安時代	0	38	0	4
中世	0	171	0	0
縄文時代 無文	1,582	3,959	74	694
縄文	37	56	7	73
底部	46	144	2	20
不明	71	175	21	132
一括土器及び図化した土器	14	45	1	13
計	2,252	5,785	147	1,280

第3表 土製品・石製品点数

土 偶	1	ミニチュア土器	8	異形石器	1
土器円板	5	垂 飾	1	滑 石	1
土器片錘	16	耳 栓	1		
管状土錘	2	舟形土製品	1		

(5) 資料整理の覚書

①注記——遺物・図面

遺跡 No. 間下丸山遺跡 83

遺物 No. 遺跡 No.・次数・グリッド・遺物取り上げ No.・出土遺構 No.と層位

なお、報告書中の一覧表（属性表等）では遺跡 No.を省略している。

略 号 注記上の略号

グリッド グリッド名を示すアルファベットと数字で示し、グリッドを示す G は省略している。

遺構記号 住居址－H

小竪穴 - P (数字の後に付す)

柱穴 - P (数字の前に付す)

層位 (土層名) 略語

住居址覆土	フ	灰白色砂礫層	サレキ
住居址床上または床直	床	黄灰白砂礫層	サレキ
灰白色砂層	スナ	灰黄色砂層	スナ
酸化鉄沈殿層	サン	灰色砂層	スナ
黒褐色砂礫層	クロカツサレキ	床土	トコ
赤褐色土	アカカツ	黒褐色土	クロカツ
黄褐色砂礫層	サレキ	茶褐色土	茶カツ
暗褐色砂礫層	サレキ	攪乱	カク
黄灰色土	キハイ	盛土	モリド
灰白色砂層酸化鉄沈殿層	スナサン		

②石器実測図と属性表

石器全点の実測ができなかったため、黒耀石製品以外の遺物について実測図化及び掲載を行った。その他については石器属性表に記述して掲載した。

図化にあたっては、一部はスケッチグラフを使用し、その他は写真实測である。写真は、株式会社シン技術コンサルに委託して撮影し、実測図化は岡谷市教委が行った。属性表に見る観察項目、計測値の凡例については「梨久保遺跡」第V章第2節(昭和61年 岡谷市教育委員会)によっている。

石材の略号は以下のとおりである。

黒耀石	ob	緑色凝灰岩	緑凝	砂質片岩	砂片
チャート	ch	緑色片岩	緑片	花崗岩	花
ハリ質安山岩	ハリ安	頁岩	頁	斑レイ岩	斑
シルト岩	sh	泥岩	泥	閃緑岩	閃
水晶	cr	粘板岩	粘	蛇紋岩	蛇
安山岩	安	泥質片岩	泥片	軽石	軽
硬質安山岩	硬安	砂岩	砂	滑石	滑
凝灰岩	凝	硬質砂岩	硬砂		

その他、計測値の()は残存値であることを表す。

③土器実測図と観察表

土器は、遺構の所属年代を明示する意味で、図化できる程度の残存状態にあるものは極力、実測図化・掲載に努めた。図化にあたっては、文様の拓本による図示、無文土器の実測の一部を除いて、株式会社シン技術コンサルの写真实測(スリット写真トレース)によっている。委託は写真撮影までで、図化はすべて自力で行った。

文様表現は沈線と、隆線の違いを線の太さによって表現している。刺突文は施文具の違いや、刺突と押し引きの差、また縄文は撚りの違いなど完全に表現できないので、観察表の説明を併読されたい。復原部分の文様はわずかな欠損や文様が明らかな部分は復原トレースしているが、推定部分などはト

レース線を変えている。断面については、推定または部位を変えてつないでいる場合、線を切って示している。

土器の観察表は図版中にそれぞれ掲げた。計測値の（ ）は推定値ないし残存値。高さは口縁部まで、把手がある場合は頂部までを併記、口径・底径は最大値である。省略記号は「縄」は縄文時代を意味し、「前」は前期、「中」は中期、「後」は後期、縮尺は図版ごとに明示している。

土器の時期区分については「梨久保遺跡」第V章第1節（前掲）の第11表に沿って区分している。

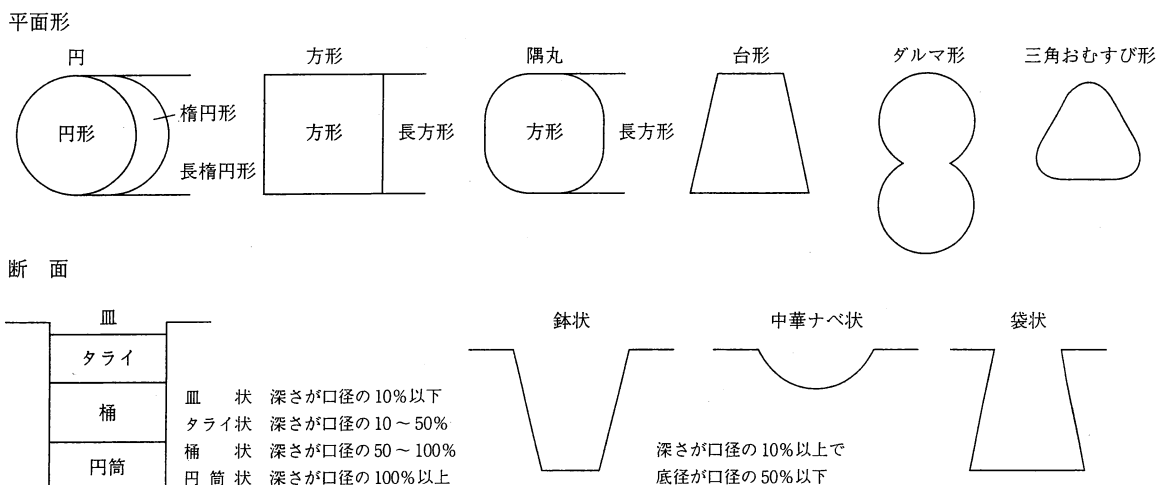
④住居址一覧表

記載内容に特筆事項はない。

⑤小竪穴一覧表

特殊な例を除いて一覧表にまとめた。番号順に並べている。平面形、断面形については分類基準を基本的に「扇平遺跡」（1974 岡谷市教育委員会）、具体的に「梨久保遺跡」（前掲）によるが、図示すると第4表のとおりである。

第4表 小竪穴平面形及び断面形模式図一覧



⑥遺構図

遺構図中の略語は以下のようにした。

F 焼土及び炉

S 石

P 土器

C 炭化物

数字P 小竪穴（例 810P：遺構図中の小竪穴 No. はPを省略している）

P数字 柱穴または小穴（例 P1）

⑦報告書執筆にあたって

- ・住居址は「住」と略している場合が多い。（例 1住→1号住居址）
- ・小竪穴は「P」の略語を用いて記している。（例 100P→小竪穴 No.100）

3. 調査組織

(1) 発掘調査組織

平成18年度国補総合流域防災事業に伴う間下丸山遺跡発掘調査は平成18年5月にスタートした。発掘作業従事者は長・短期の差はあるが、大部分の方々が継続して参加、その数は18名にのぼる。

事務局	北澤 和男 (教育長)	宮坂 英幸 (教育部長)	宮坂 春夫 (生涯学習課長)
	会田 進 (生涯学習課副参事)	小坂 英文 (同主査)	宮坂 昌代 (同主事)
調査員	林 賢	山田 武文	
調査補助員	塩沢 大地	中田 里佳	
発掘員	鮎沢 勝一	伊藤 雪子	今井 敏男
	興石 甫	清水 弘子	武井 宏樹
	林 順子	丸山ゆき子	宮坂あさ子
			桃沢 良三

(2) 遺物整理作業分担

黒耀石製石器・剥片・未製品・黒耀石原石	河原喜重子	塩沢 大地
その他黒耀石以外の石器・剥片	河原喜重子	
土器	山田 武文	宮坂 昌代
土製品	山田 武文	
土器復原	岡谷市土師の会	
	宮沢 光男	笠原 鈴子
	興石 甫	
土器実測・トレース	宮坂あさ子	遠藤 博美
石器実測・トレース	河原喜重子	林 靖子
	塩沢 大地	中田 里佳
	今井 陽子	
土製品・トレース	山田 武文	宮坂あさ子
遺構図トレース	清水 弘子	宮坂あさ子
拓本採取	宮坂あさ子	
図版作成	河原喜重子	宮坂あさ子
	清水 弘子	山田 武文
	塩沢 大地	宮坂 昌代

(3) 報告書執筆分担 (主たる記述)

a 石器

石器属性表	河原喜重子	塩沢 大地
黒耀石製石器・石器未製品等属性表	河原喜重子	塩沢 大地

b 土器・土製品

土器観察表

山田 武文 宮坂 昌代

土製品

山田 武文

c 遺構

住居址

宮坂 昌代

小竪穴

山田 武文

d 本文執筆

第1章 1. 調査の経過

小坂 英文

2. 調査の概要

宮坂 昌代

3. 調査組織

宮坂 昌代

第2章 1. 遺跡の環境

山田 武文

2. 周辺の遺跡

山田 武文

第3章～4章 (各項文末参照)

第2章 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の環境

岡谷市は諏訪湖北地区の西部を占め、湖北の西壁を成す塩嶺山塊や北壁の長地山塊などの山地、その山麓とそれに続く段丘状の丘陵地帯、横河川がつくった広大な扇状地、諏訪湖沿岸や天竜川沿岸及び中小の河川の流路に沿ってわずかに見られる沖積低地の大きく四つに分けられる。これらのうち、沖積低地には今のところ遺跡の存在が知られていない。

間下丸山遺跡は、西山山地の山麓線と塚間川の間段丘上ほぼ中央部西側にある。この段丘は標高770～820 m、幅200～500 mで南北に細長く連なり、三沢勝衛によって塚間川段丘と名付けられた。塚間川との比高差5～10 mの微高地で河成段丘ではなく、水準点検測成果から塚間川西岸地域の隆起活動が認められ、大地の隆起によって形成されたと考えられている。ここに大川などの河流堆積物が載って段丘を形成している。このことは横河川扇状地の砂礫層柱状断面図からも、同質砂礫の標高が東岸より西岸が数m高く、地盤運動の差と考えることができる。

また、段丘上には北から今井十五社、旧焼場跡、間下墓地、堂山、長塚墓地の小丘が南北に配列し、西側には間下丸山、岡谷丸山の小丘がある。

今回の調査区は、前述の通り、段丘ほぼ中央部西側にあたり、すぐ西を大川が流れている。調査区のおよそ大半は砂礫層が堆積し、河川敷であったと思われる。東側に一部ローム層が見られ、ここに小竪穴群があった。

2. 周辺の遺跡

塚間川段丘から西山山地山麓には、間下丸山遺跡周辺に多くの遺跡が知られている。これらは段丘上、山地山麓、段丘低地、天竜川沿岸に分けられ、それぞれに特色をもつ。

段丘の先端部は二つの半島状に突き出し、東は海戸、西は岡谷丸山遺跡がある。そこから北に隣接して天王垣外、西に横道遺跡と弥生時代中期の著名な遺跡が広範囲に広がる。さらには北には、禅海塚、外畝、北海途遺跡があり、中央自動車道岡谷インターチェンジの中島A、中島B遺跡へと至る。この段丘上の南半部分は長期に利用され、縄文時代～中世に至る複合遺跡が多い。特に海戸、岡谷丸山遺跡は、縄文時代草創期から中世に至る各時代の遺構、遺物が発見され、天竜川をさかのぼった人々の諏訪への入口として重要な位置を占めていたと思われ、各地との交流を物語る遠隔地の土器が発見されている。

西山山地山麓には、月見ヶ丘、間下化木、ウツギ、滝の沢、小部沢遺跡など縄文時代前期末～中期初頭、あるいは中期後葉の時期に属する多くの高地性小規模遺跡が点在する。中でも下り林遺跡は縄



第5図 周辺の遺跡 (1 : 10,000)

文時代早期から中期初頭の遺跡として著名である。山地山麓には中央道長野線が走り、それに伴う発掘調査では、大久保B、下り林、西林A、大洞、膳棚、柳海途遺跡が調査され、段丘上の中島A、中島B遺跡を含め西山山地および周辺の状態を明らかにすることとなった。

天竜川沿岸では左岸に橋原遺跡がある。昭和53～55年にかけて行われた調査では、弥生時代後期の大集落と多量の炭化米が発見され、該期の様相の解明に重要な遺跡である。

間下丸山遺跡は、『諏訪史第一巻』（以下、諏訪史一）に「土器（厚・弥）、土偶顔面、石皿（脚付）、砥石、打石斧、磨石斧、石棒、石鏃」など豊富な遺物の出土が伝えられている。平成7～9年にかけて隣接する禅海塚遺跡とともに調査され、縄文時代中期中葉から後葉、古墳時代、平安時代の住居址が発見されている。

3. 調査区の土層について

図示した土層は、中区及び北西区におけるセクション図である（第4図）。

遺構が集中する東側部分は調査区の約5分の1にあたり、近代の建物造成整地により削られたがローム層上に黒褐色土、赤褐色土、茶褐色土が厚さ約20cmのこっていた。色調は酸化鉄の含有量による違いであり、同一層と考えられる。遺物の包含はこの層中である。小竪穴の埋土は茶褐色土が基となり、そこに種々の含有物が見られ分別される。

遺構群の西側は砂礫層が堆積する河川敷ないしは河床で、調査区の約5分の4を占める。1層は造成時の盛土であり、2層及び3層は水田であった時の床土で人為的に敷かれている。4層以下は堆積土と考えられ、4層中に遺物の含有はほとんどない。5層以下は砂礫層のバリエーションで、酸化鉄や黄色土の混入による分別である。砂礫層中に遺物を含有するが、層位による遺物の時期差はなく、縄文中期～晩期及び弥生時代の遺物が5～14層中に混在する。また、カワラケが6、7層中に見られるが、この層中にも縄文土器が混在する。

地山と考えられるクリーム色に近い黄色の粘土に砂礫を含む層は不透水層で、8月の集中豪雨では調査区が池となり、この層上に湧き出してきた水が抜けずポンプアップをしたほどである。

(山田)

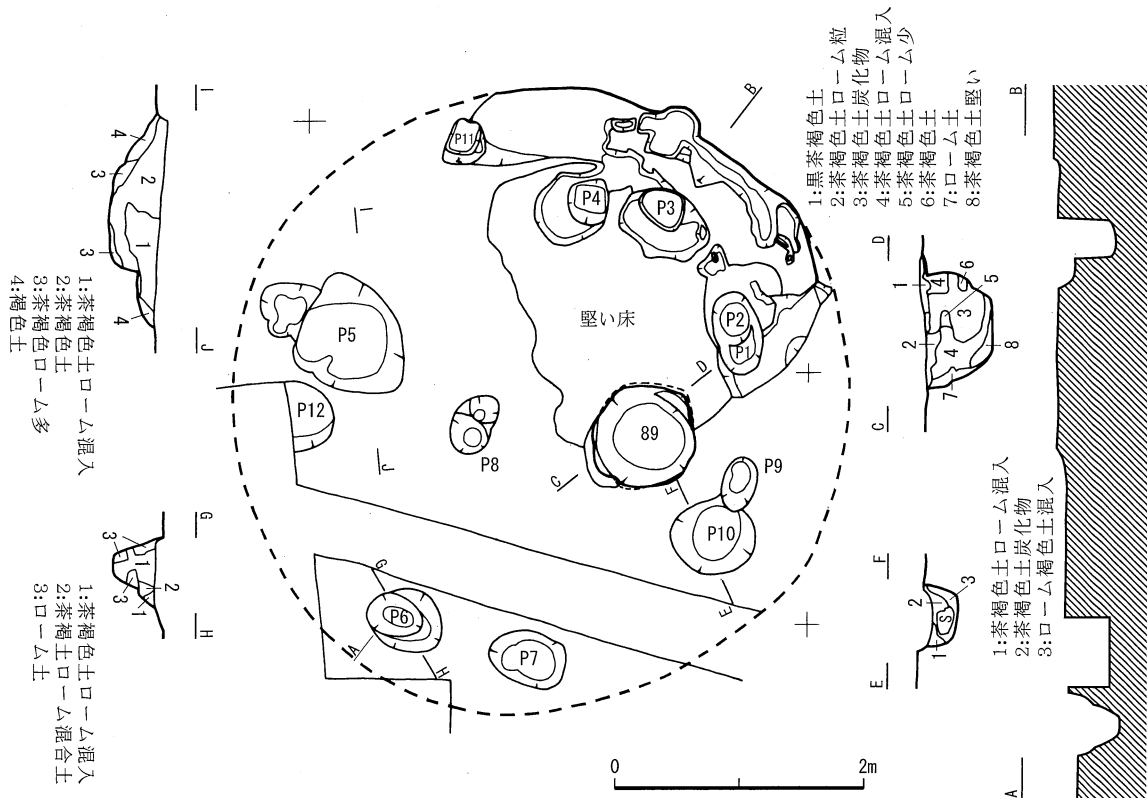
第3章 遺構と遺物

1. 住居址と遺物

(1) 14号住居址

調査の経過 本址は東区小竪穴群中央部やや西寄りに位置する。ローム層上面で遺構検出を行い、当初は小竪穴群の一部と捉えていたが、小竪穴を半截しようとしたところすぐにタタキ締められた床面が確認され、これを14号住居址とした。住居址南西部側は攪乱により床面はのこっていない。床面と認められたのは全体の3分の1程度であった。調査開始時点では、P1、P3、P5、P6、P7、P10は小竪穴として捉えていたが、14住の全体像を検証する過程で柱穴と確認されるようになった。炉の跡は見つからず、床に被熱した跡もない。土器は薄い覆土中にパラパラと散在していた。

遺構 竪穴の規模は直径約5mの円形の住居址と推定される(第6図)。壁は最大高6cmと低く、なだらかに傾斜し、残存部分は北東側に約1.5mと短い。P6、P7が入口に伴う施設の柱穴と考えられ、出入口は南西側と推定される。北東側2×2mの範囲にロームを堅くタタキ締めた床面を確認した。周溝は北東側側壁際に若干のこるのみである。柱穴と確認できるのは8基で円形に配列され、支柱穴はP1・P2、P3・P4、P5、P10と考えられる。P3、P4、P6では貼床が確認されている。また、P1、P3、P4は柱穴の中に石が入っていたが、根固めに使用されたものか、柱の高さ調節のような



第6図 14号住居址実測図 (1:60)

役割をしたものか確認できなかった。炉は見つかっていないが、P3、P4の間30×14cmの範囲に焼土が確認された。住居内にある89Pは中間が少し膨らむタル状をしており、西側部分に三日月状に貼床が検出された。

遺物 覆土はごく薄く、土器の在り方は小破片がほとんどで無文が多い。その中でも拓影図化できたものは第10図7である。小破片ながらも縄文時代中期中葉から後期前葉と推定される土器が多い。土器片は住居址中央部に多く、使用されていたものが残存するのではなく、住居廃絶後の埋土中に混入したと考えられる。そのことから本址は縄文時代中期後葉以前と考えられるが、決定する材料が乏しいため所属時期は判断できない。

石器では磨製石斧（第14図60）、石片、原石碎片が出土している。その他に骨片が検出された。これは焼けて粉々になっていたため、形を判定することが難しく、何の骨なのか不明である。

（宮坂）

2. 小竪穴と遺物

今回の調査では54基の小竪穴を検出し、すべて調査区東側のローム層の見られる部分にあり、小竪穴群と呼称する。大部分を占める河川敷には発見されていない。小竪穴群の西縁辺からすぐ傾斜面となり河川敷となる。すべて縄文時代の小竪穴で、中期中葉2基、中期後葉9基、後期前葉28基、不明15基である。

小竪穴は若干の疎密はあるが、広場のような部分はなく、時期ごとの分布を見ても散在して集中する様子はない。深さ別に見ても特に集中する部分は見られず、これも散在する。唯一、41、46、57、99Pがほぼ等間隔に方形に並ぶ。ほかに方形、円弧状などの並びは見られない。

平成8、9年に行われた東方約100mの調査地点では、数基の小竪穴が住居跡間に散在し集中した在り方を示していないので、明らかに様相が異なる。住居跡群と小竪穴群の位置関係には不明なところがあり、縄文時代後期の住居跡が未発見である点も加えて集落構造を明らかにできなかった。今後の大きな課題である。

形状を見ると、平面形では円形・不整形円形11基、楕円・不整形楕円形14基、長楕円・不整形長楕円形20基、ほかに不整形6基、ダルマ形2基、不整形隅丸長方形1基で、円・楕円・長楕円形が中心となる。断面形状はタライ状33基と6割を占め、以下楕円・皿状各8基、鉢状・袋状各2基、不明1基となり、浅めの穴が多い。口径は60～100cm36基と7割を占め、100～150cm14基、200cm前後3基を数える。深さは整地等で同様とは言えないが、30cmまで34基、30～60cm16基、70cm以上3基、不明1基となり、ここでも浅めの穴が多いことがわかる。

これらの小竪穴はその内容から4つに分類でき、A類：一括土器を伴う、B類：集石を伴う、C類：焼土・骨片を伴う、D類：炭化物を多く含むである。次項から各類について記述を進めていく。

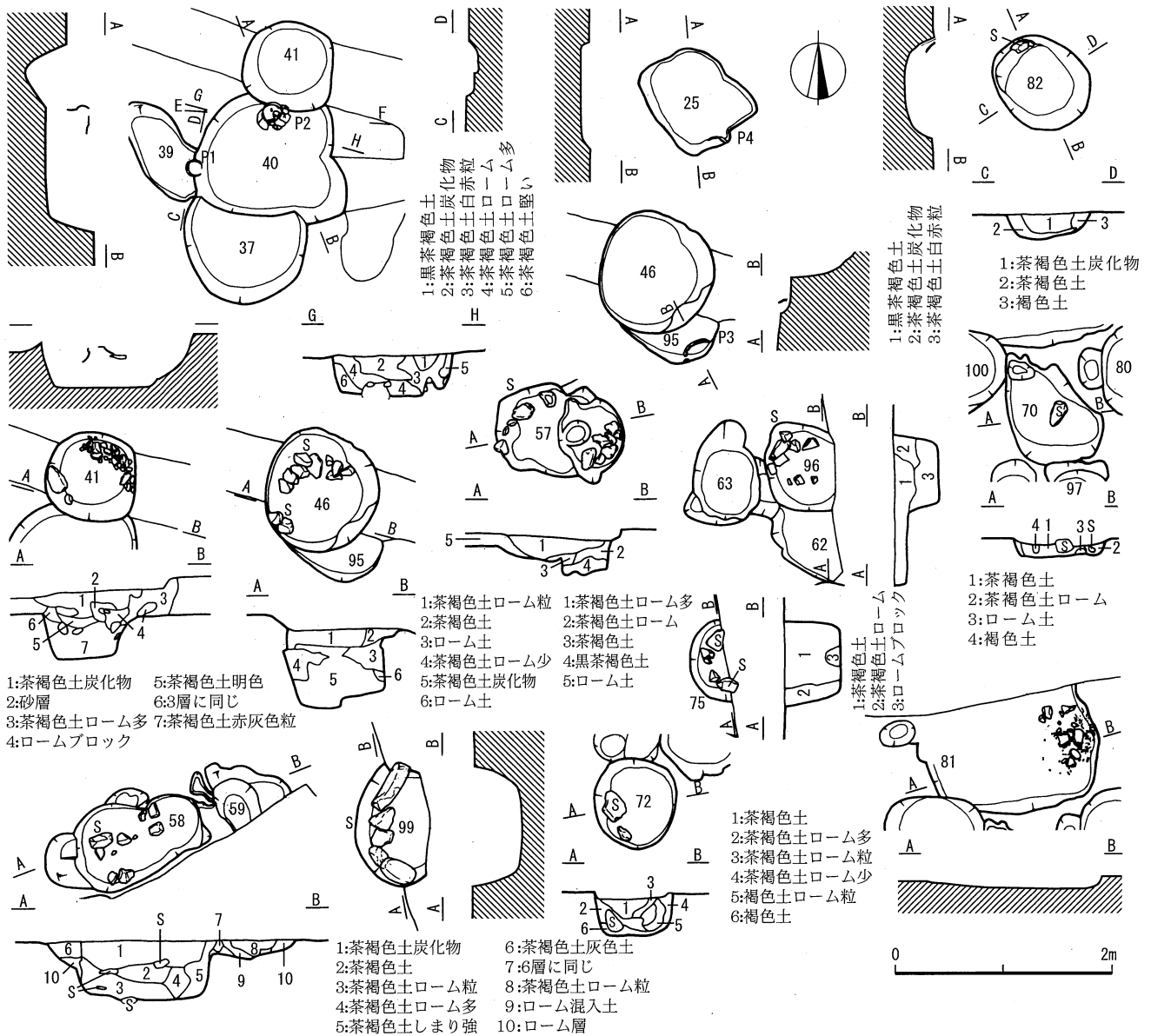
(1) A類 一括土器を伴う小竪穴 25P・40P・95P・82P

25P 小竪穴群南西部にあり、口径114×80cmの平面不整形隅丸長方形を呈し、深さ9cmを測る。付近は整地により削られごく浅い。第9図4の土器は口縁部分で、25P南東壁際に逆位で出土した。

整地の時に口縁以下をすべて壊されたのであろう。埋没状態も不明である。

40P 小竪穴群南東部にあり、口径 146 × 122 cmの平面不整楕円形を呈し、深さ 47.5 cmを測る。南で 37P 北で 41P と重複する。埋土状態から 41P 古→40P 新、37P 古→40P 新と考えられ、37P と 41P の新旧関係は不明である。40P には第 9 図 1 と 2 の 2 個体のほぼ完形の一括土器が出土し、1 は西壁際の縁に正位で出土し、口縁の一部を欠いている。2 は 41P との境付近に逆位の傾いた状態にあり東側の下に平石が置かれていた。整地時に底部～胴部の一部を壊されている。2 個体ともに 40P に伴うか明確ではなく、40P 自体が 2 基の重複と見ることもできる。埋没状態を見ると 2 基の重なりにより複雑な埋没状態を示し、2 個ともそれぞれ一挙に埋められたと考えた方が理と思われる。

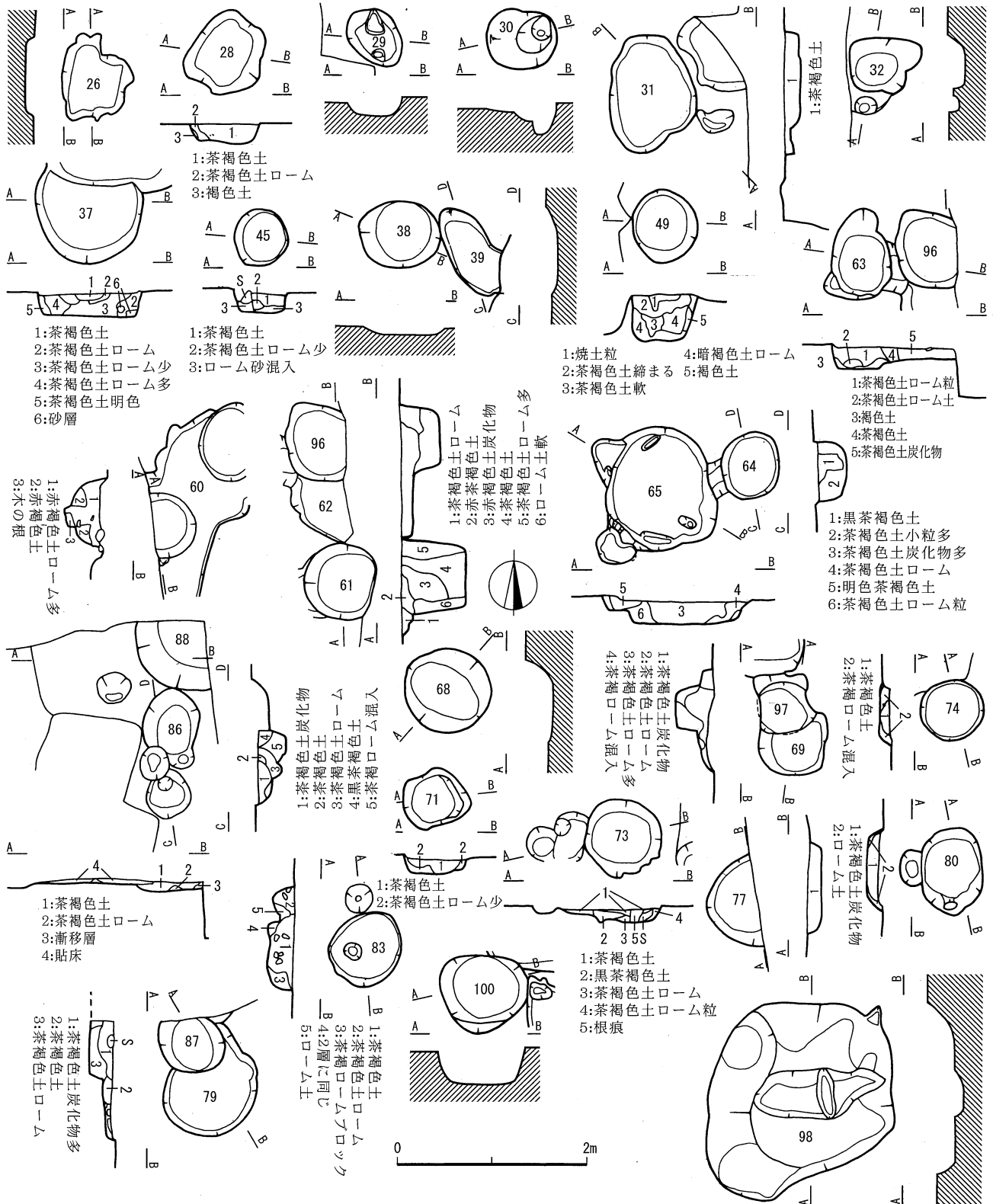
95P 小竪穴群中央南にあり、46P と重なるため残存部の計測で口径 80 × 34 cmの平面長楕円を呈すると思われ、深さ 7.4 cmを測る。これも整地により削られ、南東壁際で出土した第 9 図 3 も口縁部が逆位でのこるほかは失している。46P との新旧関係は、埋土状態から 95P 新、46P 古である。



第 7 図 小竪穴実測図その 1 (1 : 60)

埋没状態は 95P 埋土が一層であることから一挙に埋めていると考える。

82P 小竪穴群北西隅にあり、口径 94×68 cmの平面長楕円を呈し、深さ 26.5 cmを測る。第 9 図 5 は北壁際に胴部破片を横位にして縦に埋設され、図示された以外の部分はなかった。埋土は一挙に埋められたと思われる。



第 8 図 小竪穴実測図その 2 (1:60)

A 類は 25・40・95P と 82P の二つに細分される。25・40・95P は所謂「甕被り」の小竪穴で縄文時代後期に所属する。それに対し 82P は、土器が縦に埋没されて「甕被り」とは言えず、その用途・性格については不明である。

(2) B 類 集石を伴う小竪穴 41P・46P・57P・58P・70P・72P・75P・96P・99P

41P 小竪穴群中央南東寄りにあり A 類の 40P 北に重複する。口径 96 × 86 cm の平面円形を呈し、深さ 53.4 cm の桶状となる。長さ 10 cm を越える大きめの石がまばらに南壁沿いにあり、10 cm 以下の石が北東壁際に無作為に詰め込まれている。これらは小竪穴中位のレベルに上下約 25 cm の幅に見られる。埋土の状態はほぼ一層で一挙に埋められたと思われる。

46P 小竪穴群中央南にあり A 類 95P と重複する。口径 114 × 110 cm の平面円形を呈し、深さ 76.5 cm の桶状となる。石は北～西～南西の壁際に弧状に並び、ほとんど 10 cm を越える大きめの石を縦横に組み合わせて使っている。小竪穴の中位やや上のレベルに上下幅約 20 cm の厚みを測る。埋土は下部はほぼ一層で、中位～上部にはドーナツ状にローム土を混入した土 (3、4 層) で埋めている。中央の柱の周囲を固めているかのようで、石のレベルとほぼ合致する。

57P 小竪穴群中央やや北東寄りにあり、口径 122 × 88 cm のダルマ形を呈し深さ 85.5 cm の桶状を呈する。石は西壁と南東壁に並べられたようにあり、10 ～ 20 cm の大きさの石が使用され、小竪穴下部に約 20 cm の上下幅をもつ。南東壁際の石は押し詰められた様子がある。埋土は周囲から一挙に埋め戻した様子が見てとれる。

58P 小竪穴群中央やや北東寄りにあり 57P の北に隣接する。口径 124 × 78 cm を測る。2 基の小竪穴が重なり平面ダルマ形を呈し、深さ 57.5 cm のタライ状となる (西側を A、東側を B とする)。石は 58P.A では高い位置に南壁際と中央付近に相對するように置かれ、58P.B においては北西部に置かれている。石は 5 ～ 20 cm の大きさのものが使われ 58P 中位にある。埋土は一挙ないしは短時間に埋められたと考える。A、B の新旧はセクションで見ても判断がつかなかった。

70P 小竪穴群北西部にあり周囲に小竪穴がやや密集する。口径 122 × 62 cm の不整形を呈し、深さ 22 cm と浅くタライ状となる。70P の石はほかと違い中央に 20 × 10 cm の石がやや傾斜をもって置かれている。埋土はほぼ一層である。同様の状況は 14 住 P10 で見られる。

72P 小竪穴群北側のほぼ中央にあり、口径 84 × 80 cm の平面円形を呈し、深さ 41 cm のタライ状となる。石は南西壁際に 2 個あるが、壁に沿い 72P 坑底上 4 cm にある。ローム粒を多く含む埋土第 2 層をのこし掘り下げたところ、石の東側に径約 40 cm の円筒状の穴となった。セクションではうまく捉えられなかったが、これは柱痕である可能性がある。

75P 小竪穴群北東部にあり、土管埋設溝に東半分を削られている。残存部は、口径 74 × 34 cm あり楕円形を呈すると思われる、深さ 51 cm の桶状となる。石は壁に沿って円弧状に並び 10 ～ 20 cm の石が使われている。75P 内中位からやや下部に約 15 cm の上下幅をもつ。埋土は南壁際に縦にローム粒を混入する茶褐色土があるが、大部分は茶褐色土一層でほぼ一挙埋没と考える。

96P 小竪穴群東縁辺北寄りにあり土管の埋設溝に一部削られている。口径 92 × 70 cm がのこり平面楕円形を呈すると思われる、深さ 45.5 cm のタライ状となる。石は 5 ～ 20 cm の大きさで径約 60 cm のドーナツ状に見られ、中央に径約 30 cm の石のない部分がある。上部～下部まで全層に散在し、あ

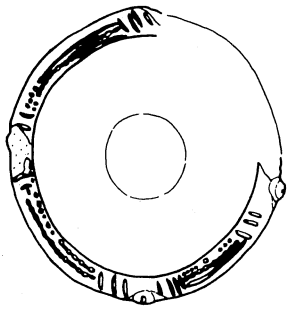


図1：整理No. / 40P - 2
遺物 No. / 83.7I29.17.40P
出土状態 / 40P西端の埋土上層中に
正位

時期 / 縄、後期前葉 I ~ II
高さ / 8.3cm
口径 / 15.7cm
胎土 / 細砂やや少なめ。黒みがかった赤褐色を呈しやや堅緻
整形内外 / 粗いヘラミガキ
文様 / ミガキ
口縁部 8 の字隆帯4カ所、頸部 9カ所、横位隆帯上は先丸のヘラ状施文具による押圧で刻む。口縁内側は円形連続刺突をし、沈線はヘラ状施文具による

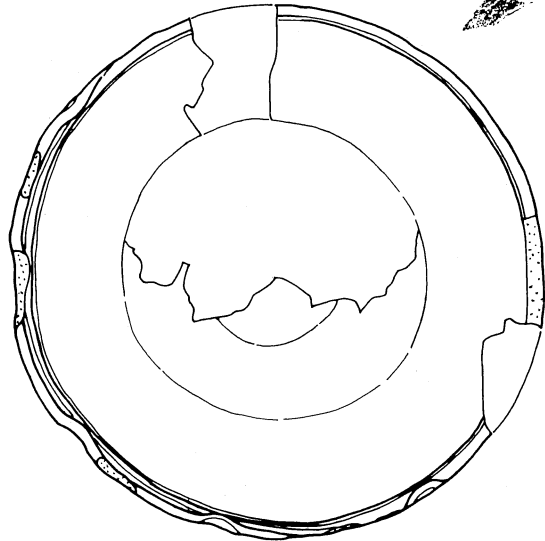
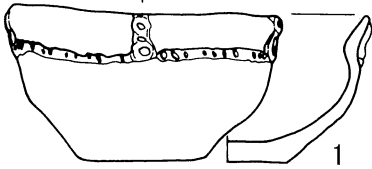


図2：整理No. / 40P - 1
遺物 No. / 83.7I29.17.40P
出土状態 / 40P北西部上半部層中に斜めに逆位

時期 / 縄、後期前葉 I ~ II
高さ / 16.8cm
口径 / 28.4cm
胎土 / 細砂、雲母を含む。くすんだ褐色を呈しやや堅緻
整形内 / 頸部上はミガキ横方向。頸部下は粗い横のヘラナデ
整形外 / 口縁部から胴上半は横のミガキ。胴下半は縦、横のミガキ
文様 / 無文。口唇部は指頭押圧が推定10カ所付き、口縁内側は先丸の施文具による深い沈線



図3：整理No. / 95P - 1
遺物 No. / 83.7J28.16.95P
出土状態 / 95P南東際に逆位

時期 / 縄、後期前葉 I ~ II
高さ / (4.8cm)
口径 / (27.4cm)
胎土 / 細砂、雲母少量含む。茶褐色を呈し堅緻
整形内外 / ていねいなヘラナデ
文様 / 口唇の指頭押圧4カ所か。外面無文。内面はヘラ状施文具による横C字状沈線、横位沈線と短沈線が描かれる

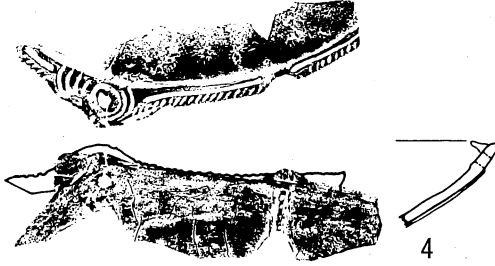


図4：整理No. / 25P - 1
遺物 No. / 83.7I27.9.25P
出土状態 / 25P南東壁際に逆位
時期 / 縄、後期前葉 I ~ II
高さ / (3.5cm)

胎土 / 細砂、雲母微細片多く含む
整形内外 / ミガキに近いていねいなヘラナデ
文様 / 口唇の舌状指頭押圧は数不明。波状線で穿孔する。垂下する細隆帯上の連続押圧はヘラないしは丸棒状の施文具を使用。内面は、ヘラ状施文具により同心円弧状、横一条の沈線、斜方向の短沈線を描く



図5：整理No. / 82P - 1
遺物 No. / 83.7O24.3.82P
出土状態 / 82P北西壁際に沿うように縦に埋設

時期 / 縄、中期後葉 II ~ III
高さ / (18.0cm)
胎土 / 細砂、雲母を含む。赤褐色を呈しやや脆弱
整形内 / 粗いナデ
文様 / 綾杉状太沈線は浅く、先弧状の施文具による
備考 / 内側に炭化物付着する



図6：整理No. / 81P - 1
遺物 No. / 83.7O26.8.81P
出土状態 / 81P内に破片散在

時期 / 縄、中期後葉 II ~ III
高さ / (8.8cm)
胎土 / 細砂、淡い赤褐色を呈し堅緻
整形内 / ナデ
文様 / 先の尖った施文具により隆帯脇の垂下する波状沈線と横位の沈線が描かれる。地文はLR縄文
備考 / 内側全面にスス付着が見られる

第9図 小竪穴出土土器実測拓影図 (1:4)

るレベルにまとまることはない。埋土は上下二層に分かれ一挙埋没と思われる。

99P 小竪穴群東縁辺部ほぼ中央にあり、土管埋設溝に東半分ほど削られている。残存は口径90×46cmで平面長楕円を呈すると思われる、深さ36.8cmのタライ状となるが、本址もゴミ穴内にあり元はかなり深い穴だったと思われる。石は30～40cmの大きさに円弧状に壁に沿って並べられ、坑底近くまで達し厚みもある。埋土は一層だが残存が浅いため埋設状況は明確でない。

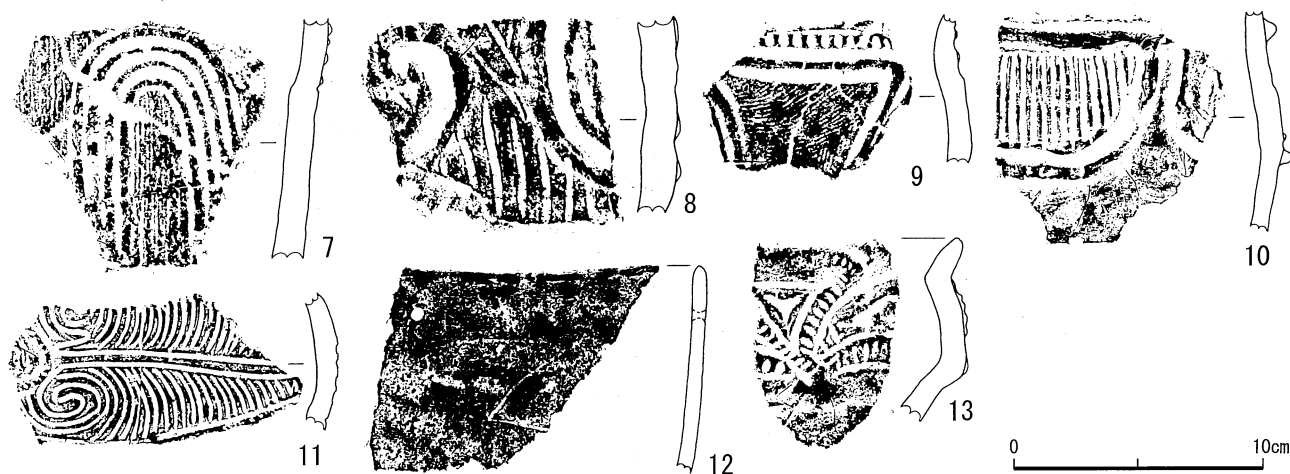
B類は集石を伴うが、70P以外は壁際に沿うように石が配され、石の大きさに違いはあるものの内側が抜ける。75Pのように石は少ないが、柱痕のように内側が抜ける例もあり、ほかに今回49Pに柱痕が見られている。

このような集石をどう考えるかは、柱材が検出されていないため、すぐに柱の根固め石とは言えない。状況的には、75Pの柱痕らしき状態や46Pの上部層に見られる三角形をした土層(3、4層)が見られること、また、40P、57Pに見られる詰め込まれたかのような石など、小竪穴内側に柱を建て、周囲に石を詰めて埋め戻した状況が感じ取れる。B類のうち、41、46、57、58、72、75、96Pはこの類ではないかと考える。

70Pについては性格は不明である。

99Pは比較的大きめの石が壁際に並べ配され、残存がわずかであったことから埋土状態を把握できずにいる。小竪穴の並びで見た時、41、46、57、99Pはほぼ等間隔で方形の各角に位置している。このことから、根固め石としてよいと考えている。

これらの小竪穴は前述以外には配列が見られず、何のための柱であったか明言できない。



No.	遺物番号	器形	部位	文様	内面整形	胎土
7	L27.26.14H7	深鉢	胴部	逆U字状に隆帯が4本 隆帯以外は縦位沈線	横方向のナデ	白色粒子多
8	H29.4.31P	深鉢	胴部	隆帯上に沈線で渦巻き ヘラ状施文具による沈線	ナデ	細砂
9	J29.9.40P	深鉢	胴部	隆帯上に押圧による沈線 隆帯と沈線により区画内縄文	ナデ	細砂
10	L26.23.85P	深鉢	頸部	楕形文 そのまわりは無文	横方向のナデ	金雲母多
11	M29.18.62P	鉢	胴部	沈線による区画 渦巻状の沈線	横方向のナデ	黒雲母が少
12	M29.18.62P	鉢	口縁部	補修孔と思われる孔	横方向のナデ	灰色、白色粒子
13	M27.18.65P	深鉢	口縁部	隆帯上に押圧による沈線 区画内沈線 三叉文	横方向のナデ	細砂

第10図 14号住居址・小竪穴出土土器拓影図(1:3)

(3) C類 骨片、焼土を伴う小竪穴 81P

81P 小竪穴群北辺西側にあつて、北半分を削られている。残存部の口径 170 × 106 cm の不整隅丸長方形を呈し、深さ 14 cm と浅く皿状の小竪穴である。

小竪穴の東部分に拳大の石と散在する焼土、集中する骨片が検出された。81P 検出段階ではここに石と土器片がややまとまってあり、土器を取り除いたところ下に骨片と焼土が南北 70 × 東西 50 cm の楕円形に現れた。石は散在し囲い状には見られず、焼土は粒または小さなブロックでありここで火が焚かれた様子はなく、形がわかる骨片はほとんどなかった。その中で形のある骨を見ると中空で細く、人骨ではない。骨片と焼土は石の下にもあり、坑底直上まで見られた。坑底も被熱した形跡はなく、ここが炉とは考えられない。用途の不明な小竪穴である。

(4) D類 炭化物を多く含む小竪穴 65P

65P 小竪穴群中央北寄りにあり、口径 134 × 118 cm の平面楕円形を呈し、深さ 29 cm のタライ状となる。65P 検出段階で埋土中に多量の炭化物が含まれ、掘り進めたところ南東部分に焼土を混入した多量の炭化物が検出された。これらの層は小竪穴南東縁から中央に向かい三角堆土のようにあったが、壁や底に被熱した形跡はなく、焼土も粒またはブロックであった。検出段階で炭化物の含有の多さで小竪穴を確認しているように、何らかの意図をもって炭化物の含有する土で 65P を埋めていることは明らかである。埋没の様子も 1 層を一挙に埋めていると思われる。

本址は火焚きをした後、穴を掘って後始末をしたのであろうか、その性格は不明である。

(5) その他

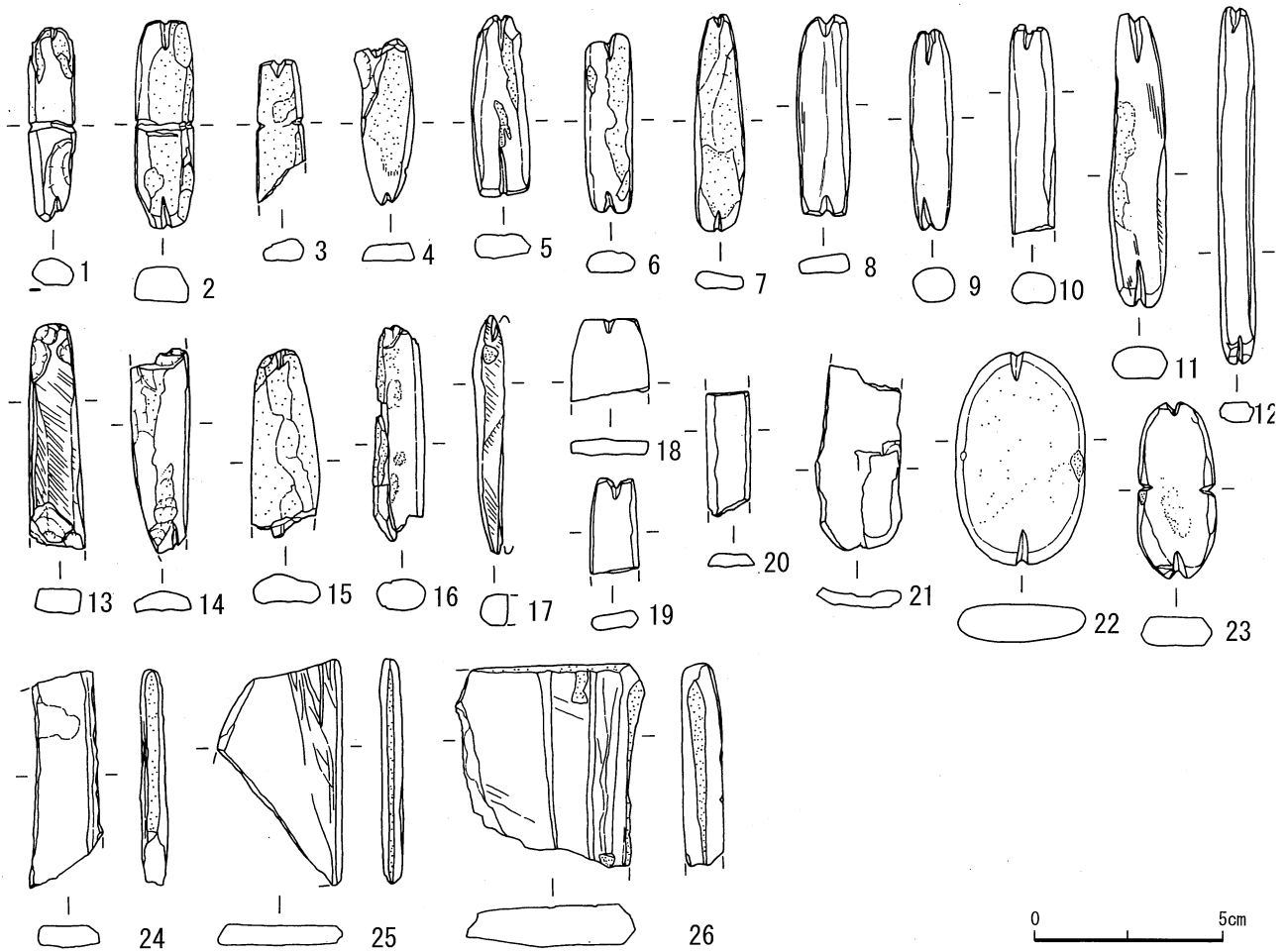
その他の小竪穴については特記すべき様相はなく、個々の性格については不明なものが多い。巻末に小竪穴一覧表を掲載した。参照願いたい。 (山田)

3. 遺物

(1) 石器

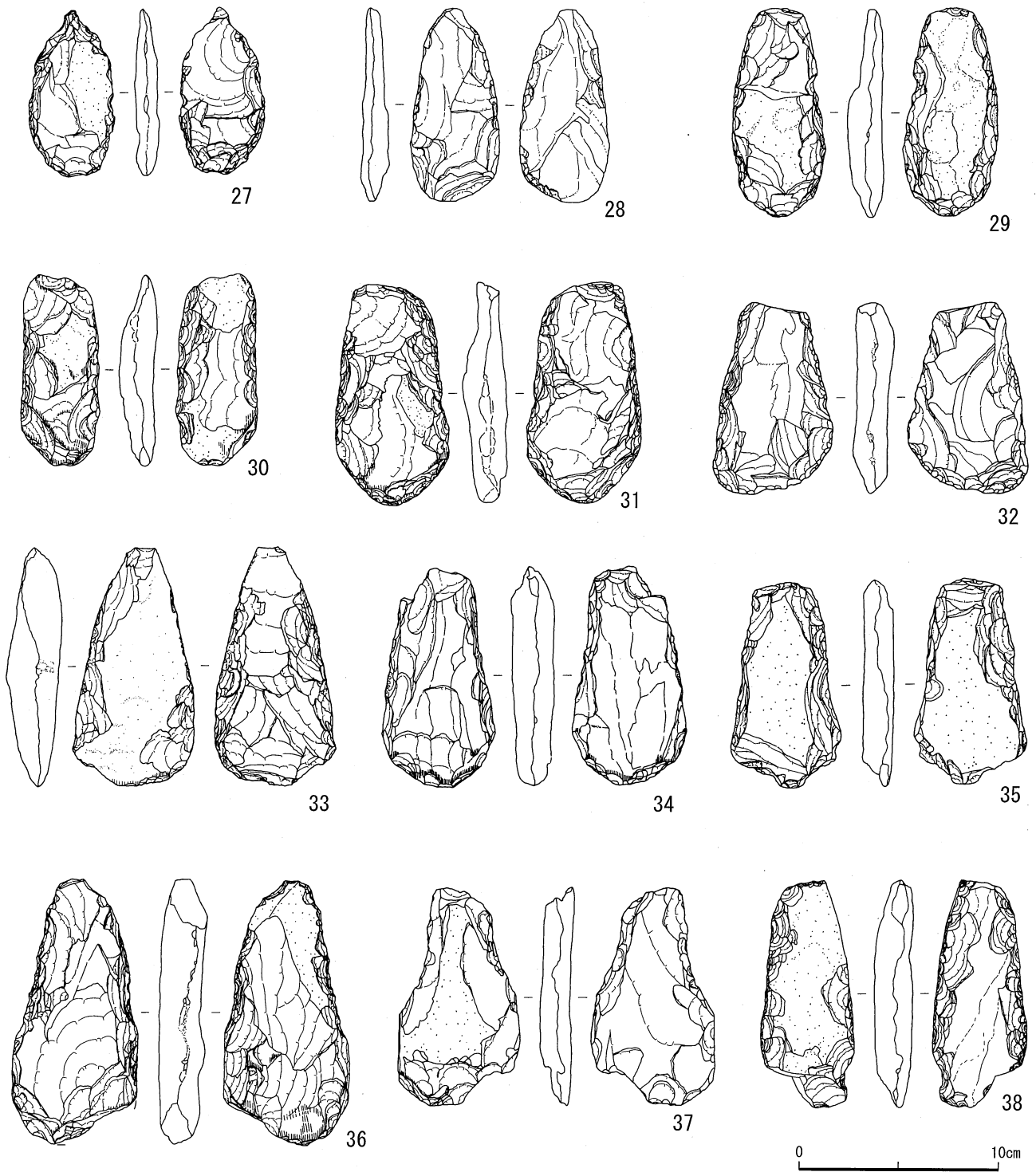
石器や剥片の分布に集中して見られる地点はなく、遺物包含層中に散在して出土している。発掘面積がそれ程広くはない点を考慮すると出土した石器の量は多く感じられる。出土した石器の点数は第 1 章の第 2 表に記載したので参照して頂き、本遺跡から出土した石器について注目される点について記述することとしたい。

小形の剥片石器 (写真 15 ~ 24) は、石材に黒耀石を主体として、その他に少数ながらチャート、頁岩、ハリ質安山岩 (下呂石) を用いて加工されている。黒耀石の色調は茶系の透明色と黒系の透明色の二つが主流であるが、青みのある「鯖」のような光沢をもった黒耀石も見られる。点数を検討する限りでは、石鏃や石鏃未製品の量が多く、石鏃製作址の存在も推測されるが、ほかの石器の組成や各器種の属性や特徴を分析するのが不十分だったため、判断は難しい。また、全体的に小形であるためか、両極打法が盛んに用いられたと思われる「両極剥離を有する石器・剥片」の量が、剥片に次いでほかの石器に比べて群を抜いて多量である点も注目される。



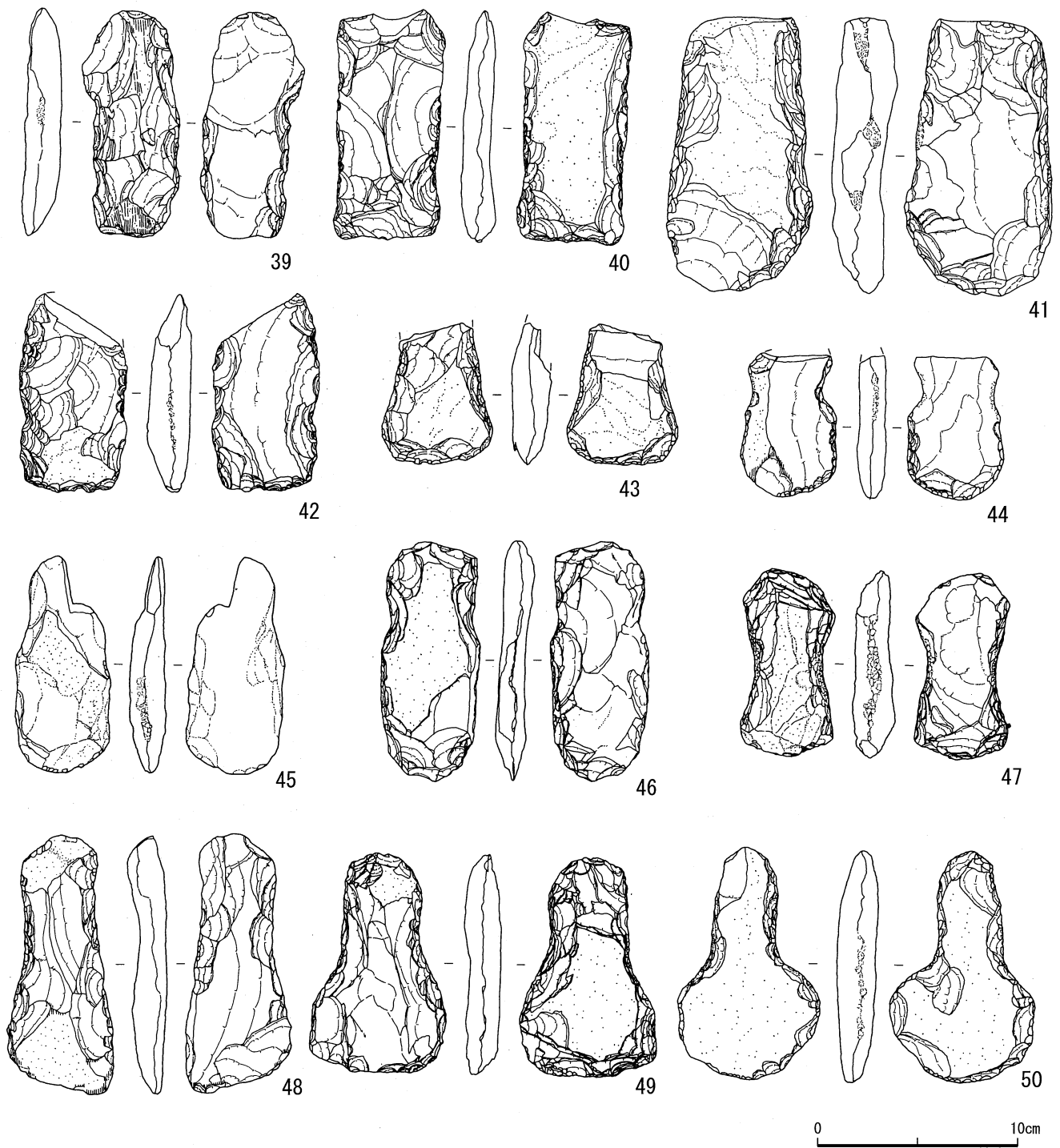
No.	遺物番号	遺物名	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考
1	K24.16ヤ	切れ目石錘	泥	51.5	12.2	7.2	5.1	長軸・短軸に切れ目、短軸は片面に溝状に切れ目あり
2	N23.11丸キヤ	切れ目石錘	泥	55.6	15.1	9.4	13.9	長軸・短軸に切れ目、短軸胴部に溝がまわる
3	M26.3茶カ	切れ目石錘	泥	(37.4)	(12.9)	(6.4)	(3.7)	長軸・短軸に切れ目
4	G23.1丸キヤ	切れ目石錘	泥	43.7	15.5	4.8	4.3	長軸に切れ目
5	N23.7ワカ	切れ目石錘	泥	48.0	14.7	6.5	7.3	長軸に切れ目、側面に擦り切り痕
6	J23.17丸キヤ	切れ目石錘	sh	48.0	12.4	6.1	6.0	長軸に切れ目
7	F16.7丸キ	切れ目石錘	泥	57.9	13.1	5.7	6.6	長軸に切れ目
8	L23.11丸キヤ	切れ目石錘	泥	53.4	13.8	5.3	6.8	長軸に切れ目、側面に擦り切り
9	I25.18丸キヤ	切れ目石錘	泥	53.7	11.0	9.2	8.9	長軸に切れ目
10	M29.25.61P	切れ目石錘	泥	(55.5)	(12.0)	8.1	(8.0)	長軸に切れ目
11	F25.7丸キヤ	切れ目石錘	泥	78.4	14.9	8.8	15.9	長軸に切れ目
12	L28.8.58P	切れ目石錘	sh	95.5	9.7	5.8	10.0	長軸に切れ目
13	J29.6.40P	—	泥	(60.6)	(14.2)	(7.2)	(9.3)	切れ目は施されず、未製品か？
14	N28.7茶カ	—	泥	(55.3)	(15.3)	(6.1)	(6.4)	未製品
15	O22.12ワカツサレキ	切れ目石錘	泥	(50.1)	(18.0)	(8.0)	(9.0)	長軸の一方にわずかな切れ目痕のこす
16	I17.4ワカツサレキ	切れ目石錘	sh	(57.6)	13.7	8.1	(8.2)	長軸に切れ目
17	J30.10P1	切れ目石錘	泥	63.7	(7.6)	(8.9)	(5.6)	長軸の切れ目
18	M24.38ワカ	切れ目石錘	泥	(21.5)	(20.7)	(5.0)	(3.7)	長軸の切れ目
19	L27.3茶カ	切れ目石錘	泥	(25.4)	(13.2)	(5.1)	(2.7)	長軸の切れ目
20	I24.14茶カ	—	泥	(33.0)	(11.6)	(4.4)	(2.2)	
21	H16.7ワカツサレキ	切れ目石錘	片	(49.2)	(23.4)	(6.2)	(7.8)	長軸の切れ目
22	F24.6丸キヤ	礫石錘	砂	56.9	34.9	10.0	30.2	
23	K24.4ワカ	礫石錘	泥	47.0	20.8	7.7	12.5	
24	M27.10茶カ	—	泥	(57.7)	(20.1)	(6.2)	(10.6)	素材を作り出したのみの未製品
25	H15.1ワカツサレキ	石錘原石	泥	(60.1)	(33.3)	(6.2)	(15.7)	
26	I15.5ワカツサレキ	石錘原石	sh	(53.9)	(50.2)	(11.0)	(41.0)	

第11図 石錘類実測図 (1:2)



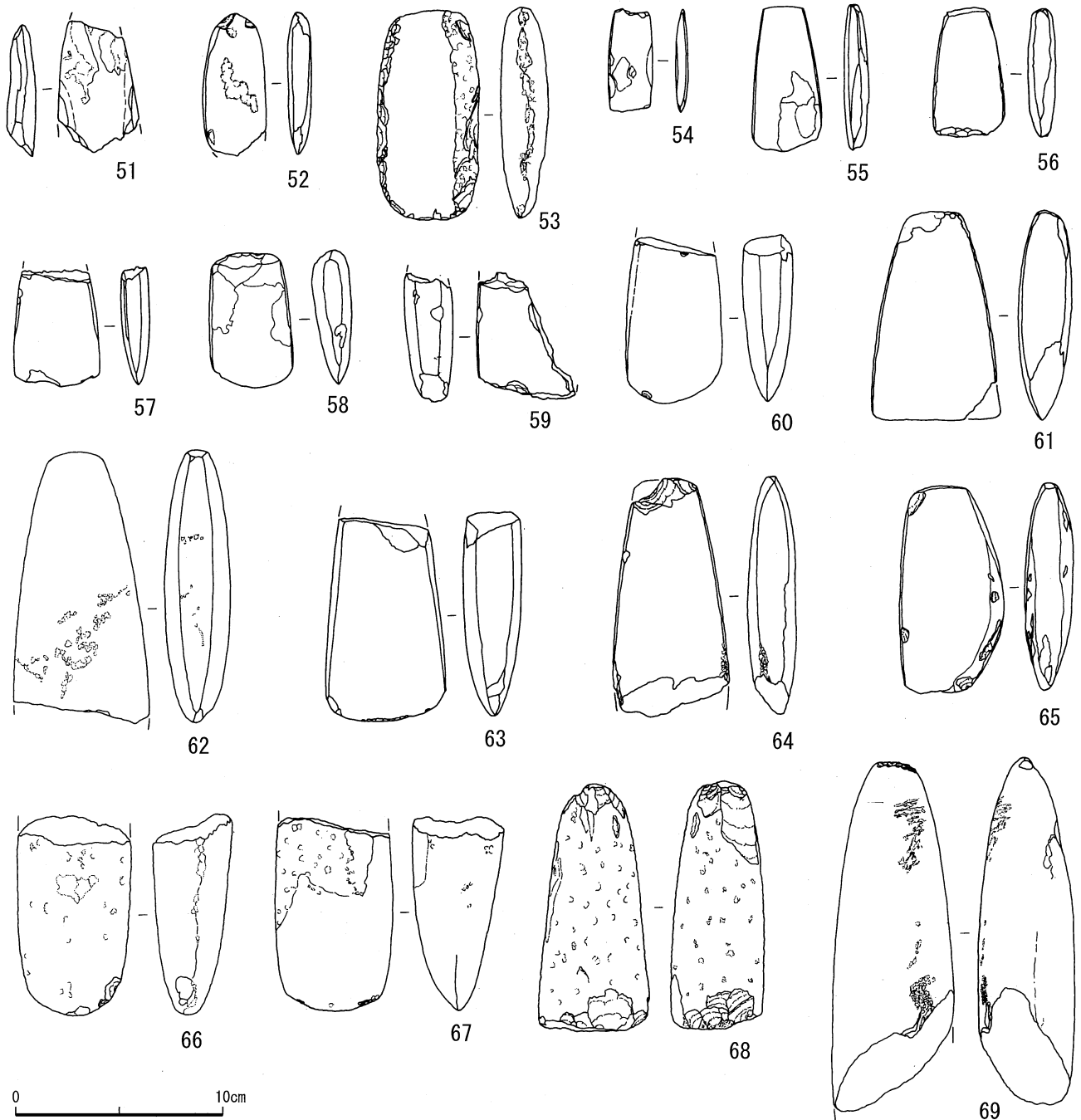
No.	遺物番号	遺物名	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考
27	O23.10カツサキ	打製石斧	頁	8.3	4.3	1.1	42.0	
28	1T.1P1	打製石斧	緑変	9.6	4.5	1.3	60.6	
29	H16.6カツサキ	打製石斧	頁	10.4	4.7	1.7	99.5	短冊形
30	H25.5茶カ	打製石斧	粘	9.6	4.0	1.7	88.4	短冊形
31	E23.1サ	打製石斧	砂変	11.1	5.7	2.0	153.2	
32	J26.3カ	打製石斧	泥	9.6	5.9	1.9	124.7	
33	L26.6茶カ	打製石斧	頁	12.0	6.0	2.5	201.0	片面に自然面のこす
34	9T.11カツサキ	打製石斧	粘	(11.0)	5.7	(2.2)	(162.4)	
35	Z139	打製石斧	緑変	10.3	5.6	1.4	121.5	
36	N24.23サツサキ	打製石斧	泥	(13.3)	(6.3)	2.2	(225.5)	
37	F23.10サツサキ	打製石斧	頁	10.9	6.2	1.4	(111.6)	
38	N23.8サツサキ	打製石斧	緑凝	(11.2)	(4.7)	(1.9)	(136.9)	

第12図 打製石斧実測図 その1 (1:3)



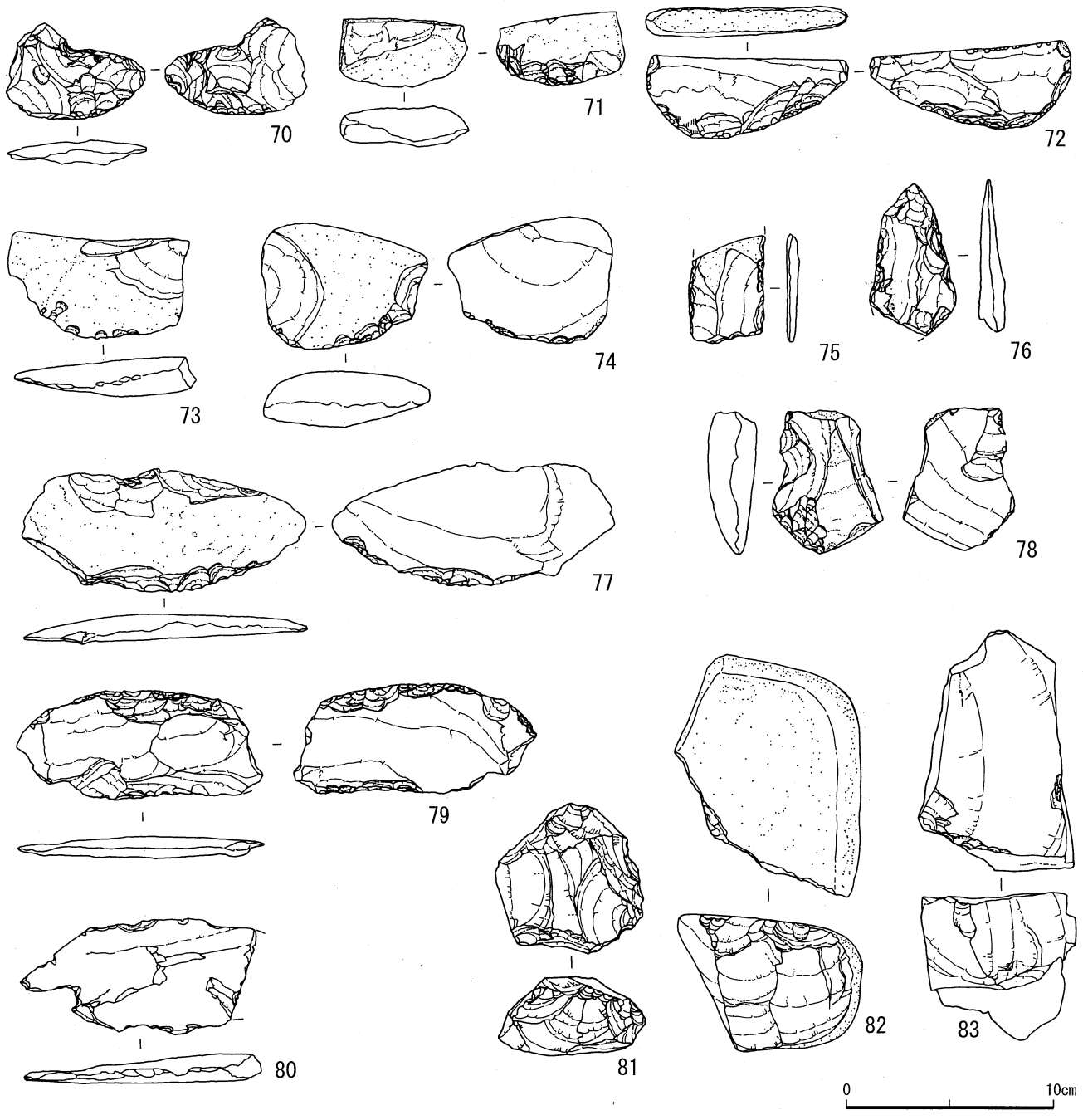
No.	遺物番号	遺物名	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考
39	G21.4㊦㊦㊦	打製石斧	泥	11.4	4.5	1.5	110.2	刃部付近片面の自然面に擦痕あり
40	H25.18㊦㊦㊦㊦	打製石斧	頁	(11.4)	5.4	1.6	(129.3)	短冊形片面に自然面のこす
41	F17.5㊦㊦㊦㊦	打製石斧	変岩	(13.7)	(7.3)	2.8	(385.8)	
42	I29.22㊦	打製石斧	砂	(9.9)	5.3	2.1	(125.2)	
43	G24.10㊦㊦㊦	打製石斧	頁	(7.1)	5.5	(1.9)	(84.3)	撥形
44	G20.4㊦㊦㊦	打製石斧	砂	(7.2)	(4.8)	(1.3)	(64.4)	両側縁にノッチ入る
45	J25.7茶㊦	打製石斧	頁	(10.8)	4.6	1.7	(104.0)	
46	I25.22㊦㊦㊦	打製石斧	頁	11.9	4.9	1.4	120.5	両側縁にノッチ入る
47	N24.19㊦㊦㊦	打製石斧	砂	9.5	4.6	2.0	109.0	分銅形
48	Z3	打製石斧	頁	13.0	5.3	1.6	122.5	側縁内湾
49	J24.11㊦㊦㊦	打製石斧	粘	10.9	6.8	1.8	138.2	撥形
50	Z.35㊦㊦㊦	打製石斧	砂	11.7	7.2	2.0	165.4	撥形片面に自然面のこす

第13図 打製石斧実測図 その2 (1:3)



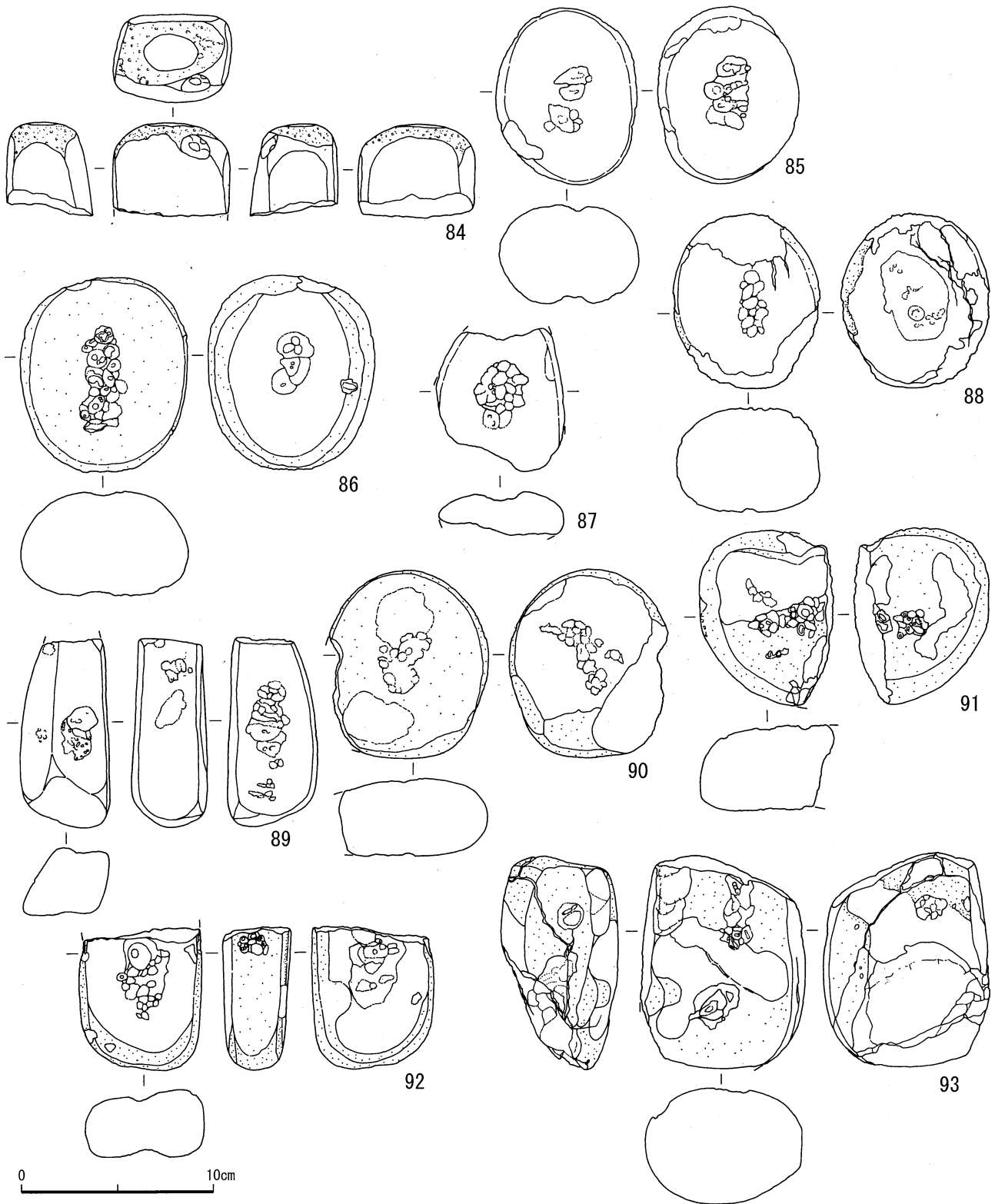
No.	遺物番号	遺物名	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考
51	E16.3カキ	磨製石斧	緑凝	(6.3)	(3.8)	(1.3)	(43.3)	素材の剥離面を器面にのこす
52	F18.5カカカカカ	磨製石斧	蛇	6.8	3.0	1.1	41.6	刃こぼれあり
53	G19.4カカカカカ	磨製石斧	蛇	10.1	4.9	2.2	189.0	製作途中、片面のみ磨かれ器面整形の敲打痕をのこす
54	F19.3カカ	磨製石斧	緑凝	(4.9)	2.1	6.0	(11.2)	
55	H19.5カカカカカ	磨製石斧	頁	(7.0)	(3.3)	1.1	45.5	
56	I27.2茶カカ	磨製石斧	緑凝	6.1	3.4	1.2	43.5	腐食著しい
57	E16.6カカ	磨製石斧	蛇	(5.6)	4.1	1.3	(53.9)	
58	L23.10カカカ	磨製石斧	緑凝	6.5	3.9	1.8	80.5	
59	I20.3カカカ	磨製石斧	蛇	(6.4)	(4.5)	(2.3)	(83.8)	
60	K26.23.54P	磨製石斧	閃	(7.9)	4.6	(2.4)	156.7	
61	G20.1カカカ	磨製石斧	蛇	10.0	(6.0)	(2.5)	(243.5)	刃部破損
62	L25.21カカカ	磨製石斧	斑	13.1	6.5	3.1	(399.6)	
63	E19.2カカカ	磨製石斧	砂	(9.8)	5.8	2.8	(267.4)	
64	G21.3カカカ	磨製石斧	蛇	11.4	5.5	2.3	(271.3)	刃部破損
65	Z22	磨製石斧	蛇	10.0	5.0	2.3	209.5	左右非対称
66	M22.10カカ	磨製石斧	緑凝	(9.8)	(5.5)	(3.8)	(320.5)	
67	I25.19カカカ	磨製石斧	緑凝	(9.4)	(5.7)	(4.4)	(360.6)	器面整形の敲打痕のこす
68	N23.5カカカカ	磨製石斧	緑凝	(11.9)	(5.4)	(4.4)	(455.2)	器面整形の敲打痕のこす
69	M24.3カカカ	磨製石斧	緑凝	(16.9)	(5.9)	(4.6)	(659.4)	

第14図 磨製石斧実測図 (1:3)



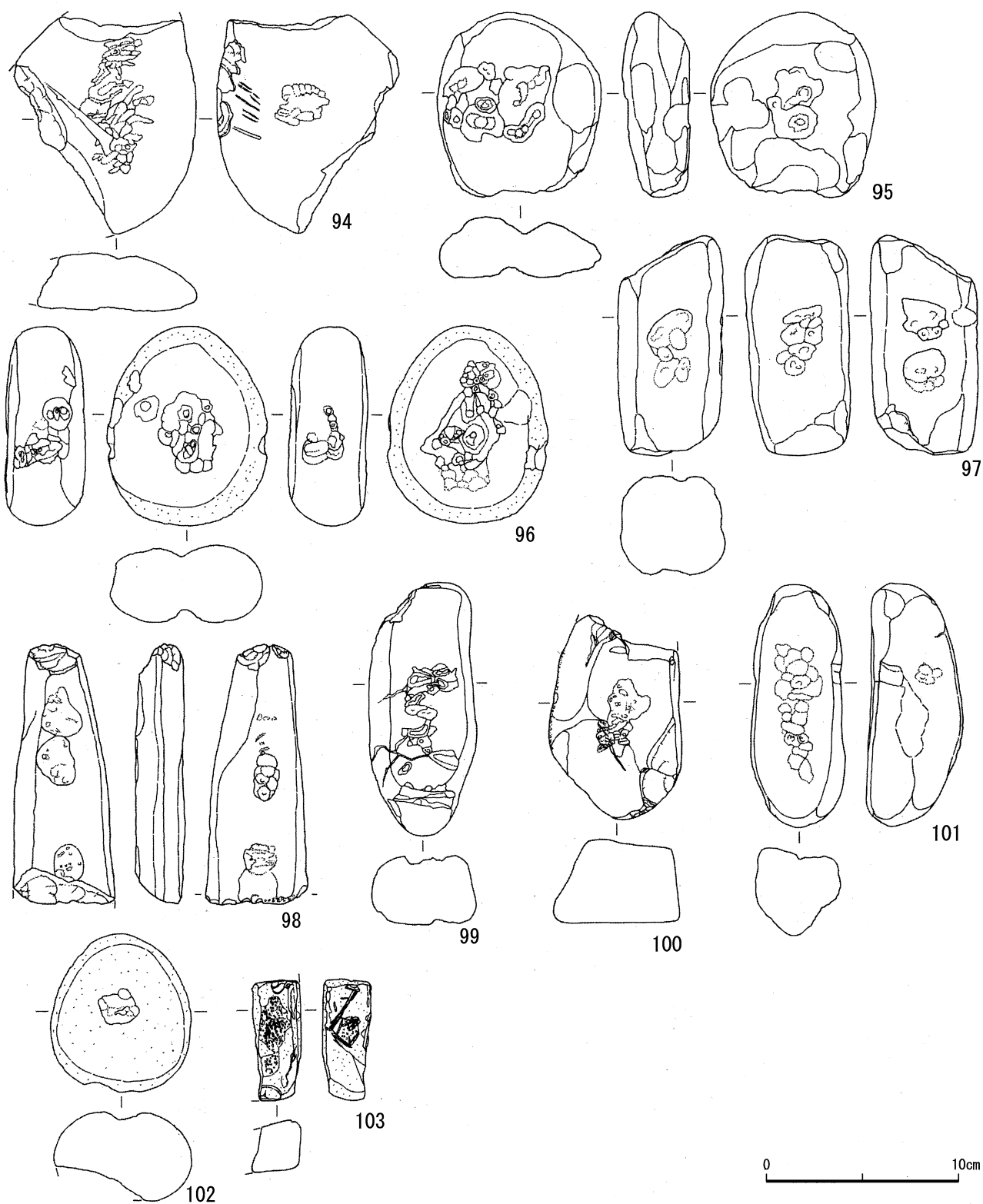
No.	遺物番号	遺物名	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考
70	E18.5ロカツサレキ	不定形石器	頁	4.8	6.8	1.2	30.1	石匙未製品か？
71	Z.318サレキ	不定形石器	泥	3.3	6.1	1.7	43.6	
72	J24.27サレキ	不定形石器	泥変	3.9	9.7	1.2	72.1	
73	H28.10ゼン	不定形石器	砂	(5.3)	(8.6)	(1.6)	(76.1)	
74	F28.4	不定形石器	砂	6.1	7.9	2.5	136.6	
75	H21.9サレキ	不定形石器	泥	(5.2)	(3.6)	(5.0)	(12.4)	
76	J23.30サレキ	不定形石器	頁	(4.1)	(7.2)	(1.3)	(32.1)	
77	N24.16サレキ	不定形石器	頁	13.6	5.9	1.1	90.3	
78	T9.24ロカ	不定形石器	頁	5.1	6.9	2.1	78.6	
79	9T.16アサレキ	不定形石器	頁	11.8	5.3	1.0	75.4	打製石斧の可能性もあり
80	O28.1カ	不定形石器	泥変	(5.5)	(11.3)	(1.2)	(73.9)	
81	G24.29	石核	頁	7.2	7.5	3.7	236.8	
82	F19.8ロカツサレキ	石核	砂	11.6	8.9	6.5	882.5	
83	I16.7ロカツサレキ	石核	頁	11.6	7.5	7.0	672.0	

第 15 図 不定形石器・石核実測図 (1:3)



No.	遺物番号	遺物名	細分類	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考
84	P21.17	磨石類	磨石	安凝	(4.7)	(6.0)	(4.4)	(205.2)	
85	N23.10カカガキ	磨石類	磨石	安凝	9.1	7.3	5.3	430.7	凹み併存
86	F23.13カキ	磨石類	磨石	安凝	10.3	8.6	5.5	634.5	凹み併存、腐食する下面に敲打による剥落あり
87	Z270カキ	磨石類	磨石	安凝	(7.4)	6.6	(2.4)	(128.0)	凹み併存
88	O22.6カキ	磨石類	磨石	安凝	9.0	7.6	5.4	449.3	凹み併存
89	Z37カキ	磨石類	磨石	安凝	(9.7)	4.7	(3.7)	(288.5)	凹み併存
90	I29.23.37P	磨石類	磨石	安凝	9.8	(8.4)	(4.1)	(468.3)	浅いアバタ状の凹み
91	G24.11カキ	磨石類	磨石	砂凝	7.5	8.7	4.4	(365.4)	凹み併存
92	L28.11.58P	磨石類	磨石	砂凝	(7.3)	(6.3)	(3.5)	(267.7)	凹み併存
93	H25.19カカガキ	磨石類	磨石	砂凝	(11.5)	8.4	(6.0)	(294.4)	凹み併存、受熱か？

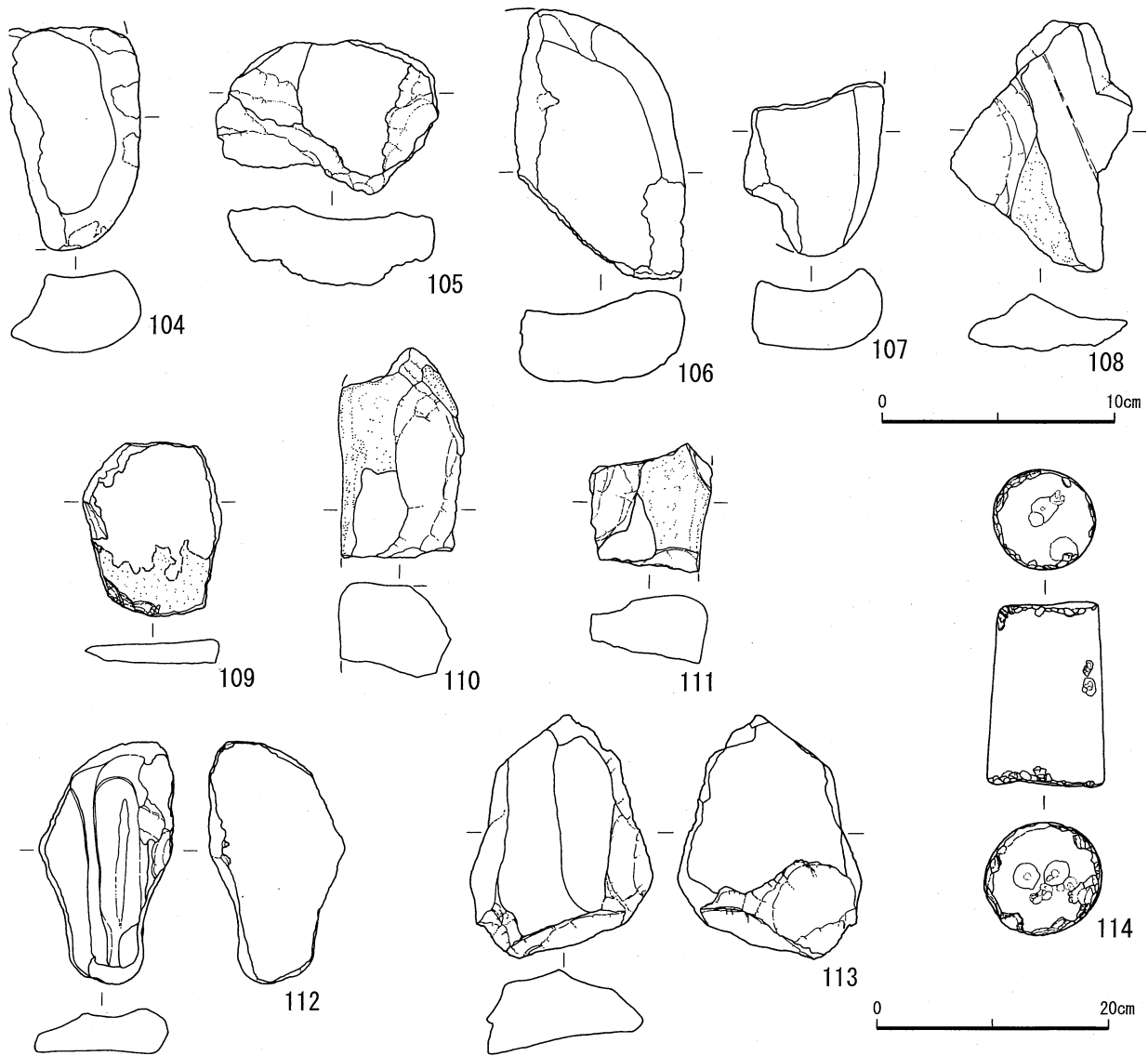
第16図 磨石類実測図 その1 (1:3)



No.	遺物番号	遺物名	細分類	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考
94	7T3Eト	磨石類	磨石	安	(11.4)	(9.4)	3.2	(362.0)	凹み併存
95	P21.18	磨石類	凹石	安	(9.6)	8.5	3.4	(241.7)	
96	H18.3カ	磨石類	凹石	砂	10.3	8.2	4.1	430.2	腐食が著しく磨耗面不明確
97	S6.10Mイ	磨石類	凹石	安	11.5	5.4	5.3	527.5	腐食が著しく磨耗面不明確
98	R7.9ト	磨石類	凹石	緑凝	(13.4)	(5.3)	(2.6)	(249.6)	下面に敲打痕か?
99	G25.7ルサ	磨石類	凹石	凝	(13.2)	(55.0)	(44.0)	(399.8)	
100	I19.6カカツレ	磨石類	凹石	砂	(10.8)	(6.9)	(4.9)	(451.3)	浅いアバタ状の凹み、側面一部に敲打痕あり
101	Z8	磨石類	凹石	安	12.6	4.9	4.7	383.1	
102	N23.6カカツレ	磨石類	凹石	安	(8.2)	7.2	(4.6)	(276.0)	
103	I27.15茶カ	磨石類	凹石	泥	(6.3)	(2.8)	(2.8)	(73.5)	浅いアバタ状の凹み、各面に打痕が散在する

第17図 磨石類実測図 その2 (1:3)

さらに各器種ごとにサイズに注目して関連性を比較検討すると、原石と石核では、石核に大きめなものが多い。剥離痕から推定される剥片は平均3cm大で、小形の石鏃、石錐、微細剥離を有する剥片の剥離素材に対応する大きさと想定される。しかし残存する石核は量的には非常に少ない。一方、石核より小さめの原石は、そのものを素材に直接調整加工が施された石器が多く見られる。原石に対応した大きさとして認められるものは、石鏃未製品のブランクを含む成形段階の石器やスクレイパー類



No.	遺物番号	遺物名	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考
104	F16.6丸キ	石皿	安	19.6	12.1	7.6	2258.0	側面に紋様が施されている可能性あり
105	F19.6ワカワキ	石皿	凝	19.0	13.0	6.6	1755.5	
106	H25.11ワカワキ	石皿	安	25.0	13.6	8.8	2860.0	
107	Z30	石皿	安	15.0	11.8	7.4	1212.1	
108	K24.14丸キ抄	砥石	砂	11.0	82.0	4.0	148.5	
109	H16.5ワカワキ	砥石	安	15.0	11.9	1.8	507.8	
110	N18.6抄	砥石	砂	18.4	10.6	8.1	2343.5	
111	Z38丸キ抄	砥石	砂	11.0	10.3	6.0	930.7	
112	F19.5ワカワキ	砥石	砂	20.8	11.8	4.2	975.8	
113	G13.12丸キ抄	砥石	砂	21.6	15.1	9.1	2263.9	
114	I25.21丸キ抄	石棒	安	15.9	10.0	9.4	2213.8	

第18図 石皿・砥石・石棒実測図（108は1：3、その他は1：6）

が想定される。そして原石の点数は多量である。本遺跡では、約3 cm大の小粒の原石を主体に原石を素材に調整剥離作業を施して石器製作を行っていた特徴がある。剥片の大きさの大半が約1.5 cm以下と小さい点も、前記の特徴を裏付けている。

各石器の特徴については、石鏃と石鏃未製品では、縄文時代中期後葉から後期前葉の土器を主体に晩期の土器片も出土している様子から、その時期に特徴のある有茎鏃や五角族などの存在を意識していたが、欠損品の中に2点見られるのみで、その他はすべて正三角形あるいは二等辺三角形の凹基無茎鏃であった。しかし、側縁はどんなに先の細い工具を用いて押圧調整を行ったのかと注視するような細かい鋸歯状をした石鏃が多く見られ、特徴と言える。石鏃の製作を視点に石鏃未製品を分析すると、成形段階72点（欠損17点、23%）→整形段階Ⅰ43点（欠損25点、58%）→整形段階Ⅱ27点（欠損品20点、74%）という結果が得られた。成形段階では、剥離作業が行き詰まり、放棄されたものが多く、整形段階では、剥離作業が進行するにつれ、薄く小形化するのに比例して剥離調整時の破損ミスが増し放棄されるものが多くなるという結果が推定される。石錐では、つまみとなる基部と棒状の機能部から成る丹念な類と棒状の機能部のみの類がわずかにあるが、大半は素材剥片の形状をのこしたまま、先端部のみを調整した類である。また、注視すべき石器では、石核よりサイズが小さく、自然の平坦な面を打面に、連続する打点や剥離面を有する横長形状の一群がある。剥離痕から推定される片のサイズは、素材剥片の生産には有効ではないサイズであり、石核とは考えられない。製作途中の石器未製品かあるいは石器（彫器）である可能性もある。

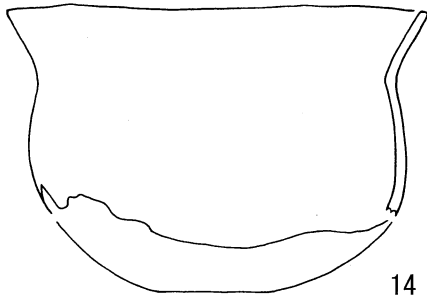
黒耀石以外の大形の石器は第11～18図に実測図と観察表を記載したので参照されたい。その中に特徴的な石器が2点ある。一つは砥石である（第18図112）。石を刻み縁を作出し、縁の内側は平坦な皿状で磨耗している。現代の硯の皿部の幅を狭くしたような形状である。そして、端部にハケ口のような溝状の凹みを有する。裏面もツルツルに磨耗した平坦な面である。所属時期は不明である。もう一つは、石棒である（第18図114）。高さ約16 cm、最大径10 cmの大きさで、上面と下面の周縁を打ち欠いた後に磨耗し、各面にそれぞれ並んだ二つの凹みを有する。所属時期は不明である。なお、縄文時代後期の所産である切れ目石錐28点が出土しているのも本遺跡の時代を裏付ける遺物である。

（河原）

（2）土器

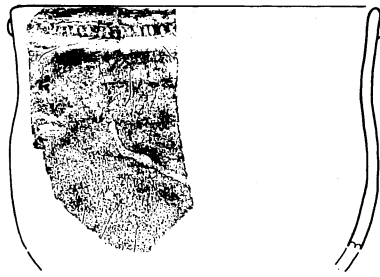
遺構外出土土器

北西区と小竪穴群の遺物包含層、河川敷砂礫層から出土している。河川敷砂礫層からの出土が多く、その中の中区南側と小竪穴群西側の砂礫層から集中的に出土している。小竪穴群の付近からの出土が多いことから土器が河川に向かって流出しているのか、また、廃棄されたのであろうか。旧大川の影響を受けてか無文の土器片や小破片が多く、整理作業中に接合された土器片が数点あったが、復原されるに至った土器はない。出土した土器は、縄文時代中期初頭から中世土師器が確認され、縄文時代中期後葉から後期が多い。時期特定の判断に使用できるとされる土器や、文様がわかりやすい土器を中心に拓影図化した（第19～22図）。土器の文様についての詳細は拓影図下の土器観察表を参照されたい。縄文中期初頭から縄文晩期と思われる土器が出土しており、中でも縄文中期後葉から縄文後期前葉の土器が多く見られた。



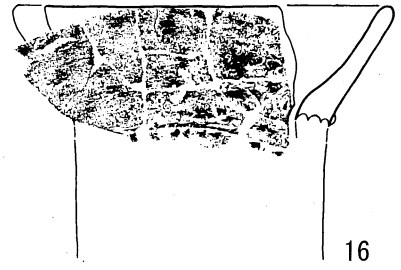
14

図14：整理No. / 遺構外 - 2
 遺物 No. / 83.7F16.8サレキ
 出土状態 / 砂礫層中に一括出土
 時期 / 縄、後期前葉 I ~ II
 高さ / (12.8cm)
 口径 / 23.2cm
 胎土 / 細砂、灰褐色を呈しやや堅緻
 整形内外 / ややていねいな横ヘラナデ
 文様 / 無文
 備考 / 外面頸部下胴部にスス付着。
 内面胴下部にスス付着



15

図15：整理No. / 遺構外 - 1
 遺物 No. / 83.7E17.2サレキ
 出土状態 / 砂礫層中
 時期 / 縄、晩
 高さ / (12.8cm)
 口径 / (19.6cm)
 胎土 / 細砂、石英、長石、雲母を少量含む。
 黒褐色を呈しやや堅緻
 整形内 / ミガキ
 整形外 / ていねいなナデ。下部は劣化しザラ
 ついている
 文様 / 口縁部の横隆帯上を丸棒の側面押
 圧で刻む
 備考 / 外面口縁部へ頸部炭化物付着。内面
 以下にスス付着



16

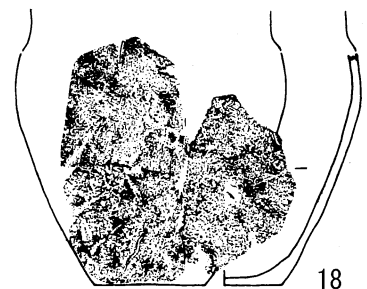
図16：整理No. / 遺構外 - 3
 遺物 No. / 83.7H27.17茶カツ
 出土状態 / 少量であるが遺物集中の中に
 散在
 時期 / 縄、中期後葉 I
 高さ / (5.7cm)
 口径 / (20.0cm)
 胎土 / 細砂、透明粒少量含む。茶褐
 色を呈し堅緻
 整形内外 / ややていねいなナデ
 文様 / 頸部に半截竹管による押しき
 隆線



図17：整理No. / 遺構外 - 5
 遺物 No. / 83.7M18.3サレキ
 出土状態 / 包含層中に広く散在
 時期 / 縄、晩期末
 高さ / (36.8cm)
 口径 / (43.4cm)
 胎土 / 細砂、雲母、石英、長石粒含む。褐色～
 赤褐色を呈し、やや堅緻
 整形内 / 粗いヘラミガキ
 文様 / 幅約1.4cmの12本1組の櫛歯状ないしはサ
 ララ状の工具による縦条痕を地文に、口縁
 の3条の横沈線、垂下する2本1組のジグザ
 グ文は先丸のヘラ状施文工具により描かれる

0 10cm

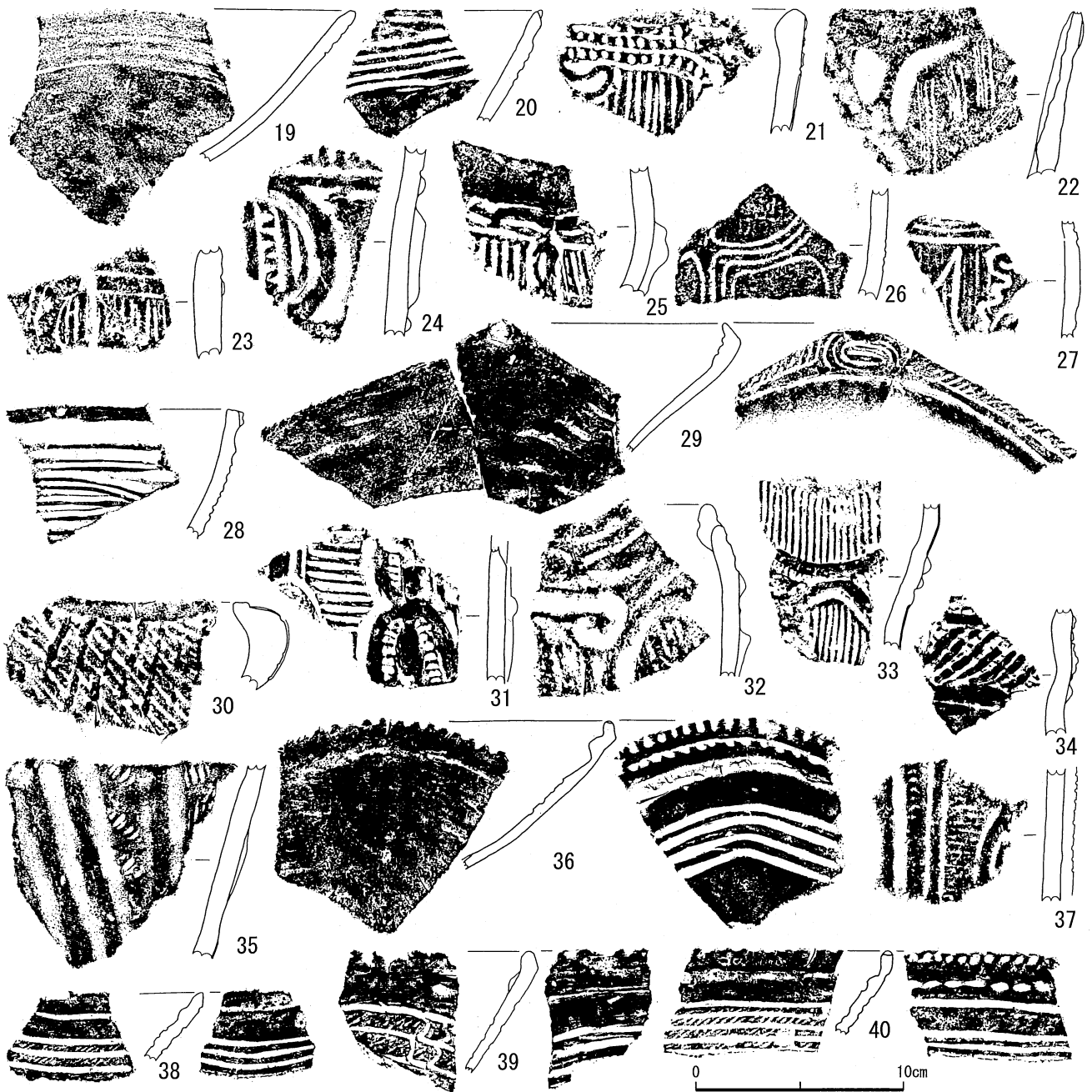
17



18

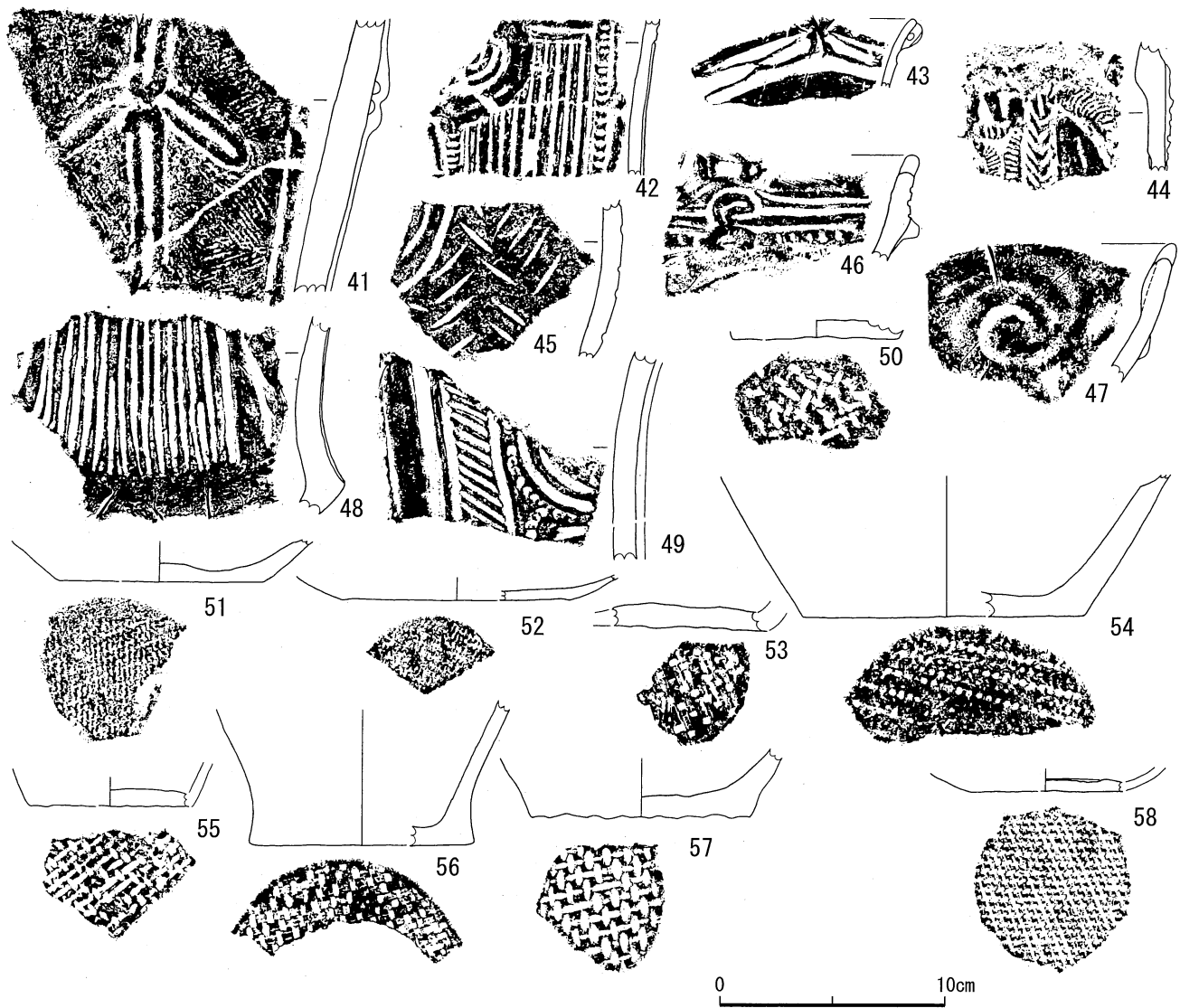
図18：整理No. / 遺構外 - 4
 遺物 No. / 83.7M14.1スナ
 出土状態 / 砂層中に一括破片バラケていた
 時期 / 縄、後期
 高さ / (7.5cm)
 胎土 / 細砂多く少量の雲母含む。赤色～灰褐色を呈し脆弱
 整形内外 / ナデ
 文様 / 無文
 備考 / 底部に網代痕あり。内側に輪積み接合痕が一条見られる。
 部分的に劣化してザラザラしている

第 19 図 遺構外出土土器実測図 (1:4)



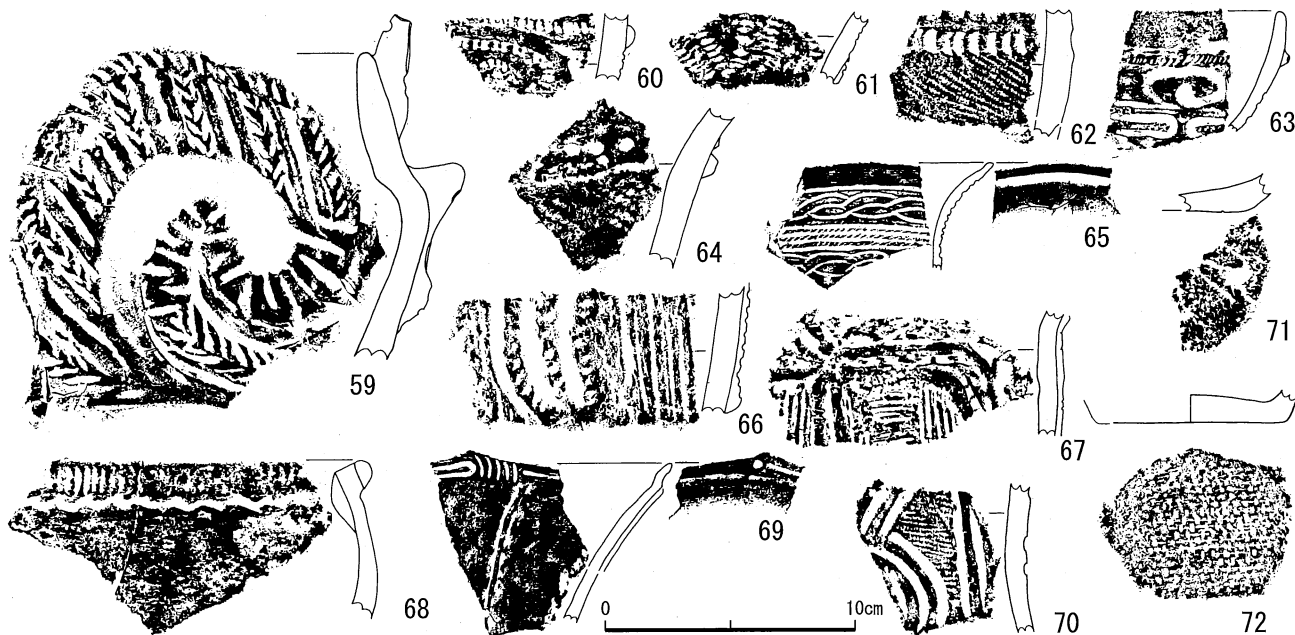
No.	遺物番号	器形	部位	文様	内面整形	胎土
19	S9.7ト	鉢	口縁~胴部上半	口縁部に4条の浅い沈線	劣化のため不明	黒色で光る粒子
20	T10.6カ	鉢	口縁	口縁部に6条の沈線	ナデ	黒色で光る粒子
21	F16.4カ	深鉢	胴部	隆帯上にヘラ状施文具による押圧 沈線	ナデ	細砂
22	Z4	深鉢	胴部	隆帯による区画 不均等に櫛状の施文具による沈線	剥落	白っぽい色
23	T10.8カ	深鉢	胴部	隆帯による横位の区画 区画内は縦位の沈線	横方向にナデ	細砂
24	F23.1カ	深鉢	胴部	隆帯による区画 沈線	ナデ	細砂
25	K23.17カ	深鉢	頸部	隆帯上に沈線 隆帯下に横位、縦位の沈線	横方向のナデ	細砂
26	G25.5カ	深鉢	胴部	平行沈線による区画 区画内は縄文	ナデ	細砂
27	G24.6カ	鉢	胴部	ヘラ状施文具による沈線	ナデ	金雲母微量
28	F24.3カ	鉢	口縁部	口唇部に小さなボタン状突起 ヘラ状施文具による沈線	ていねいなナデ	細砂
29	G24.4カ	鉢	口縁部	口唇部内側に渦巻状と斜状沈線	ナデ	雲母微量
30	M16.5カ	深鉢	口縁部	格子状にソーメン状粘土紐貼り付け	ナデ	白色粒子多
31	H19.4カ	深鉢	胴部	隆帯による楕円区画内にヘラ状施文具による沈線	ナデ	細砂
32	F21.1カ	深鉢	胴部	隆帯上に沈線 隆帯による区画内沈線	ナデ?	細砂
33	H19.4カ	深鉢	胴部	櫛形文が上下に重なる(踊り手文)	ナデ	細砂
34	J24.5カ	深鉢	頸部	ソーメン状の粘土紐を格子状に貼り付け	横方向のナデ	黒雲母微量
35	K21.9カ	深鉢	胴部	縦位の隆帯 隆帯と隆帯の間にまばらな短い沈線	ナデ	細砂
36	L20.6カ	浅鉢	口縁部	口唇部は波状 内側に先の丸い棒状施文具による刺突文	やや磨き	白色粒子多
37	L24.8カ	深鉢	胴部	隆帯による区画 区画内はヘラ状施文具による沈線	ナデ	白色粒子多
38	H23.3カ	鉢	口縁部	4条の沈線 隆帯上に縄文 内側は3の条沈線と隆帯	横方向のナデ	細砂
39	L24.8カ	鉢	口縁部	ヘラ状施文具による押圧、沈線 沈線の間は縄文	横方向のナデ	細砂
40	M24.15カ	鉢	口縁部	隆帯上に縄文 内側にヘラ状施文具による押圧刺突	ていねいなナデ	細砂

第20図 遺構外出土土器拓影図 その1 (1:3)



No.	遺物番号	器形	部位	文様	内面整形	胎土
41	O23.3切カ	深鉢	胴部	十文字状(トンボ?)の隆帯	横方向のナデ	白色粒子多
42	S14.1カ	深鉢	胴部	隆帯による区画 区画内は沈線 隆帯上に押圧	ナデ	光る粒子
43	P21.1切カ	鉢	口縁部	隆帯上に沈線 小さな把手状の盛り上がりをもつ	部分的に磨き	白色粒子多
44	R15.1カ	深鉢	頸部	隆帯上に爪形押し引 ヘラ状施文具による押圧沈線	横方向のナデ	白色、黒色粒子
45	P18.1カ	深鉢	胴部	ヘラ状施文具による斜沈線及びハの字状沈線	横方向のナデ	細砂
46	N16.6切カ	鉢	口縁部	口唇部に突起 突起下に沈線による渦巻文	横方向のナデ	細砂
47	N19.6切カ	深鉢	口縁部	口縁部に大きな波状の膨らみ 隆帯による渦巻文	ナデ	細砂
48	Z14	深鉢	胴部	隆帯による区画 区画内は連続する押し引文	横方向のナデ	白色粒子
49	Z23切カ	深鉢	胴部	円形施文具による押し引文	横方向のナデ	金雲母
50	I19.3切カ	深鉢	底部	網代痕	ナデ	金雲母多
51	G25.5切カ	深鉢	底部	網代痕	ナデ	細砂
52	F23.6カ	深鉢	底部	網代痕	ナデ	金雲母が少
53	Z1	深鉢	底部	網代痕	ナデと沈線	金雲母
54	J24.7切カ	深鉢	底部	敷物痕	ナデ	金雲母多
55	L22.3切カ	深鉢	底部	網代痕		細砂
56	L24.8切カ	深鉢	底部	網代痕	ナデ	細砂
57	J23.13切カ	深鉢	底部	網代痕	ナデ	白色粒子多
58	H25.6茶カ	深鉢	底部	網代痕		白色粒子多

第 21 図 遺構外出土土器拓影図 その 2 (1:3)



No.	遺物番号	器形	部位	文様	内面整形	胎土
59	L23.14カツツク	深鉢	頸部	渦巻文 隆帯上にはハの字状、ジグザク状沈線	部分的に磨き	白色粒子多
60	K26.5カ	深鉢	胴部	隆帯両側に押引文	ナデ	細砂
61	L26.1茶カ	深鉢	胴部	隆帯のまわりにヘラ状施文具による連続沈線	ナデ	白色粒子
62	L26.4茶カ	深鉢	胴部	押引文 縄文	ナデ	細砂
63	M25.1茶カ	深鉢	胴部	隆帯による区画 区画内は横位の沈線と押引文	ナデ	細砂
64	M29.1カ	深鉢	胴部	平行沈線 縄文	ナデ	細砂
65	N29.1カ	深鉢	胴部	隆帯上に先端がやや尖った棒状の施文具による刺突	ナデ	雲母多
66	L27.15茶カ	深鉢	胴部	隆帯上に押圧による沈線 縦位の沈線	横方向にナデ	細砂
67	M25.1茶カ	鉢	胴部	隆帯上に沈線 楕円形を描くような沈線	ナデ	白色粒子
68	N25.19.1カカ	深鉢	口縁部	口唇部に隆帯その上に爪形文、下に波のような沈線	ナデ	白色粒子
69	M29.1カ	鉢	口縁部	口唇部に沈線 隆帯が垂れる 内側に沈線、刺突	磨き	白色粒子
70	M29.1カ	鉢	口縁部	沈線 沈線によりできた隆線上に縄文 内側に沈線	磨き	金雲母
71	M29.3茶カ	深鉢	底部	木葉痕	ナデ	黒色粒子
72	K27.1カ	深鉢	底部	網代痕	ナデ	細砂

第22図 遺構外出土土器拓影図 その3 (1:3)

(3) 土製品・石製品

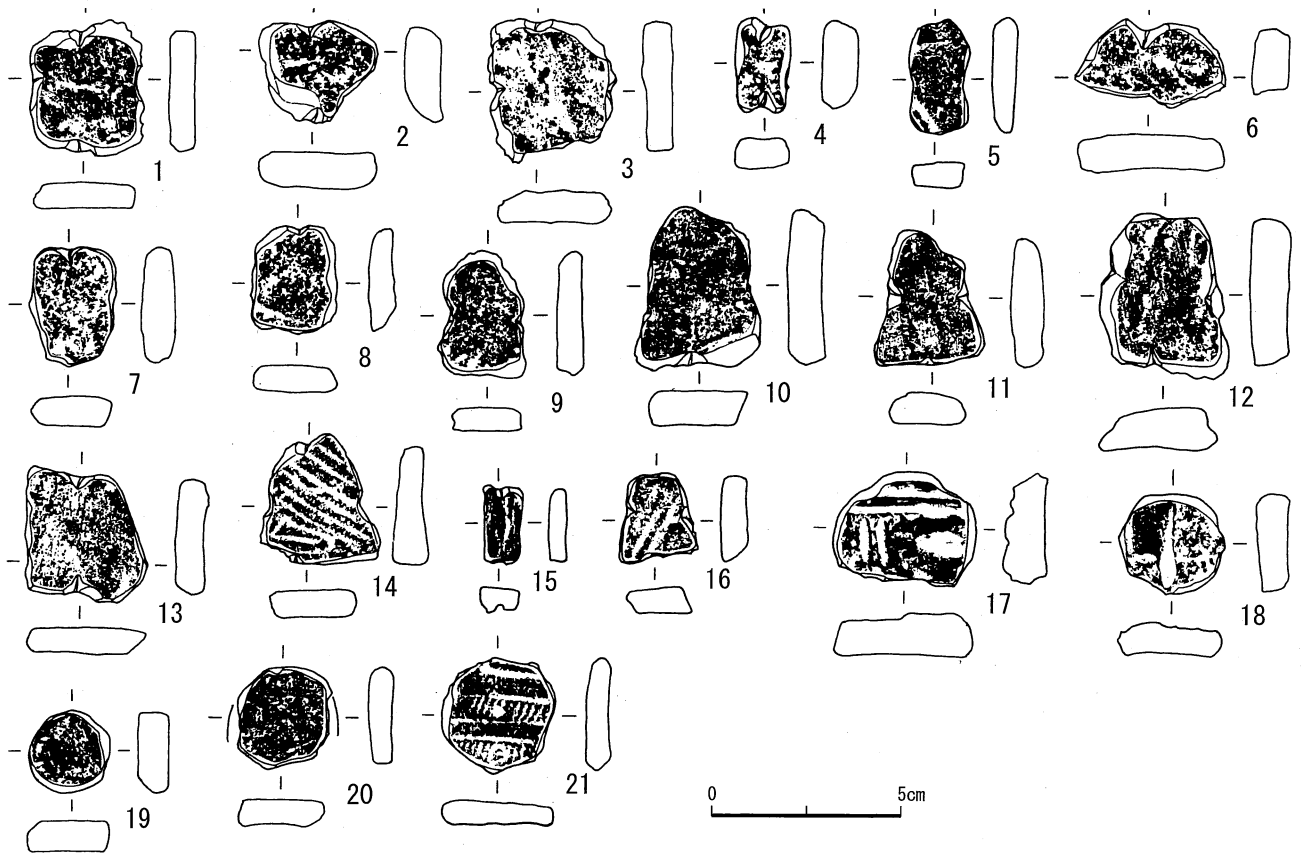
土製品は総数33点あり、内訳は土器片錘16、土製円板5、ミニチュア土器8、土偶1、装身具2、舟形土製品1である(第23・24図)。小竪穴出土は、土器片錘3、土製円板3、土偶1があり、小竪穴群包含層出土は、土器片錘4、土製円板2を数え、合計13点40%を占める。

詳細については図下の観察一覧表を参照されたい。

第24図30は土偶の右腕と思われ、横に突き出した棒状で、先端に指表現はない。先の細く尖った施文具による沈線が正面上下と下面に描かれ、それに交差する沈線が引かれている。腕の付き方はほぼ水平やや下向きと思われ、形状、文様、腕の付き方などから縄文時代中期前葉または中期後葉の関東系の土偶と考えられる。

本品は46Pから出土している。ここは縄文時代中期後葉の土器片の出土が多く、そのことから中期後葉の土偶とも考えられる。

第24図33は舟形土製品とした全長約5cmの小さな品であるが、先端に三角の突起をもち、舟の舳先にも似た形状を呈す。粘土塊の中央を手捏ねで凹ませて作られ、文様はない。



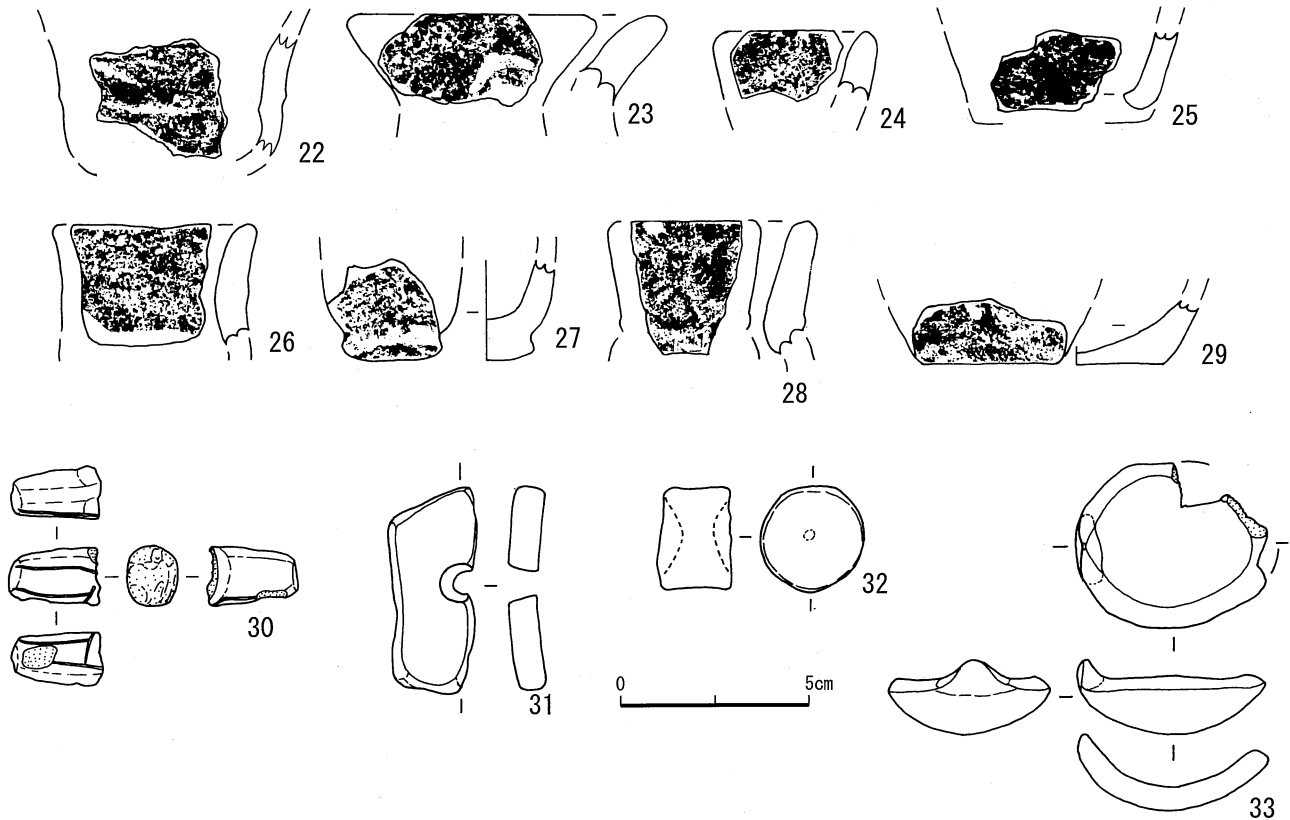
No.	遺物番号	種別	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	時期	備考(欠損、切目、形状、等)
1	H29.13.31P	土器片錘	3.5	3.0	0.7	8.6	縄	胴部、完形、無文、切目上下左右4ヵ所側縁打ち欠き形成
2	J 29.51.41P	土器片錘	2.7	3.1	1.0	6.9	縄	頸部 右下欠損無文 切目上下左3ヵ所側縁磨き整形
3	N26.62.70P	土器片錘	3.8	3.4	0.8	108.0	縄	胴部 下端欠損 無文 切目上左右3ヵ所上側磨き整形
4	G24.54	土器片錘	2.5	1.5	0.8	3.0	縄	胴部、完形、無文、切目上下2ヵ所左右側磨き整形
5	G24.55	土器片錘	3.0	1.6	0.6	3.5	縄	口縁部?完形、切目上下左右4ヶ所
6	I 17.9カカ	土器片錘	(2.4)	4.0	0.9	(7.4)	縄	胴部、下部欠損、無文、切目上1ヵ所側縁成形
7	I 27.11茶カ	土器片錘	3.1	1.3	0.8	6.9	縄	胴部、完形、無文、切目上下左3ヵ所、側縁粗い削り
8	J 23.18ササ	土器片錘	(2.9)	2.2	0.7	(6.1)	縄	胴部、下半欠損、無文、切目上1ヶ所、側縁磨き整形
9	J 23.19ササ	土器片錘	3.2	2.4	0.6	6.8	縄	胴部、完形、無文、切目上下左右4ヵ所、上縁左整形
10	K24.19ササ	土器片錘	4.3	3.3	0.9	13.6	縄	胴部、完形、下端に横位沈線、切目上下左右4ヵ所側縁形成
11	L 25.29カカササ	土器片錘	3.5	2.9	0.8	8.3	縄	胴部、下部欠損、無文、切目上左右3ヵ所側縁粗い削り
12	N24.27カカ	土器片錘	4.4	3.4	1.1	15.9	縄	胴部、完形、無文、切目上下左右4ヵ所全側打ち欠き形成
13	N24.28カカ	土器片錘	3.5	3.2	0.7	8.9	縄	胴部、完形、無文、切目上下2ヵ所、打ち欠き成形
14	Z42ササ	土器片錘	3.4	3.1	0.9	8.0	縄・後	口縁部、完形、斜め沈線、切目上左右3ヵ所
15	Z43ササ	土器片錘	2.1	1.1	0.7	1.8	縄・後前	口縁部、完形、表無文裏隆線、切目上下2ヵ所打ち欠き形成
16	N24.26カカ	土器片錘	2.3	2.1	0.7	3.2	縄	胴部、完形、斜め沈線、切目、上、左、右4ヵ所側縁打ち欠き成形
17	I 28.7.28P	土製円板	(3.0)	3.8	1.2	(12.9)	縄・中後	胴部、完形?C字隆帯横位細隆帯、左斜沈線、磨き整形
18	J 29.50.40P	土製円板	2.6	2.8	0.9	5.8	縄・中後	胴部、左下一部欠損 隆帯脇に太沈線 全周磨き整形
19	M26.33.83P	土製円板	2.1	2.1	0.8	4.4	縄	胴部、完形、無文、全周左り整形
20	H23.7カカ	土製円板	(2.7)	(2.4)	0.7	(4.4)	縄	胴部、左右欠損、無文、上部磨き整形、下部打ち欠き
21	O23.8カカ	土製円板	3.0	3.0	0.6	6.8	縄・後前	胴部、ほぼ実形、沈線と間を一部縄文埋める、左り整形は少ないが、打ち欠き形成している、胴部

第23図 土製品実測図 その1 (1:2)

岡谷市内の目切遺跡（「山の手目切・清水田遺跡」2005 岡谷市教育委員会）に舟形土製品が出土して、こちらは外面に隆線による渦文が付けられ 縄文時代中期後葉期の所産であろうと考えている。大きさは類似するが文様の有無は大きく異なる。本品の所属時期は不明である。

石製品は 58P 出土の黒耀石製の異形石器（写真 20）と、61P 出土の滑石がある。

（山田）



No.	遺物番号	種別	口径	底径	高	重量	時期	備考
22	E16.16片	ミニチュア土器	—	—	(3.1)	(7.9)	縄	胴部、無文、輪積痕が明瞭にのこる
23	Z348	ミニチュア土器	—	—	(2.4)	(14.6)	縄	口縁部、カギ状の太沈線
24	G18.29カカサ片	ミニチュア土器	—	—	(1.8)	(4.9)	縄	口縁部、無文
25	H17.16片	ミニチュア土器	—	—	(2.1)	(5.8)	縄	胴下半部、底部直上部、無文
26	H21.16片サ	ミニチュア土器	—	—	(3.2)	(10.2)	縄	口縁部～胴部 無文
27	Z8	ミニチュア土器	—	2.6	(2.7)	(13.7)	縄	底部～胴下半部 無文 底部の作り特徴
28	I18.8カカサ片	ミニチュア土器	—	—	(3.5)	(10.0)	縄	口縁部～胴部 無文
29	T107片	ミニチュア土器	—	(3.6)	(1.7)	(107.0)	縄	底部、上部はヘラ状施文具による沈線か刺突
No.	遺物番号	種別	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	時期	備考
30	J28.27.46P	土偶	2.4	1.6	1.4	(4.6)	縄	土偶手（左腕）
31	H15.6カカサ片	垂飾	5.4	2.4	0.8	10.2	縄	完形（？）、板状で穿孔あり
32	P21.14	耳栓	2.7	—	1.9	16.1	縄・後	完形
33	Z39片サ	舟形土製品?	5.0	4.3	2.0	(19.8)	縄	舟形土製品か。舟先部突起させている 無文

第 24 図 土製品実測図その 2 (1 : 2)

5. 平安時代・中世の出土遺物

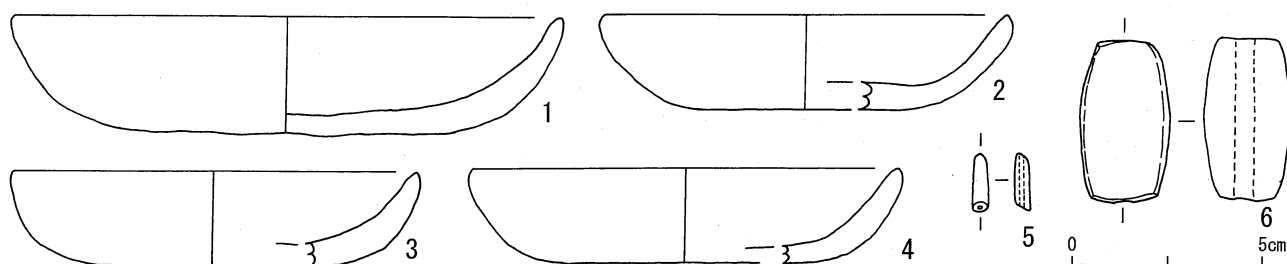
北西区の調査開始当初からカワラケ破片の出土があり、遺構の存在も期待されたが、近代の整地攪乱により確認はできなかった。

出土したカワラケのうち4点を図化した(第25図1~4)。口径11~15cm、器高2.2~3cmの手捏ねによる作りである。すべて砂礫層から出土して、遺構に伴うものはない。1は内外面をごく粗くナデている。2は内面はややていねいにナデているが外面は粗い。3、4は内外面ともていねいにナデられている。口唇は全品尖り気味に作られる。所属時期は中世のどこかは不明である。

第25図5・6は管状の紡錘形の土錘である。5は最大径0.4cmと細くて小さく、本当に土錘だろうかといまだに疑問視している。6は逆に太くて大きく、古代の管状土錘と様相を異にする。この2点も所属時期を特定できない。

その他、土師器、須恵器の出土があり、古代~中世の集落が付近で営まれていたであろうと思われる。

(山田)



No.	遺物番号	種別	口径(cm)	底径(cm)	高(cm)	成形	調整
1	6T3	中世土師器皿	(14.4)	(8.4)	3.1	手捏ね	軽いナデ
2	T6.6ト	中世土師器皿	(11.6)	(7.0)	2.5	手捏ね	回転横ナデ
3	I21.37カ	中世土師器皿	(11.0)	(5.6)	2.5	手捏ね	軽い回転ナデ
4	Z4	中世土師器皿	(10.7)	(7.1)	2.5	手捏ね	回転横ナデ

No.	遺物番号	種別	長(cm)	径(cm)	重量(g)	時期	備考
5	I 29.36.37P	管状土錘	1.5	0.4	0.2	平安・中世	細い紡錘形を呈する。直径0.1cmの孔が貫通する
6	T6.5ト	管状土錘	4.2	2.4	27.8	平安・中世	紡錘形の大型品、直径0.5cmの孔が貫通する

第25図 平安時代・中世の出土遺物実測図 (1:2)

第4章 まとめ

市内の中心市街地は古くからの居住域であり、発掘調査の機会の少ないところである。近年、海戸、岡谷丸山、横道、天王垣外、間下丸山遺跡では再開発または道路整備による調査が、また平成7～9年に間下丸山・禅海塚遺跡調査が行われ、塚間川段丘の南半部の様相が徐々に明らかになってきた。そこからは現在の丸山橋線道路が段丘の微高地のほぼ頂部にあたり、縄文時代～近世に至る集落が営まれていたことがわかってきた。もちろん近現代においても市の中心市街地として栄えている場所でもある。

今回の調査は、前回調査の西約100mの地点において行われ、すぐ西を大川が流れ、北には独立した小丘があり、中腹～裾部分では縄文時代の遺物が表面採集されている。本文中に述べたように、大半は段丘低地にあたる河川敷であり、川が運んだ砂礫が厚く堆積している。東側にローム層が堆積し、そこに住居址1棟、小竪穴54基が築かれている。そこからは微高地上の居住域と低地の小竪穴群という構造が見えてくる。ただし、その構造が環状などの定型的な形になるのかは中間地点の調査を待たなければならない。

小竪穴群内の構造を見ると、縄文時代中期後葉期と後期前葉期に二分される。第3章2で述べたように、時期による集中部分も認められず、散在している状況である。とすれば、この地点は小竪穴のための場として認められたのであって、時期を違えても同じ場所に小竪穴を設けたと考えられ、そこに社会規範が存在し利用されたと見ることが許されよう。さらにそこには「川に近いところ」という概念も加わっていたのであろうか。「川に近いところに掘られた穴」という状況から、用途・性格に迫れる可能性もあるのではないか。

小竪穴の用途・性格の点では、「甕被せ土墳墓」である縄文時代後期の小竪穴は3基、柱の根固め石をもつ柱穴と考えられる縄文時代中期後葉の小竪穴は9基を数えるが、全体の22%に過ぎず、80%近くが用途・性格に迫れない小竪穴である。また、柱穴としたものの何のためにここに柱を建てたのか、さらに柱穴の並びに建物を想定できない状況があるなど課題も多い。また、縄文時代後期の住居址も発見されていないことから、墓域はあるが居住域がわかっていない。今後の調査に期待するところである。

調査範囲からすれば、多量の石鏃の出土も特筆される。今回、紙面の都合上図示されていないが、完形品、未製品を含め300点以上が出土している。縄文時代後期の石鏃の増加はすでに注意されているところであるが、未製品の多い点については、製作址を考慮する必要があるのかもしれない。

また、弥生時代の所謂庄ノ畑式土器の出土も若干あり、縄文時代晩期末の土器片出土とあいまって、弥生時代への移行期または開始期に迫れる可能性をもっている。

塚間川段丘上の諸遺跡は、長期にわたる複合遺跡が多く、長く居住域や墓域または経済域として使用されてきた。天竜川をさかのぼった人々の諏訪への入口の地としても重要な土地であったに違いない。将来にわたって調査が継続され、この地に居住していた人々が、遠隔地から訪れた人々と交流する姿や、牧にかかわる人々の働く姿がもし明らかになれば、さらに大きな成果となることを期してまとめとさせていただきます。

(山田)

附表 小 豎 穴 一 覧 表

間下丸山遺跡

※口径・底径は長軸×短軸。()内の数値は残存値

小豎穴No.	位置	グリッド	平面形	断面形	口径(cm)	底形(cm)	深さ(cm)
25	I-26・27		不整形	皿	114×80	98×70	9.0
26	I-27		不整形	皿	96×74	72×52	10.0
28	I-28		不整長楕円形	タライ	92×82	58×52	23.0
29	H-28		長楕円形	タライ	70×50	44×28	26.0
30	G-29		長楕円形	鉢状	74×56	8×6	33.0
31	G・H-29・30		不整長楕円形	タライ	124×92	106×76	25.5
32	G-30		不整楕円形	タライ	78×66	40×36	20.0
37	I-29		(長楕円形)	(タライ)	112×(82)	98×(68)	28.0
38	I・J-28		長楕円形	皿	86×70	56×60	9.0
39	I・J-28		(不整長楕円形)	(皿)	102×(54)	86×46	10.0
40	I・J-29		(不整楕円形)	(タライ)	146×122	116×110	47.5
41	J-29		円形	桶	90×86	60×62	53.4
42	J-30		(楕円形)	(タライ)	74×(32)	62×(18)	33.0
43	J-30		(長楕円形)	(タライ)	68×54	42×36	22.0
44	J・K-30		(不整長楕円形)	(タライ)	(170)×(22)	(74)×(4)	40.0
45	J・K-28		円形	タライ	60×54	48×44	26.5
46	J-27・28		円形	桶	114×110	98×90	76.5
49	K-30		円形	桶	76×68	58×54	49.0
50	K・L-30		(楕円形)	(皿)	114×(48)	92×(40)	9.5
51	K・L-30		(不整楕円形)	(タライ)	62×(46)	36×38	11.5
57	L-28		不整ダルマ形	桶	122×88	104×72	85.5
58	L-28		ダルマ形	タライ	124×78	110×64	57.5
59	L-28・29		不整形	タライ	68×(64)	20×(30)	20.0
60	L・M-30		不整形	—	—	—	—
61	M-29		(円形)	桶	82×70	62×66	67.5
62	M・N-29		(長楕円形)	タライ	(60)×(64)	(48)×(62)	16.0
63	M-28・29		不整長楕円形	タライ	94×62	58×46	27.0
64	M-27・28		楕円形	桶	72×62	62×50	37.0
65	M-27		不整長楕円形	タライ	134×118	112×100	29.0
66	M-27		不整楕円形	桶	44×34	36×22	22.7
68	N-25		楕円形	タライ	102×88	100×46	23.0
69	N-26		(不整円形)	タライ	82×68	58×46	18.0
70	N-26		不整形	タライ	122×62	68×56	22.0
71	N-26・27		不整楕円形	タライ	72×66	42×50	23.0
72	N-27		円形	タライ	84×80	68×68	41.0
73	N-27		不整円形	タライ	84×80	60×52	20.0
74	N-28		円形	タライ	66×64	56×56	15.5
75	N-29		(楕円形)	桶	74×(34)	58×(26)	51.0
77	N・O-29		(長楕円形)	タライ	96×(54)	74×(64)	17.0
79	O-27		(長楕円形)	タライ	120×96	114×82	14.5
80	N・O-26		長楕円形	タライ	92×86	62×52	18.0
81	O-25・26		(不整隅丸長方形)	皿	170×106	154×94	14.0
82	O-24・25		長楕円形	タライ	94×68	70×52	26.5
83	M-26		楕円形	タライ	84×70	72×62	26.5
86	O-28・29		(長楕円形)	タライ	86×60	48×34	23.0
87	O-27		(楕円形)	タライ	76×64	48×44	29.5
88	O-28・29		(円形)	皿	72×70	58×48	7.0
89	K-27		不整円形	袋	90×84	50×58	57.0
95	J-28		(長楕円形)	皿	(80)×(34)	(76)×(26)	7.4
96	M・N-29		(楕円形)	タライ	92×(70)	70×(60)	45.5
97	N-26		不整形	袋	76×72	40×44	43.0
98	H-25・26G-25		不整長楕円形	鉢	246×194	6×14	40.8
99	K・L-29		(長楕円形)	タライ	114×(70)	90×(46)	36.8
100	M・N-25・26		楕円形	タライ	94×82	68×62	39.0

石器属性表

石鏃

(単位は mm, g)

遺物番号	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	色調	製作段階	備考
3.14H7	ob	(23.0)	15.0	3.8	(0.9)	青み・縞	完成品・欠	
8.14H7	ob	—	—	—	(0.3)	茶透明	欠	逆刺のみ残存
11.14H7	ob	—	—	—	(0.1)	透明・斑	欠	逆刺のみ残存
J29.18.40P	ob	—	—	—	(0.2)	茶透明・もや	欠	逆刺のみ残存
J29.41.41P	ob	—	—	—	(0.1)	透明・もや	完成品・欠	
M29.23.46P	ob	19.2	14.2	3.1	0.4	透明・もや	完成品	
M29.24.46P	ob	17.5	14.2	4.1	0.5	茶透明・縞	完成品	
M29.102.62P	ob	(9.5)	(8.2)	2.3	(0.1)	茶透明	完成品・欠	
M28.19.64P	ob	—	—	—	(0.1)	黒透明・もや	欠	逆刺のみ残存
M29.21.63P	ob	16.0	11.7	1.8	0.1	透明・縞	完成品	
M27.13.65P	ob	15.6	(12.3)	2.4	(0.3)	透明・縞	完成品・欠	
N27.15.72P	ob	13.2	11.1	2.5	(0.3)	透明	完成品・欠	
O29.8.77P	ob	—	—	—	(0.3)	茶透明	欠	一部のみ残存
O29.7.77P	ob	21.9	15.5	3.2	(0.7)	透明・斑	完成品・欠	側縁・細かな鋸歯状
L26.33.55P	ob	(18.5)	14.2	(3.8)	(0.6)	透明・もや	欠	一部のみ残存
I 24.3P4	ob	(27.6)	(16.0)	6.0	(1.6)	茶透明	完成品・欠	粗い作り
E15.1㍻	ob	25.8	17.8	4.0	1.1	透明・縞	完成品	
E16.7㍻	ob	(13.3)	17.5	4.0	(0.7)	透明・もや	完成品・欠	
E18.4㍻	ob	21.6	(14.9)	3.0	(0.5)	透明・縞	完成品・欠	
F18.8㍻	ob	17.8	(12.0)	2.1	(0.3)	透明・もや	完成品・欠	
F23.2㍻	ob	(15.7)	(10.6)	3.1	(0.3)	黒透明・縞	完成品・欠	
F23.9㍻	ob	15.5	(11.6)	2.7	(0.2)	青み・縞	完成品・欠	
F23.19㍻	ob	—	—	—	(0.4)	黒透明・もや	欠	一部のみ残存
F25.3㍻	ob	19.3	15.5	3.8	1.0	茶透明・白縞	完成品	
F26.2茶㍻	ob	(16.9)	(11.1)	3.1	(0.4)	透明	完成品・欠	片面に素材剥離面のこす
F27.1茶㍻	ob	19.5	13.5	2.6	0.6	透明・縞	完成品	若干、左右非対称
F27.3茶㍻	ob	(16.7)	(13.0)	3.3	(0.7)	透明・縞	欠	一部のみ残存
F27.8茶㍻	ob	—	—	—	(0.3)	茶透明	欠	逆刺部のみ残存
F27.9茶㍻	ob	—	—	—	(0.2)	黒透明・もや	欠	逆刺部のみ残存
G18.8㍻	ob	(18.0)	15.2	3.3	(0.5)	透明・もや	完成品・欠	
G23.6㍻	ob	(28.5)	14.2	3.5	(1.2)	黒透明・もや	完成品・欠	
G24.5㍻	ob	(14.7)	(13.1)	3.1	(0.6)	透明・縞	完成品・欠	有茎鏃
G24.14㍻	ob	(12.1)	(10.7)	2.9	(0.3)	茶透明	完成品・欠	先端から中央に向かって剥離があり、使用による欠損の可能性あり
G24.8㍻	ob	(28.5)	(22.3)	4.5	(1.8)	透明・縞	完成品or 整2・欠	整形2段階の欠損か?
G25.14㍻	ob	(11.5)	8.2	2.5	(0.1)	透明・縞	完成品・欠	
G25.15㍻	ob	(11.3)	15.7	(3.5)	(0.6)	透明・縞	完成品・欠	
G27.3茶㍻	ob	—	—	—	(0.3)	透明・縞	欠	逆刺のみ残存
H17.5㍻	ob	(16.1)	10.6	2.9	(0.4)	青み・もや	完成品・欠	
H22.17㍻	ob	—	—	—	(0.6)	透明・縞	欠	一部のみ残存
H23.5㍻	ob	20.1	(11.0)	2.6	(0.4)	茶透明	完成品・欠	
H23.6㍻	ob	27.2	(11.2)	2.5	(0.3)	透明・縞	完成品・欠	
H23.11㍻	ob	—	—	—	(0.2)	透明・もや	欠	逆刺のみ残存
H24.5㍻	ob	(18.0)	(15.6)	3.1	(0.5)	黒透明・もや	完成品・欠	
H24.7㍻	ob	(19.2)	15.5	4.2	(0.8)	透明・縞	完成品・欠	
H24.36㍻	ob	—	—	—	(0.2)	透明・もや	欠	逆刺のみ残存
H25.14㍻	ob	16.0	11.6	2.1	0.3	透明・縞	完成品	
H25.17㍻	ob	(13.2)	19.0	(4.9)	(0.9)	茶透明	欠	
H25.29茶㍻	ob	(12.7)	(16.3)	(2.4)	(0.4)	茶透明・もや	欠	基部のみ残存
H25.34㍻	ob	15.1	8.7	3.5	0.4	透明・縞	完成品	
I 22.47㍻	ob	16.1	11.9	3.5	0.4	透明・もや	完成品	片逆刺

遺物番号	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	色調	製作段階	備考
I 22.57カカ	ob	18.1	12.5	3.5	0.5	茶透明	完成品	片側逆刺を折損後、再加工をし、片逆刺の形状
I 24.57カカ	ob	(24.1)	18.2	3.5	(1.0)	透明・縞	完成品	
I 25.2茶カ	ob	(9.9)	(13.5)	2.7	(0.3)	茶透明	完成品・欠	
I 25.4茶カ	ob	24.9	(15.7)	4.8	(1.3)	茶透明	完成品・欠	
I 25.14サキサ	ob	20.0	13.5	3.9	0.7	透明・縞	完成品	
I 25.23サキサ	ob	(17.4)	12.2	3.5	0.5	青み・縞	完成品・欠	有茎鏃
J23.9サキサ	ob	26.9	15.7	4.1	1.2	茶透明	完成品	片面に素材剥離面のこす
J23.10サキサ	ob	17.3	11.9	2.2	0.3	透明・縞	完成品	側縁・細かい鋸歯状
J24.9サキサ	ob	18.6	12.9	3.8	0.5	透明・縞	完成品	
J24.26サキサ	ob	—	—	—	0.1	茶透明	欠	一部残存のみ
J25.1サキサ	ob	(21.8)	17.0	3.5	1.4	青み・縞	完成品・欠	片面に自然面のこす
J26.7茶カ	ob	11.6	(9.9)	2.2	(0.2)	透明・縞	完成品・欠	
J26.4茶カ	ob	18.9	9.0	2.6	0.4	茶透明・白縞	完成品	表面に自然面、裏面に素材剥離面のこす
J26.10カ	ob	(17.5)	(7.0)	(3.2)	0.3	茶透明・白縞	完成品・欠	抉入部中心から、尖端に向けて欠損
K22.47カカ	ob	28.0	(17.2)	3.2	(0.9)	透明・縞	完成品・欠	
K22.37カカ	ob	19.3	16.5	2.8	0.6	透明・縞	完成品	
K23.7サキサ	ob	19.9	11.5	2.8	(0.4)	茶透明・縞	完成品・欠	
K23.15サ	ob	(18.0)	(14.1)	3.5	(0.7)	茶透明	完成品・欠	
K23.16サ	ob	(14.0)	(18.2)	3.1	0.3	茶透明	完成品	
K24.97カカ	ob	17.2	16.5	3.1	0.5	茶透明	完成品	
K24.15サキサ	ob	(20.6)	13.2	3.8	(0.7)	透明・縞	完成品・欠	側縁細かい鋸歯状
K26.4カ	ob	(12.7)	15.2	4.6	(0.7)	茶透明・白縞	完成品・欠	
K26.3カ	ob	(13.8)	(11.5)	3.5	0.3	茶透明・もや	完成品・欠	
K27.3茶カ	ob	15.3	13.5	3.1	0.3	透明	完成品	側縁鋸歯状
L21.4サ	ob	27.5	19.1	4.3	1.3	茶透明	完成品	左右側縁非対称
L22.5サキサ	ob	17.2	(16.0)	3.0	(0.5)	透明・もや	完成品・欠	
L22.6サキサ	ob	18.2	12.2	4.7	0.8	透明・縞	完成品・欠	片面に自然面のこす
L23.21カ	ob	16.1	(14.0)	5.1	0.9	透明・縞	完成品・欠	
L25.5茶カ	ob	18.2	(15.0)	4.0	(0.7)	茶透明	完成品・欠	側縁鋸歯状
L25.117カカサキ	ob	(17.5)	(14.2)	5.1	(1.1)	茶系乳濁色	完成品・欠	
L25.127カカサキ	ob	20.0	15.6	3.7	0.8	透明・もや	完成品	周縁鋸歯状
L25.157カカサキ	ob	(15.1)	15.0	4.1	(0.6)	茶透明・もや	完成品・欠	
L25.167カカ	ob	15.5	10.0	2.0	0.2	透明・縞	完成品	
L25.22サキサ	ob	19.1	(13.2)	3.7	(0.7)	透明・縞	完成品・欠	
L25.26サキサ	ob	(14.8)	(12.7)	3.0	(0.5)	透明・もや	完成品・欠	
L26.5茶カ	ob	(15.7)	(11.8)	3.6	(0.5)	透明・縞	完成品・欠	
L26.7茶カ	ob	13.8	(11.5)	3.0	(0.3)	透明・もや	完成品・欠	
L26.13茶カ	ob	14.5	12.5	2.6	0.3	茶透明	完成品	片逆刺
L26.14茶カ	ch	14.0	12.0	2.5	0.3	黒系	完成品	
L26.50茶カ	ob	—	—	—	(0.3)	茶透明	完成品・欠	
L26.51茶カ	ob	—	—	—	(0.2)	黒透明・縞	完成品・欠	
L27.52茶カ	ob	—	—	—	(0.3)	透明・もや	完成品・欠	
M19.37カカ	ch	33.8	21.0	5.8	3.2	灰色	完成品or整2	
M26.18茶カ	ob	(18.9)	(12.0)	3.0	(0.4)	透明・斑	完成品・欠	
M23.10サキサ	ob	(13.6)	(10.5)	2.2	(0.2)	透明・縞	完成品・欠	
M23.11サキサ	ob	20.0	13.9	2.9	0.6	透明・縞	完成品	
M23.14サキサ	ob	20.0	(11.5)	3.3	0.5	茶透明	完成品・欠	板状原石素材
M24.67カカ	ch	15.1	13.4	3.1	0.5	緑	完成品	
M24.13サキサ	頁	29.0	16.7	3.2	1.1		完成品	側縁細かい端正な鋸歯状
M24.14サキサ	ob	13.5	9.8	3.1	0.3	透明・もや	完成品	
M24.16サキサ	ob	(22.2)	(12.5)	3.2	(0.6)	透明	完成品・欠	
M24.18サキサ	ob	12.1	12.0	2.1	0.2	透明・斑	完成品	片面に素材剥離面をのこす
M25.67カカ	ob	18.3	11.1	3.0	0.4	透明・もや	完成品	片逆刺
M25.77カカ	ob	—	—	—	0.3	透明・縞	欠	一部のみ残存
M25.87カカ	ob	(18.5)	(12.5)	2.1	0.3	透明・もや	完成品・欠	
M25.127カカ	ob	22.5	(16.4)	3.3	(0.6)	青み・縞	完成品・欠	
M25.137カカ	ob	22.5	15.9	3.8	0.8	透明・縞	完成品	

遺物番号	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	色調	製作段階	備考
M25.16サカサ	ob	16.7	12.3	3.7	0.5	透明・縞	完成品	
M25.5茶カ	ob	15.9	12.5	2.7	0.4	茶透明	完成品	側縁鋸歯状、片面に素材剥離面のこす
M26.9茶カ	ob	(19.1)	(10.9)	3.0	(0.4)	茶透明	完成品or整2	両面に素材剥離面のこす
M26.4茶カ	ob	(18.8)	18.1	3.8	(1.1)	茶透明	完成品・欠	
M27.5茶カ	ob	(12.6)	11.0	2.5	(0.2)	茶透明・縞	完成品・欠	
M27.1茶カ	ob	16.1	11.6	2.2	0.3	透明・もや		
M28.4茶カ	ob	(12.1)	10.7	2.0	(0.2)	透明・縞		
N19.9サキ	ob	(17.9)	(12.0)	3.2	(0.5)	茶透明・もや	完成品・欠	
N21.1カカササキ	ob	19.0	12.7	3.2	0.5	茶系乳濁色	完成品	
N22.10カカササキ	ob	24.3	14.0	2.7	0.6	透明・もや	完成品	両面に素材剥離面のこし、片面は縁辺のみ微調整 片面に自然面のこす
N23.19サキサ	ob	16.0	14.0	3.7	0.7	透明・もや	完成品?	側縁細かな鋸歯状
N23.18サキサ	ob	20.5	(12.7)	3.5	0.5	透明・縞	完成品・欠	
N24.3カカ	ob	22.3	16.6	3.1	0.7	透明・縞	完成品	
N24.6カカ	ob	(14.5)	(8.1)	3.2	(0.3)	透明	完成品・欠	
N24.7カカ	ob	—	—	—	(0.4)	透明・縞	完成品or未製品・欠	一部のみ残存
N24.8カカ	ob	27.4	(11.2)	4.1	(0.7)	青み・縞	完成品・欠	
N24.9カカ	ob	11.1	10.7	1.8	0.1	茶透明	完成品	
N24.14サキサ	ob	17.5	(14.1)	3.2	(0.5)	茶透明・縞	完成品・欠	
N24.22サキサ	ob	(11.9)	(12.5)	(2.5)	(0.3)	透明	完成品・欠	
N25.7茶カ	ob	13.1	7.3	2.0	0.1	茶透明	完成品	
N26.4茶カ	ob	15.2	(12.0)	2.7	(0.4)	透明	完成品・欠	
N27.3茶カ	ob	12.8	(9.4)	2.2	(0.2)	黒透明・もや	完成品・欠	表面に自然剥離面、裏面に剥離面をのこす
N28.1茶カ	ob	(14.7)	14.6	4.3	(0.9)	透明・縞	完成品・欠	
O19.5サ	ob	12.0	12.9	2.8	0.2	透明	完成品	
O22.7カカ	ob	(11.1)	(13.6)	2.5	(0.3)	透明・縞	完成品・欠	片面に自然剥離面のこす
O22.3カカ	ob	13.2	10.8	3.0	0.3	茶透明	完成品	表面に素材剥離面、裏面に自然剥離面のこす
O22.17カカ	ob	18.3	15.1	4.4	0.9	茶透明	完成品?	表面に自然面、裏面に素材剥離面のこす。平基鋸あるいは、基部未製作段階
O23.2カカ	ハリ安	(17.7)	(9.0)	3.6	(0.5)	—	完成品・欠	挟入部中心から先端に向かって縦に欠損
O23.14カカササキ	ob	16.3	12.1	2.5	(0.4)	透明	完成品	
O23.5カカ	ch	(21.1)	20.8	3.0	(1.4)	灰色	完成品?・欠	表裏共に素材剥離面を広くのこし、周縁のみ調整
O23.13カカササキ	ob	(20.4)	(13.1)	4.1	(0.8)	茶透明	完成品・欠	片側の逆刺先端から他方の側縁に向かって力が加わり欠損
O29.19茶カ	ob	(15.6)	12.5	2.5	(0.3)	透明	完成品・欠	
Q14.5サキ	ob	(14.5)	10.0	3.0	(0.4)	黒透明・もや	完成品?・欠	
Q17.5サキ	ob	(28.0)	15.0	5.2	1.4	茶透明	完成品・欠	側縁粗い鋸歯状
R5.12トコ	ob	(14.7)	17.9	4.6	(1.3)	透明・縞	完成品・欠	
R7.11トコ	ob	18.1	12.1	2.4	0.4	乳白濁色	完成品	片面に素材剥離面のこす。製作後、受熱か?
R7.14サ	ch	(15.8)	16.5	3.7	(0.9)	灰色	完成品・欠	
R7.17サ	ob	(21.4)	(15.8)	3.5	(0.8)	黒透明・縞	完成品?・欠	片面に素材剥離面のこす。使用後再加工→再利用→欠
R7.18トコ	ob	(15.1)	(11.5)	2.5	(0.3)	透明	完成品・欠	
R8.8トコ	ob	—	—	—	0.3	黒透明・縞	欠	逆刺のみ残存、製作後受熱か?
S6.9トコ	ob	—	—	—	(0.6)	黒透明・縞	完成品・欠	逆刺のみ残存
S7.12サ	ob	21.6	12.5	3.5	0.8	黒透明・縞	完成品	
S7.16トコ	ob	—	—	—	(0.2)	茶透明	欠	逆刺のみ残存
S9.12カカ	ob	(20.0)	13.0	5.0	(0.9)	茶透明	完成品・欠	片側縁から逆刺に向けて欠損
S13.5サ	ob	19.9	(14.6)	3.2	(0.5)	透明・もや	完成品・欠	
S13.6サ	ob	12.6	10.9	2.0	0.2	透明・縞		
S13.7サ	ob	(30.8)	(19.2)	5.3	(2.0)	透明	完成品・欠	整作→欠損→受熱
T5.3カ	ob	(17.3)	12.7	3.3	(0.7)	茶透明	完成品?・欠	
T5.7トコ	ob	15.1	14.5	2.1	0.3	黒透明	完成品	

遺物番号	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	色調	製作段階	備考
T6.8トコ	ch	22.7	10.9	2.5	0.4	赤黒色	完成品	
T6.12トコ	ob	(12.1)	(12.9)	2.8	(0.4)	黒透明・もや	完成品・欠	
T8.13カ	ob	(17.4)	(12.5)	(4.9)	(0.5)	透明・縞	完成品・欠	
T9.10トコ	ob	13.3	9.9	2.1	0.1	透明・もや	完成品	側縁鋸歯状
T9.6トコ	ob	(14.8)	(10.6)	(4.6)	(0.4)	透明・縞	完成品・欠	
T9.5トコ	ob	28.8	(20.5)	6.0	(2.0)	透明・縞	完成品・欠	側縁粗い鋸歯状
T9.4トコ	ob	19.4	(13.5)	3.7	(0.6)	透明・もや	完成品・欠	
T10.12トコ	ob	14.8	11.7	3.1	0.4	茶透明・縞	完成品	表面に自然剥離面、裏面に素材剥離面のこす
U5.4トコ	ob	(12.1)	13.3	3.1	(0.4)	茶透明	完成品・欠	片面に自然剥離面のこす
U7.5トコ	ob	(13.3)	9.4	2.8	(0.2)	茶透明	完成品・欠	
V9.2カ	ob	18.7	17.0	4.2	0.7	透明・縞	完成品	
2T.1カ	ch	(15.5)	11.5	3.1	0.4	緑色	完成品・欠	
6T.47ツカ	ob	(20.0)	(14.3)	2.7	(0.5)	茶透明・縞	完成品・欠	
6T.97ツカ	ob	15.2	12.7	3.6	0.4	黒・茶縞	完成品	
6T.25トコ	ob	(7.5)	14.2	3.5	(0.4)	黒透明・もや	完成品・欠	
Z4	ob	26.7	(12.0)	3.9	(0.7)	青み・縞	完成品・欠	
Z11	ob	24.3	(14.5)	5.5	(1.3)	黒透明・縞	完成品・欠	
Z12	ob	(21.5)	(15.5)	2.7	(0.6)	黒透明・縞	完成品・欠	
Z16	ob	(19.5)	(10.7)	2.6	(0.5)	黒透明・もや	完成品・欠	
Z34	ハリ安	(23.5)	(16.1)	4.1	(0.9)	—	完成品・欠	
Z247	ob	(20.3)	(14.0)	2.5	(0.6)	透明・縞	完成品・欠	
K21.47ナ	ob	20.8	16.0	4.5	0.9	茶透明・もや	完成品?	石鏃or石匙

石鏃未製品

(単位はmm, g)

遺物番号	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	色調	製作段階	備考
L27.45.53P	ob	37.7	27.2	15.2	14.1	茶透明・縞	ブランク	
M27.14.66P	ob	25.5	17.7	8.2	3.4	茶透明・斑	成形	片面に自然面のこす
F22.107カカ	ob	42.8	33.6	15.2	14.9	黒透明・縞	ブランク	両面に自然面のこす
G15.7サレキ	ob	33.0	22.3	10.2	8.0	青み	ブランク	側面に自然面のこす
G16.8カ	ob	31.0	27.2	11.1	10.3	茶透明	ブランク	片面に自然面のこす
G16.9サレキ	ob	23.1	17.4	5.5	2.0	茶透明・縞	成形	片面に自然面のこす剥片素材
G23.19サツゲツ	ob	32.2	26.2	18.3	7.5	茶透明	ブランク	板状原石素材
G24.17カ	ob	29.0	20.7	7.2	3.4	青み・縞	成形	縦長の石片③を剥片素材とする
G25.23サレキツ	ob	30.9	24.2	8.3	5.0	茶透明・縞	ブランク	
H16.12サレキ	ob	28.0	19.2	5.6	2.5	黒透明・縞	成形	表面に自然面、裏面に素材剥離面をのこす
H24.6ワカ	ob	20.5	13.8	3.5	0.7	黒透明・もや	成形	石片⑤を剥片素材とする
H24.30ワカツサレキ	ob	30.6	20.7	8.0	4.4	透明・縞	成形	片面に自然面のこす
H25.36ワカツサレキ	ob	29.9	20.1	8.5	3.5	透明・斑	成形	石片①を剥片素材とする。調整後受熱
H26.10茶カ	ob	30.9	26.7	11.4	8.9	茶透明・もや	ブランク	わずかに自然面のこす
I 16.4ワカツサレキ	ob	(23.7)	23.1	6.6	(3.8)	黒透明・もや	青み・欠	片面に自然面のこす
I 22.167カカ	ob	(16.5)	19.6	3.2	(0.8)	透明・縞	成形・欠	
I 25.24茶カ	ob	(25.9)	(20.6)	7.8	(3.3)	茶透明・縞	成形・欠	
J21.37カカ	ob	(19.3)	18.5	7.9	(2.7)	茶透明		側面に自然面のこす
J24.24サツサレキ	ob	(17.5)	17.1	4.0	(1.3)	黒透明・もや	成形・欠	石片③を剥片素材とする
J26.8カ	ob	(16.0)	20.9	4.5	(1.5)	茶透明	成形・欠	裏面基部に打痕をのこす剥片素材、調整後受熱
J26.9カ	ob	19.5	15.3	3.3	1.0	黒透明・もや	成形	石片①を剥片素材とする
K20.10ワカ	ob	23.0	14.3	5.2	1.9	透明・縞	成形	側面に自然面をのこす剥片素材
K22.7サレキツ	ob	30.3	24.5	7.8	4.4	茶透明・縞	成形	剥片素材
L24.20サレキツ	ob	(15.5)	20.8	6.3	(1.7)	黒透明・縞	成形・欠	両極素材
L25.37サレキツ	ob	(11.5)	20.1	(4.4)	(1.0)	茶透明・縞	成形・欠	
L25.113ワカツサレキ	ob	35.0	27.0	14.5	10.3	黒茶	ブランク	側面にわずかに自然面のこす
L26.48茶カ	ob	35.1	24.5	13.8	9.0	茶透明	ブランク	原石素材
L26.52茶カ	ob	24.5	16.5	5.1	1.7	茶透明	成形	剥片素材
L26.71茶カ	ob	20.5	21.5	5.8	2.0	黒透明・縞	成形	石片④を剥片素材とする
L27.66茶カ	ob	30.9	21.2	5.5	2.9	茶透明・縞	成形	石片①を剥片素材とする

遺物番号	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	色調	製作段階	備考
K26.73カ	ob	27.5	18.1	6.8	2.8	透明・もや	成形・欠	剥片素材
M16.6カ	ob	27.1	24.5	7.7	5.5	黒	成形	板状原石素材
M21.14カ	ob	21.0	19.1	6.2	2.4	茶透明	成形	両極素材
M22.34カ	ob	18.3	17.2	6.1	2.0	黒透明・縞	成形	両極素材
M22.14カ	ob	30.6	20.1	5.1	2.1	茶透明	成形・欠	
M22.40カ	ob	22.2	18.1	7.8	2.4	黒	ブランク・欠	
M24.21カ	ob	28.8	23.0	7.5	3.2	茶透明・縞	成形・欠	
M25.55茶カ	ob	21.0	20.0	5.3	2.0	透明・縞	成形	石片②を剥片素材とする
M25.62カ	ob	35.8	30.9	13.5	13.4	茶透明と黒	ブランク	板状原石素材
M26.74茶カ	ob	(17.8)	(18.1)	4.8	1.6	黒透明・縞	成形・欠	
M26.61茶カ	ob	14.7	22.0	5.1	2.9	茶透明・もや	成形	両極素材(上下・左右方向の打撃面あり)、片面に自然面のこす
M28.49茶カ	ob	(13.8)	17.2	3.5	(0.9)	茶透明	成形・欠	薄い板状原石素材
M28.48茶カ	ob	21.0	18.5	6.5	1.7	黒透明・もや	成形	片面に自然面をのこす剥片素材
M29.56カ	ob	22.2	22.8	6.3	2.7	黒・茶縞	成形	片面に自然剥離面のこす
N20.4カ	ob	31.3	19.0	7.6	4.5	茶透明	成形	石片①を剥片素材とする
N21.4カ	ob	(17.6)	(15.5)	5.5	(1.6)	茶透明・もや	成形・欠	
O21.28カ	ob	20.9	18.4	4.5	1.8	茶透明・もや	成形	片面に自然面のこす
O27.24茶カ	ob	16.5	15.8	4.1	0.8	茶透明	成形	側面に自然面をのこす剥片素材
P18.6カ	ob	30.0	22.0	12.0	5.3	黒透明・もや	成形	片面に自然面のこす
R6.8ト	ob	16.7	14.1	3.6	0.7	茶透明	成形	
R13.9カ	ob	(14.7)	(21.6)	4.6	1.5	茶透明・縞	成形・欠	
S7.15ト	ob	18.7	15.1	2.8	0.6	茶透明・もや	成形・欠?	扁平な剥片素材、一側縁は折断か破損
S8.9カ	ob	36.1	29.6	9.2	9.0	茶透明・縞	ブランク	
S9.16カ	ob	23.9	18.5	4.8	1.8	青み・縞	成形	片面に自然面をわずかにのこす剥片素材
T9.22ト	ob	27.3	19.5	7.8	3.0	透明・縞	成形	石片③を剥片素材とする
T10.4ト	ob	24.5	17.1	6.9	1.8	茶透明・もや	成形	石片①を剥片素材とする
T10.15ト	ob	15.0	14.1	7.0	1.2	透明・斑	成形	両極素材
U7.10カ	ob	27.1	23.5	5.8	3.2	茶透明	成形	横長の石片③を剥片素材とする
U10.12カ	ob	19.0	16.6	3.5	1.0	茶透明・縞	成形	片面に素材剥離面をのこし、他面に基部から側面に向けて剥離が及び破損
U10.14ト	ob	22.0	20.1	5.2	2.2	茶透明・斑	成形	石片②を剥片素材とする
2T.13	ob	14.0	13.5	9.6	1.5	茶透明	成形	両極素材
7T.17ト	ob	23.2	16.5	7.1	2.3	茶透明・縞	成形	石片②を剥片素材とする
8T.97ソカ	ob	21.1	19.0	6.5	2.1	茶透明	成形	片面に自然面をのこす
6T.18灰	ob	40.2	28.5	7.6	6.3	黒透明・縞	成形	石片②を剥片素材とする
Z7	ob	24.0	20.5	6.1	2.9	黒透明・もや	成形	素材に打面と打痕をのこす
Z10	ob	22.3	(20.0)	4.8	(1.9)	透明・縞	成形・欠	
Z18	ob	31.9	24.9	7.8	5.9	茶透明・もや	ブランク	側面に自然面をのこす。レキ状剥片素材
Z19	ob	27.7	27.3	10.9	6.8	黒	成形	
Z177	ob	18.8	13.6	3.5	0.7	透明・縞	成形	石片⑤を剥片素材とする
Z246	ob	21.2	11.0	3.8	0.7	茶透明・斑	成形	石片③を剥片素材とする
Z262	ob	23.9	(23.7)	7.3	3.1	透明・縞	成形	
Z293	ob	27.7	20.9	9.0	(5.2)	黒透明・縞	ブランク	片面に自然面をのこす
I 29.34.37P	ob	24.5	12.5	4.6	1.1	透明・縞	整1	横長剥片素材、素材の打面のこす
J29.19.40P	ob	21.5	(9.0)	(5.5)	(0.8)	透明・斑	整1・欠	製作中尖端から基部に向けての力で欠損
D14.2カ	ob	24.9	19.1	4.2	(1.6)	黒・?	整1・欠	基部の節理面での破損
E18.3カ	ob	20.9	17.0	13.6	1.0	茶透明・もや	整1	
F23.34ソカ	ob	(20.0)	15.5	3.6	(1.0)	茶透明・白縞	整1・欠	石片⑤を剥片素材に、押圧剥離を加える
F26.3茶カ	ob	11.4	12.0	3.8	0.6	茶透明・縞	整1	横長の石片④を剥片素材に、押圧剥離を加える
G17.3カ	ob	(35.1)	(19.2)	16.5	(3.5)	茶透明・縞	整1・欠	
G20.10カ	ob	17.9	(12.5)	4.5	(0.7)	茶透明	整1・欠	片面に自然面のこす
G24.25ソカ	ob	(18.5)	20.1	4.3	(1.6)	茶透明・縞	整1・欠	
G25.29カ	ob	(21.7)	(17.7)	3.2	(1.0)	透明・縞	整1・欠	石片⑤を剥片素材

遺物番号	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	色調	製作段階	備考
G25.30ササキ	ob	—	—	—	(0.4)	茶透明	整1?・欠	逆刺のみ残存、素材剥離面のこす
G28.1茶か	ob	—	—	—	(0.8)	茶透明・縞	整1?・欠	
H16.11ササキ	ob	25.5	14.5	8.7	1.8	黒・縞	整1	欠損後再加工
I 25.1茶か	ob	(21.7)	(17.8)	7.2	(2.7)	茶透明	整1・欠	基部から先端に向けての剥離で力が及び先端破損
I 25.9茶か	ob	(20.0)	18.5	3.5	0.9	透明・もや	整1・欠	
J24.10ササキ	ob	(16.7)	16.5	4.1	(1.0)	黒透明	整1・欠	
L25.8茶か	ob	27.2	22.5	7.5	3.1	透明・もや	整1	
L26.12茶か	ob	24.0	14.0	6.3	1.7	茶透明・もや	整1	幅に対して減厚が不可能となり製作放棄か?
L27.60茶か	ob	19.2	11.0	3.3	0.6	透明・縞	整1	石片①を剥片素材とする
M22.13ササキ	ob	26.5	20.9	5.2	2.5	茶透明	整1	側面から対する基部に向けて剥離が及び基部破損、受熱
N24.4ササキ	ob	15.6	14.4	2.9	(0.5)	茶透明	整1・欠	
N25.4茶か	ob	17.0	14.3	5.5	0.9	茶透明	整1	横長の石片③を剥片素材とする
N25.8茶か	ob	(14.0)	(10.0)	2.6	(0.3)	茶透明	整1・欠	
M26.49茶か	ob	(11.1)	14.8	3.4	(0.6)	黒透明・縞	整1・欠	
M29.65茶か	ob	17.6	11.1	3.0	0.5	透明・縞	整1	自然面をのこす剥片素材、破損後も調整を行う
M29.67茶か	ob	17.1	14.0	4.4	0.8	茶透明	整1	わずかに自然面のこす剥片素材
N14.3ササキ	ob	27.5	18.2	4.2	1.8	黒透明・もや	整1・欠	側縁から対する基部に向けて剥離が及び破損
N24.15ササキ	ob	21.6	18.3	5.5	1.9	透明・縞	整1	板状原石素材、周縁鋸歯状
N24.20ササキ	ob	(22.0)	20.6	6.1	(2.7)	茶透明・もや	整1・欠	
N24.2茶か	ob	15.5	10.5	4.0	0.6	茶透明	整1	
O23.1ササキ	ob	22.7	18.5	6.0	1.9	茶透明	整1	周縁鋸歯状、側面調整ミスの為形状を損ねる
O26.42茶か	ob	(21.5)	17.5	5.6	(1.8)	黒透明・縞	整1・欠	
P19.14ササキ	ob	20.1	(16.6)	5.6	(1.8)	黒透明・もや	整1・欠	
S8.5ササキ	ob	27.0	(14.1)	3.5	(1.2)	黒透明・縞	整1・欠	石片②を剥片素材とする
T7.7ササキ	ob	22.1	18.0	5.6	2.2	透明・もや	整1	
U10.11ササキ	ob	(20.6)	20.0	5.7	(2.2)	透明・縞	整1・欠	
6T.5アサカ	ob	20.1	14.6	3.8	0.9	透明・縞	整1	欠損後、再調整
6T.22アサカ	ob	(14.1)	17.5	5.0	(1.0)	茶透明	整1・欠	欠損後、受熱
Z3	ob	26.7	(21.5)	3.3	(1.7)	透明・縞	整1・欠	片面に自然面をのこし、他面に横長の素材剥離面をのこす
Z9	ob	24.5	23.0	4.2	2.1	透明・縞	整1	
Z279	ob	(19.2)	(17.3)	4.0	(1.1)	透明・縞	整1・欠	
Z294	ob	24.3	22.0	6.9	2.6	黒透明・もや		
Z310	ob	(15.0)	(14.5)	4.0	(0.7)	茶透明・もや	整1・欠	
2.14H7	ob	23.6	(16.5)	3.5	(1.0)	青み・縞	整2・欠	片面に素材剥離面のこす
I29.6.37P	ob	26.5	(16.9)	2.9	(1.0)	透明・もや	整2・欠	逆刺部左右とも欠損後、一逆刺のみ再調整
J30.4P1	ob	(18.0)	15.7	3.7	0.9	黒透明・もや	整2・欠	
F19.4ササキ	ob	19.4	16.7	2.9	0.6	透明・斑	整2	先端が「ちょこんと」突出
H16.18ササキ	ob	(15.5)	(13.0)	3.0	(0.5)	透明・縞	整2・欠	
H24.19ササキ	ob	(15.8)	(13.5)	4.1	(0.7)	黒透明・もや	整2・欠	
H24.10ササキ	ob	(14.2)	(10.6)	3.1	(0.3)	茶透明	整2・欠	
H28.1茶か	ob	(10.1)	(12.1)	3.0	(0.3)	茶透明	整2・欠	
I 17.1ササキ	ob	(18.7)	(17.2)	5.6	(1.3)	黒茶	整2・欠	
I 23.3ササキ	ob	(18.5)	(11.1)	4.0	(0.7)	黒透明・縞	整2・欠	挟入部中心から先端に向かっての剥離が及び先端破損、側面鋸歯状
I 27.1茶か	ob	(16.8)	(16.6)	(8.1)	(0.4)	透明・もや	整2・欠	片面に自然面のこす
J25.4ササキ	ob	19.2	16.5	2.7	(0.8)	透明・縞	整2・欠	基部中央から側面に向かっての離調整が及び側面が破損
K26.7茶か	ob	30.5	15.6	4.6	2.0	青み・縞	整2	
L24.7ササキ	ob	(15.5)	(14.1)	3.6	(0.7)	透明・縞	整2・欠	逆刺部から先端に向かって破損
L25.13ササキ	ob	32.0	18.3	7.5	3.1	青み・縞	整2	
L27.6茶か	ob	23.5	19.0	5.2	1.7	透明・縞	整2	片面に素材剥離面のこす
L27.11茶か	ob	17.8	15.5	4.5	0.7	茶透明・もや	整2	片面に素材剥離面をのこし、調整はなし

遺物番号	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	色調	製作段階	備考
L27.53茶カ	ob	(25.6)	15.9	6.5	(2.1)	黒透明・もや	整2・欠	
M22.37ロカ	ob	23.5	(12.3)	4.1	(0.8)	茶透明	整2・欠	
M25.117ロカ	ob	(28.0)	(18.6)	3.6	(1.2)	黒透明・もや	整2・欠	側面から対する逆刺に向けて剥離が及び逆刺破損
M25.86レキヤ	ob	(12.5)	12.5	2.8	(0.5)	透明・縞	整2・欠	
M26.59茶カ	ob	(16.3)	(9.1)	3.3	(0.3)	茶透明	整2・欠	尖端から逆刺に向けて剥離が及び逆刺破損
M27.4茶カ	ob	30.0	22.6	7.9	4.0	透明・縞	整2	
N22.37ロカサレキ	ob	(14.2)	14.5	3.8	(0.7)	黒透明・もや	整2・欠	尖端欠損後再調整の可能性あり
N25.3茶カ	ob	(14.9)	10.5	(3.2)	(0.3)	茶透明	整2・欠	
N29.3カ	ob	21.0	20.0	5.5	(1.8)	黒透明・縞	整2	
O27.23茶カ	ob	22.5	13.5	3.7	(0.8)	透明・もや	整2・欠	表裏に素材剥離面のこす
F23.28サカテ	ob	25.1	21.1	3.5	1.6	黒透明・もや	素材 片	表面に自然剥離面、裏面に素材剥離面をのこす(石片④)素材
F24.5レキヤ	ob	16.3	14.5	6.6	1.1	黒透明	素材 片	両極素材
F25.10カ	ob	24.8	19.8	8.8	3.9	茶透明・縞	素材 片	ブランク
H17.10レキ	ob	21.5	20.2	6.0	2.6	黒	素材 片	石片①を剥片素材とする
I21.17レキヤ	ob	30.1	25.5	10.2	7.0	青み	素材 片	打痕をのこす剥片を素材とし、側面に自然面のこす
I27.27茶カ	ob	24.7	22.0	6.5	2.8	茶透明	素材 片	原石素材
L25.3茶カ	ob	15.6	12.7	3.2	0.5	茶透明	素材 片	両極素材
L27.6茶カ	ob	39.1	28.1	10.6	9.1	青み・縞	素材 片	原石の二辺を折断して三角形の素材を作る
M17.7カ	ob	26.5	17.6	5.6	2.4	茶透明	素材 片	石片②を剥片素材とする
M21.20レキヤ	ob	15.5	11.0	4.9	0.6	茶透明・もや	素材 片	横長の石片⑤を剥片素材とする
V11.6ト	ob	(25.5)	16.5	9.5	(3.4)	透明・縞	素材 片	両極素材、片面に自然面のこす

尖頭器

(単位はmm, g)

遺物番号	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	色調	製作段階	備考
N24.57ロカ	安	54.4	25.5	14.2	21.6	—	成形	側面、基部下面に自然面のこす
O27.1茶カ	ob	25.5	16.2	3.6	(1.3)	青み・縞	整形1・欠	裏面に素材剥離面のこす

石錐

(単位はmm, g)

遺物番号	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	色調	備考
K26.42.48P	ob	28.2	20.0	10.3	3.3	透明・縞	自然面をのこすレキ状剥片素材
F19.77ロカ	ob	24.1	5.7	4.0	0.5	透明・縞	棒状
G23.13カ	ob	24.5	9.8	9.3	1.7	茶透明	棒状
G26.1茶カ	ob	27.5	16.8	9.2	2.7	茶透明・縞	片面に自然面をのこす剥片素材。尖端に磨耗痕あり
H16.17レキ	ob	39.2	14.6	7.5	3.5	黒透明・もや	片面に自然面をのこすタテ長の剥片素材
H16.217ロカサレキ	ob	(28.0)	19.1	9.2	(3.0)	黒透明・縞	両面に自然面をのこすレキ状剥片素材
H23.147カ	ob	23.7	12.7	6.5	1.7	黒茶	石片③を剥片素材とする
H25.8茶カ	ob	(18.9)	7.2	4.7	(0.5)	茶透明	棒状
H25.157ロカサレキ	ob	43.0	15.8	6.8	2.8	黒	基部のある棒状、片面の一部に自然面をのこす剥片素材
H26.9茶カ	ob	14.8	10.0	5.0	0.5	透明・斑	片面に自然剥離面をのこす剥片素材
K24.347ロカ	ob	24.6	0.9	4.5	0.8	透明・縞	石片②を剥片素材とする
K26.52カ	ob	19.8	8.5	5.5	0.8	茶透明・もや	棒状・片面にわずかに自然面をのこし、他面に素材剥離面をのこす
K26.68茶カ	ob	19.0	7.6	3.8	0.6	透明・縞	石片③を剥片素材とする
L25.917ロカサレキ	ob	27.8	12.7	7.5	2.1	茶透明・もや	石片②をタテ長剥片素材とする
L26.9茶カ	ob	30.8	13.8	7.6	2.0	透明・縞	基部のある棒状
L27.61茶カ	ob	(28.8)	7.5	6.7	(1.1)	茶透明・縞	自然剥離面を一部にのこすタテ長の剥片素材
M23.157ロカサレキ	ob	(31.6)	12.1	7.7	2.7	茶透明	タテ長の石片④を剥片素材とし素材の先端を利用している。磨耗痕あり
M28.52茶カ	ob	25.0	17.2	8.0	2.6	茶透明	ヨコ長の石片③を剥片素材とする。石鏃未製品の可能性あり
N22.197ロカサレキ	ob	(12.5)	(8.2)	(3.2)	(0.3)	透明・縞	自然面をのこす剥片素材
N25.22茶カ	ob	28.0	15.5	12.5	2.6	透明・縞	石鏃の可能性があり

遺物番号	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	色調	備考
N24.61カカツルキ	ob	16.6	7.4	4.1	0.5	茶透明・もや	
N25.35茶カ	ob	35.1	10.7	9.7	2.8	茶透明・縞	ヨコ長の石片②を剥片素材とする
O23.9カカ	ob	33.2	13.0	4.6	1.8	灰色	片面に素材剥離面のこす
Q18.3カ	ob	(27.2)	16.6	9.0	(3.6)	青み・縞	片面にわずかに自然面のこす
S7.3カ	ob	21.6	19.8	5.9	1.6	茶透明・もや	ヨコ長の石片③を剥片素材とする
S7.8トコ	ob	52.0	25.6	12.0	5.4	透明・もや	基部と尖端部が明確に分けられた作りで、基部は両面に自然面をのこす優品
S14.3カ	ob	39.6	11.7	4.5	1.6	茶透明	基部のある棒状
T6.13トコ	ob	17.2	7.9	5.9	0.7	茶透明・縞	棒状
T7.13カ	ob	30.7	17.8	8.0	2.4	茶透明・縞	自然面の打面をのこすヨコ長の石片③を剥片素材とする
U7.7カ	ob	25.7	18.5	6.1	1.8	透明・斑	ヨコ長の石片③を剥片素材とする
2T.8.一	ob	31.5	27.2	12.0	4.3	透明・縞	石片④を剥片素材とする
6T.26トコ	ob	26.3	13.4	5.9	1.6	透明・もや	タテ長の石片③を剥片素材とする
8T.6トコ	ob	(18.5)	17.7	5.7	(1.1)	白濁色	石片⑤を剥片素材とする
8T.7トコ	ob	30.0	17.1	8.3	2.7	透明・縞	石片④を剥片素材とする
Z86	ob	27.2	8.1	6.0	1.0	透明・縞	表裏面に自然面をのこす剥片素材
Z248	ob	26.5	11.0	4.1	0.8	透明・縞	石片①を剥片素材とする
Z295	ob	35.1	17.5	5.6	2.6	黒透明・縞	タテ長の石片②を剥片素材とする

石匙

(単位はmm, g)

遺物番号	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	色調	備考
I 29.15.37P	ch	35.8	20.5	7.3	4.0	緑灰色	刃部調整なく未製品か
G24.28ルキサ	ch	34.1	32.5	9.1	8.0	灰色	未製品
H14.1カ	ob	35.8	41.0	9.2	9.3	茶透明	
H17.6ルキ	ch	35.5	33.2	9.7	10.4	緑灰色	
M25.21ルキサ	頁	20.2	37.0	6.5	4.5	—	

異形石器

(単位はmm, g)

遺物番号	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	色調	備考
L28.20.58P	ob	19.9	12.9	3.0	0.7	茶透明	石片②を剥片素材とする

滑石

(単位はmm, g)

遺物番号	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	色調	備考
M29.91.61P	滑石	(12.0)	(5.0)	(3.3)	(0.3)	—	

黒耀石以外の石器

(単位はmm, g)

遺物名	遺物番号	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
打製石斧	F16.1カカツルキ	泥変	(9.9)	(5.2)	2.6	(183.3)	一側縁に潰し痕あり。未製品
	F28.1茶カ	緑凝	(7.3)	(5.0)	(1.0)	(49.6)	
	G28.4茶カ	泥	(7.6)	5.2	1.4	(83.0)	
	M27.38茶カ	緑凝	(6.7)	(3.4)	(1.3)	(29.5)	打斧?
	Z26	頁	9.8	4.1	1.6	90.2	短冊形
	Z27	緑変	(9.8)	(6.6)	(1.3)	(99.1)	
	Z271	粘	(9.1)	4.7	1.5	(83.9)	
	6T.8ツ	緑変	(11.6)	5.2	1.8	(115.1)	
磨製石斧	G18.11カカツルキ	砂	(12.8)	(8.1)	(3.2)	(390.0)	
不定形石器	H23.20ルキサ	砂	15.9	6.3	2.1	200.0	打斧か?
	O22.13カカツルキ	粘	(3.8)	(7.0)	(1.4)	(38.8)	
	V11.5トコ	緑凝	6.7	12.8	1.9	218.3	
磨石類	G25.7ルキサ	凝	13.2	5.5	(4.4)	(399.8)	凹石

おわりに

発掘調査終了から6ヵ月を過ぎた今、報告書の上梓をみるなかで今回の発掘調査にかかわる日々を思い返しています。

今回の発掘調査は調査以外に多くの準備を重ねてきました。現地にあった間下倉庫は、岡谷市内の発掘品の保管庫として長い期間利用してきた経過があり、報告書作成作業と並行して行われた榎垣外遺跡の整理遺物もすべてここに保管されていました。これらをすべて現在の分室に運び込み、復原品については棚出しを行い、資料の閲覧が容易にできる状況へと作業を行ってきました。それ等の作業は先々年の暮れから準備を始め昨年3月に一挙に実施し、こうして間下倉庫が空となり取り壊され調査へと至りました。

北西区の調査は5月下旬に入り、土止め用矢板打ちで調査が中断の間に、岡谷市では未曾有の災害が発生しました。豪雨による土石流が湊、川岸、長地地区に発生し、多くの人命を奪いました。今なお復旧ままたらず、家の壁に土砂の爪跡を見るところもあります。災害は遠いところにあるのではなく、ごく身近にあることを思い知らされた出来事でありました。湊船魂社はすべて流失してしまいましたが、近隣の人々の手で土砂の中から掘り出され、すべてとはいきませんが石造物が発見され回収されています。

調査区脇の大川も多量の水が流入し、溢れ、付近の家が水に浸りました。今回の調査はその災害をなくすための遊水地を造る事業に伴って行われ、現場付近の状況を見るにつけ、ある種の使命感のような感覚に襲われたのでした。

現場も矢板打ちの溝に水が溜まり池状態であり、調査再開に手間取りました。7月下旬から再び調査が始まりましたが、8月半ばの雨で再び現場は池状態に逆戻りしてしまいました。排水に3日間かけ何とか作業再開にこぎつけ、9月末に調査を終了しました。その間に、林製糸所の製糸遺構と遺物の発見があり、特に明治43年に開設された「平野製糸協同病院」銘の薬瓶は、岡谷市の歴史にとって、貴重なものとなりました。

10月から整理作業を経て報告書作成に入る中で、石器については会田進、河原喜重子両氏に丸投げとなりました。ほかに仕事があるなか尽力いただき感謝いたします。

最後になりましたが、調査と工事が並行して行われ調整に大変ご苦労いただきました(株)岡谷組の現場代理人大村光男さんには誠心より感謝いたします。また長野県諏訪建設事務所、(株)岡谷組をはじめとする工事関連業者の皆様にもご協力いただきました。併せて感謝いたします。

本書編集、印刷についてはマルモ印刷(株)様、(有)みやび永井雅幸氏にお世話になりました。遅れぎみの図版、原稿で申し訳なく思っています。

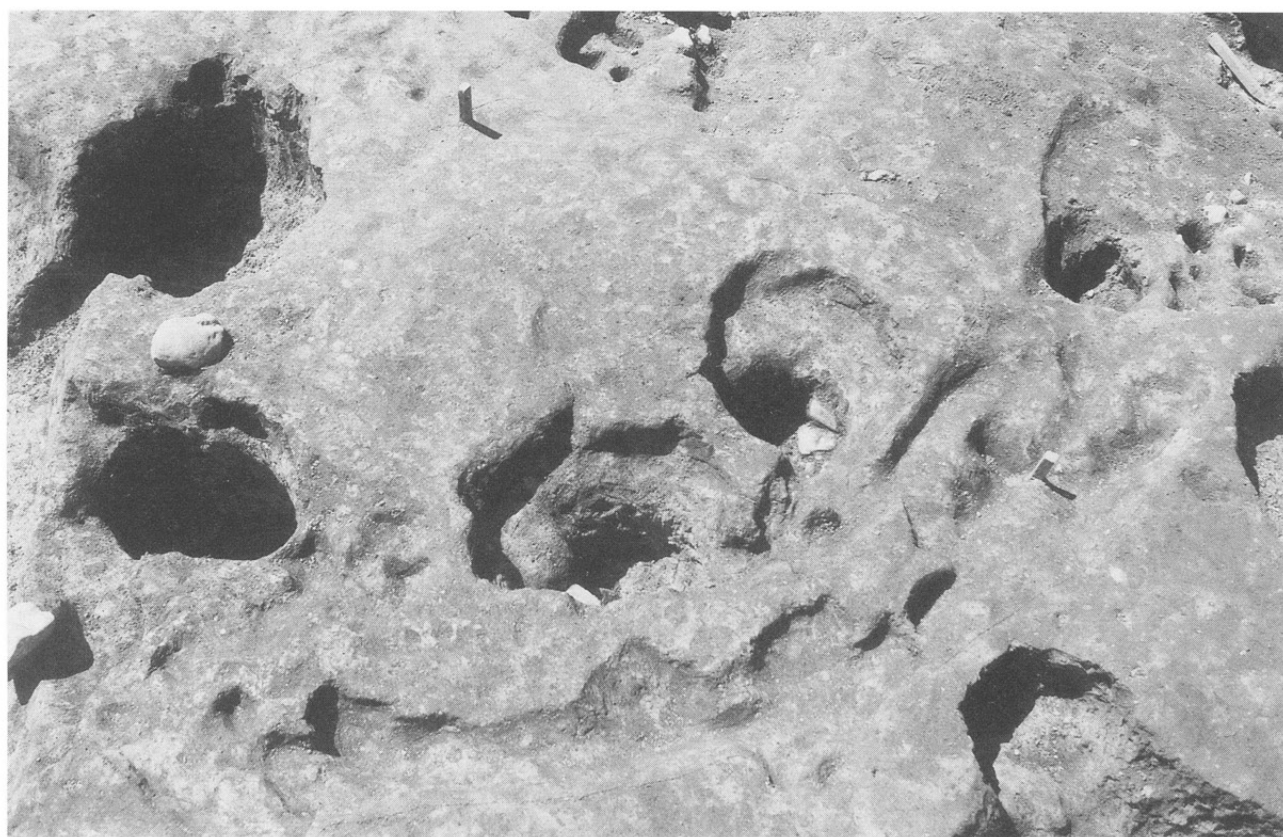
今回の発掘調査、整理、報告書作成に関わりましたすべての方に感謝申し上げ、筆を置くこととします。

平成19年3月

調査員担当者 山田武文



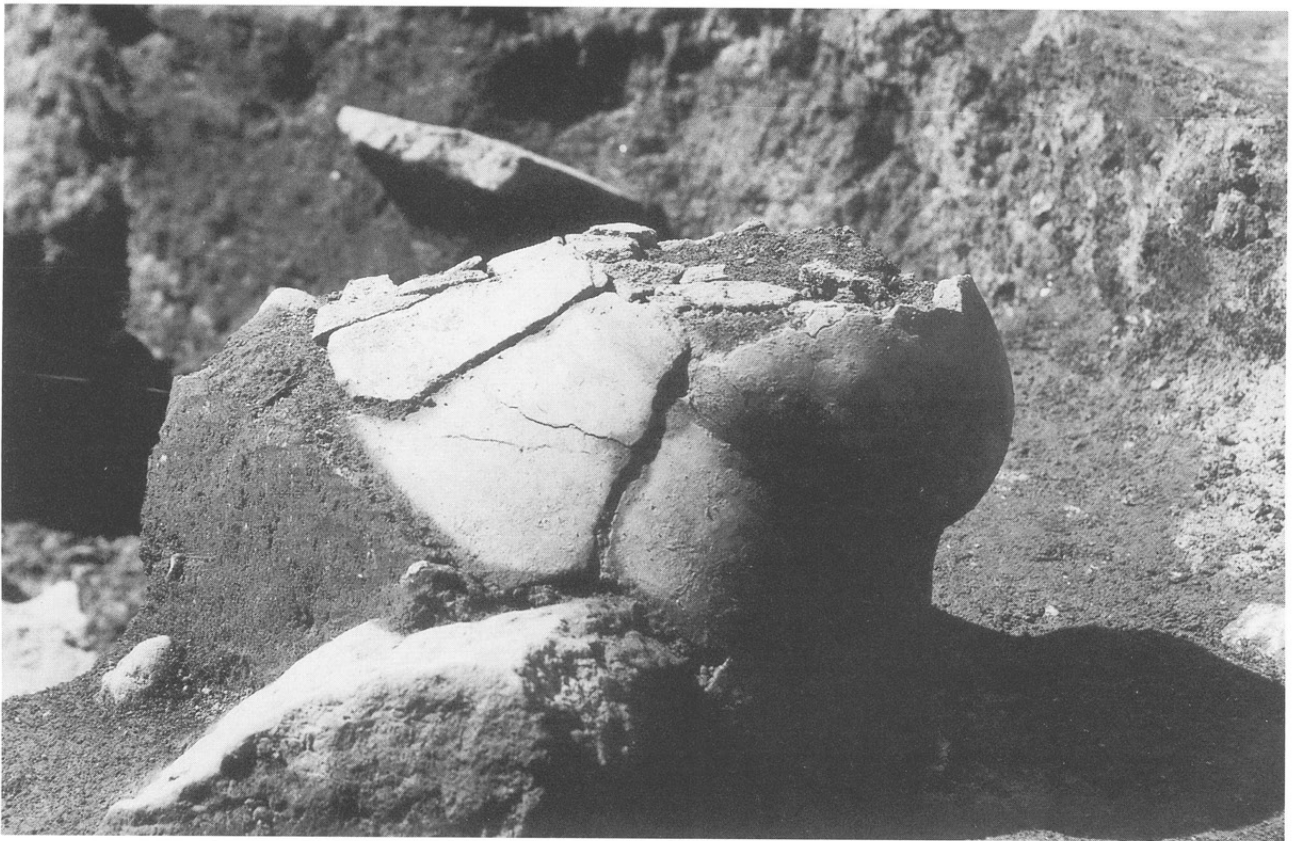
1 小竪穴群



2 14号住居跡（北東から）



3 40P (西から)



4 40P 内裏被り土器 (東から)



5 25P (東から)



6 46P と 95P (北東から)



7 41P (北から)



8 45P (南から)



9 57P (西から)



10 72P (東から)



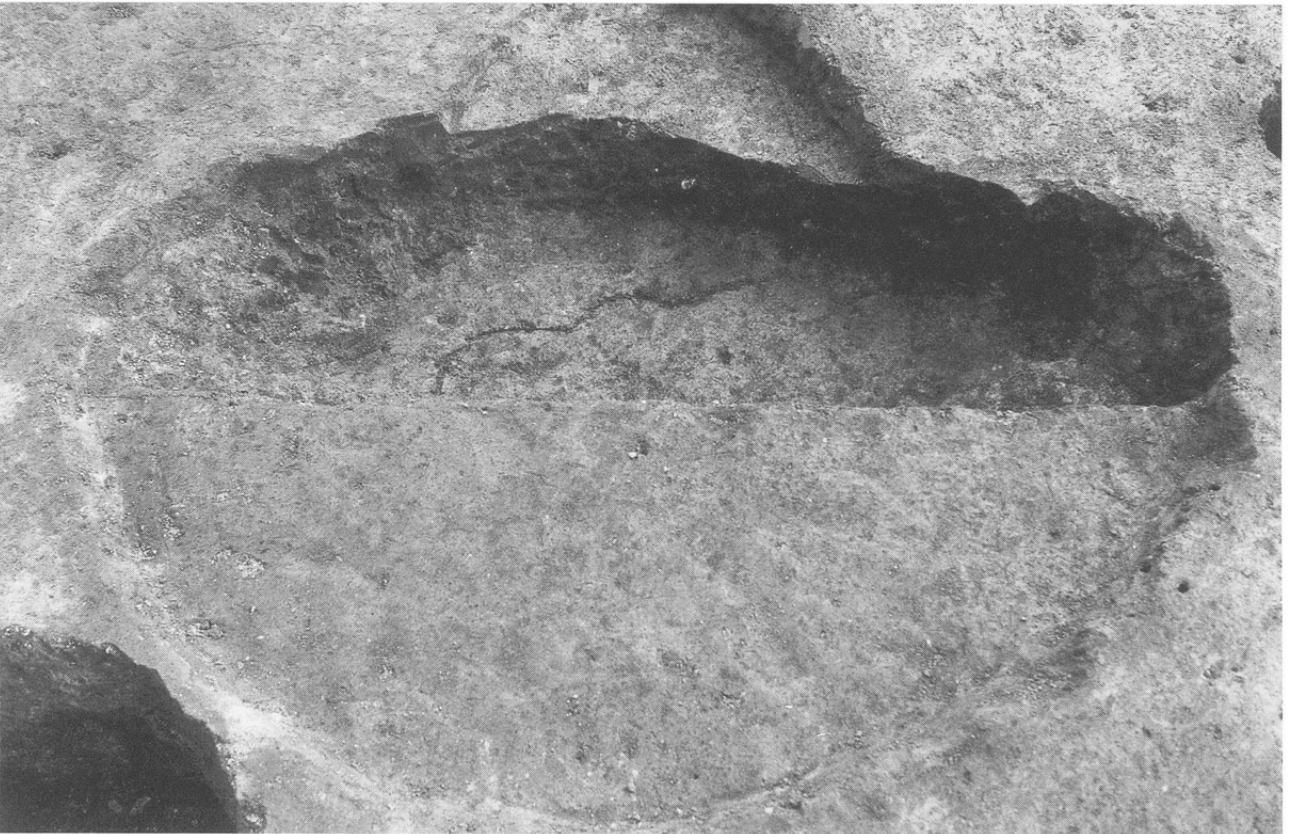
11 75P (西から)



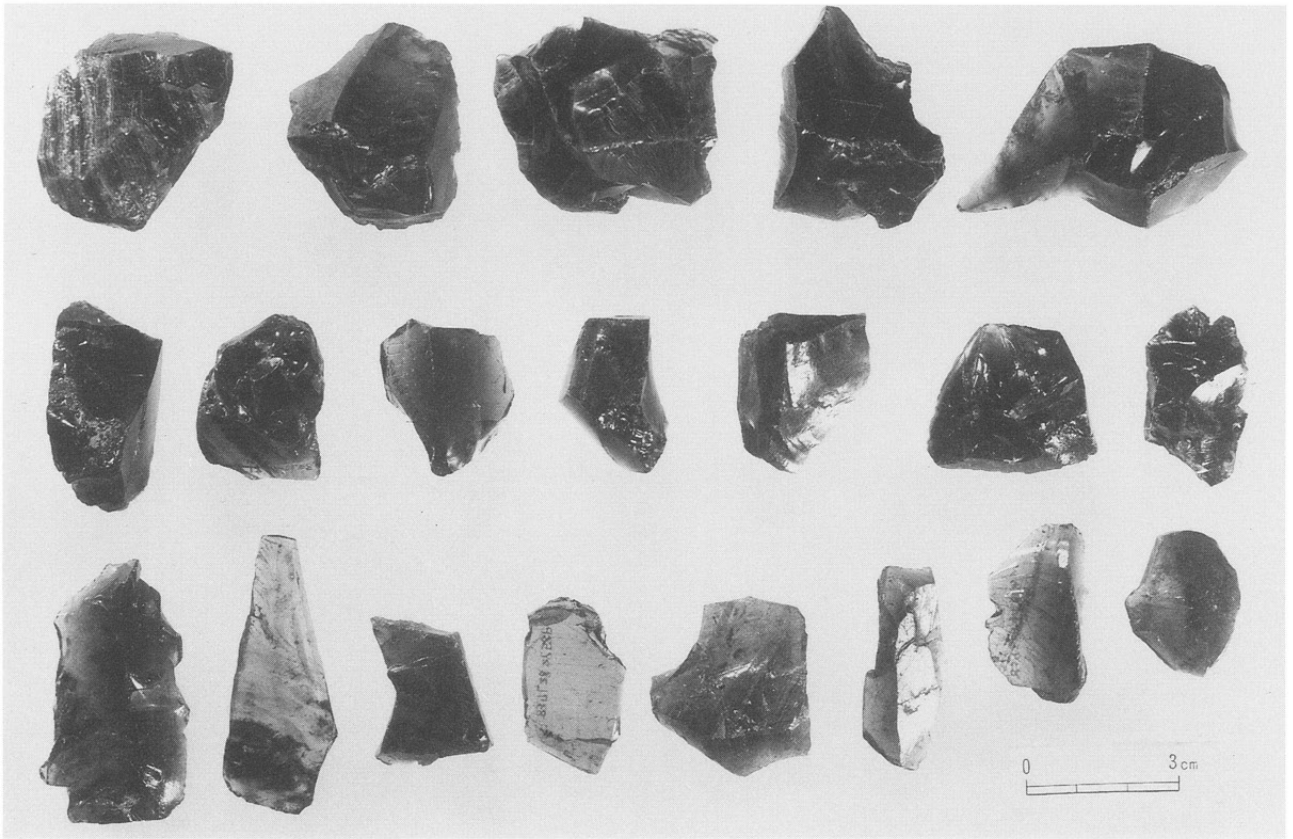
12 99P (西から)



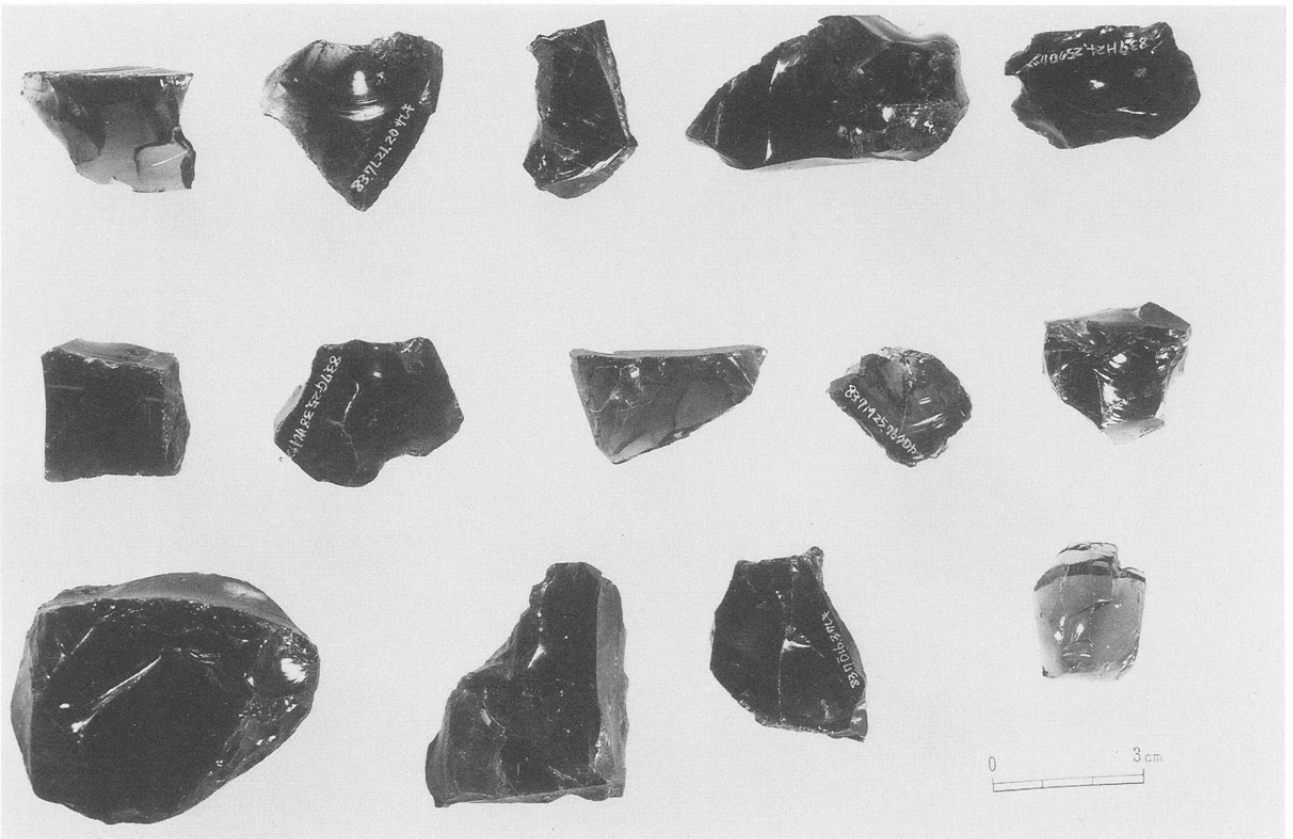
13 81P 骨片検出状況（南東から）



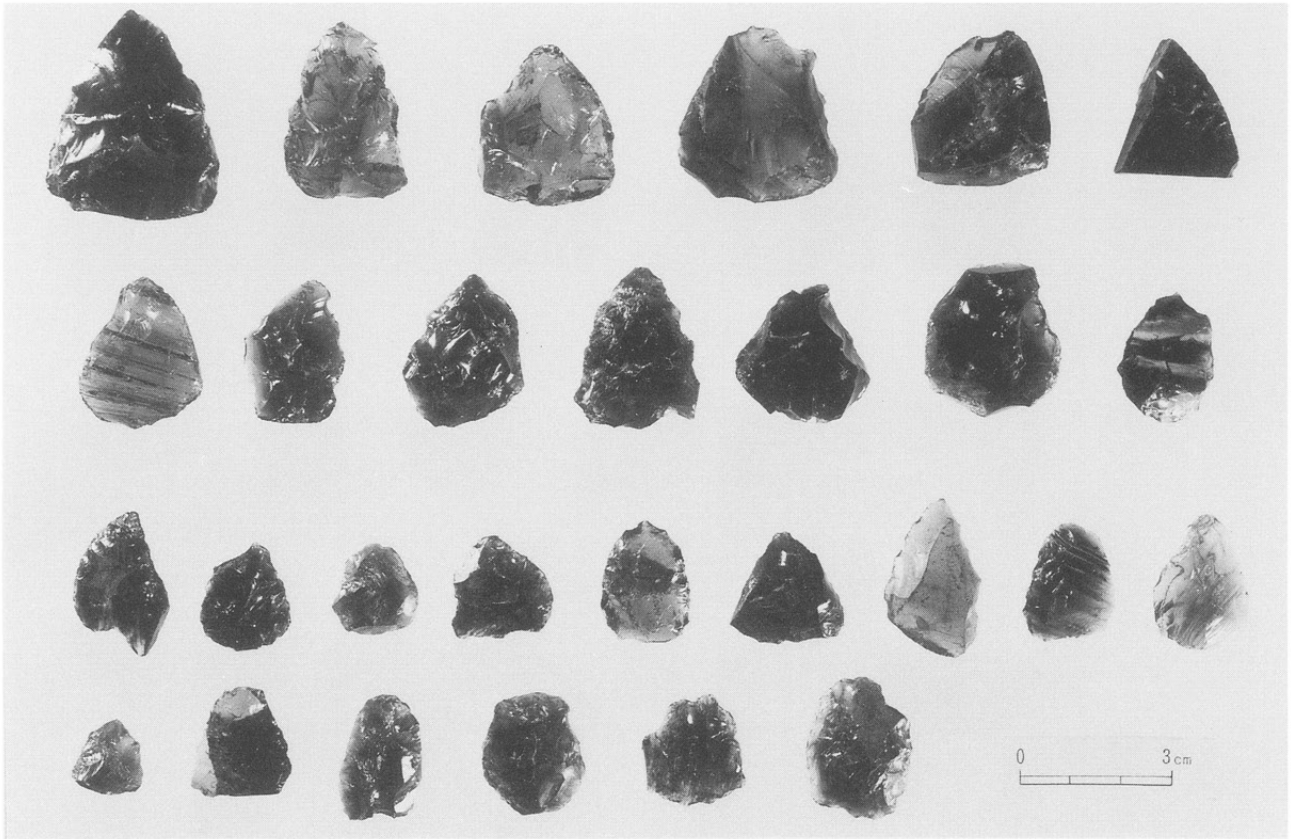
14 65P 炭化物・焼土（北から）



15 原石



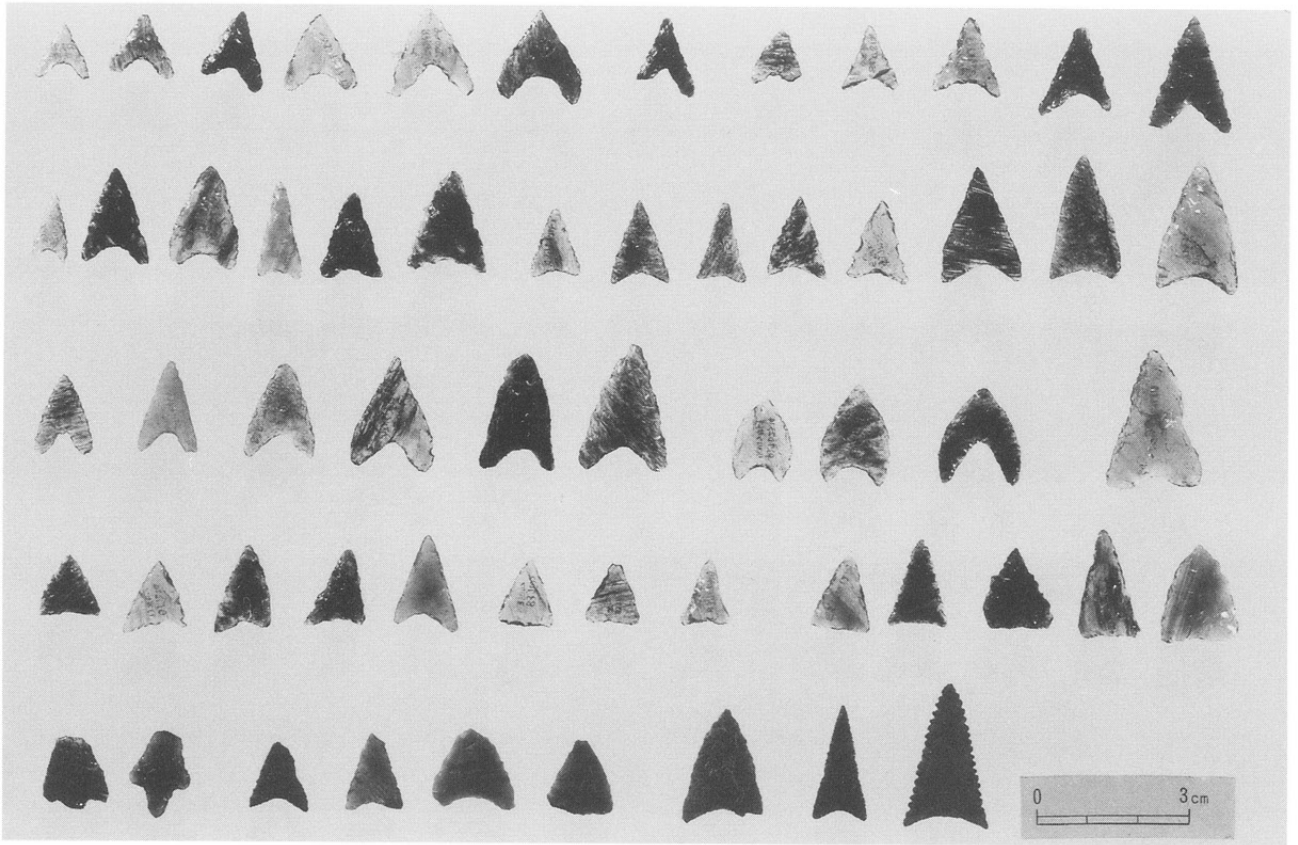
16 石核



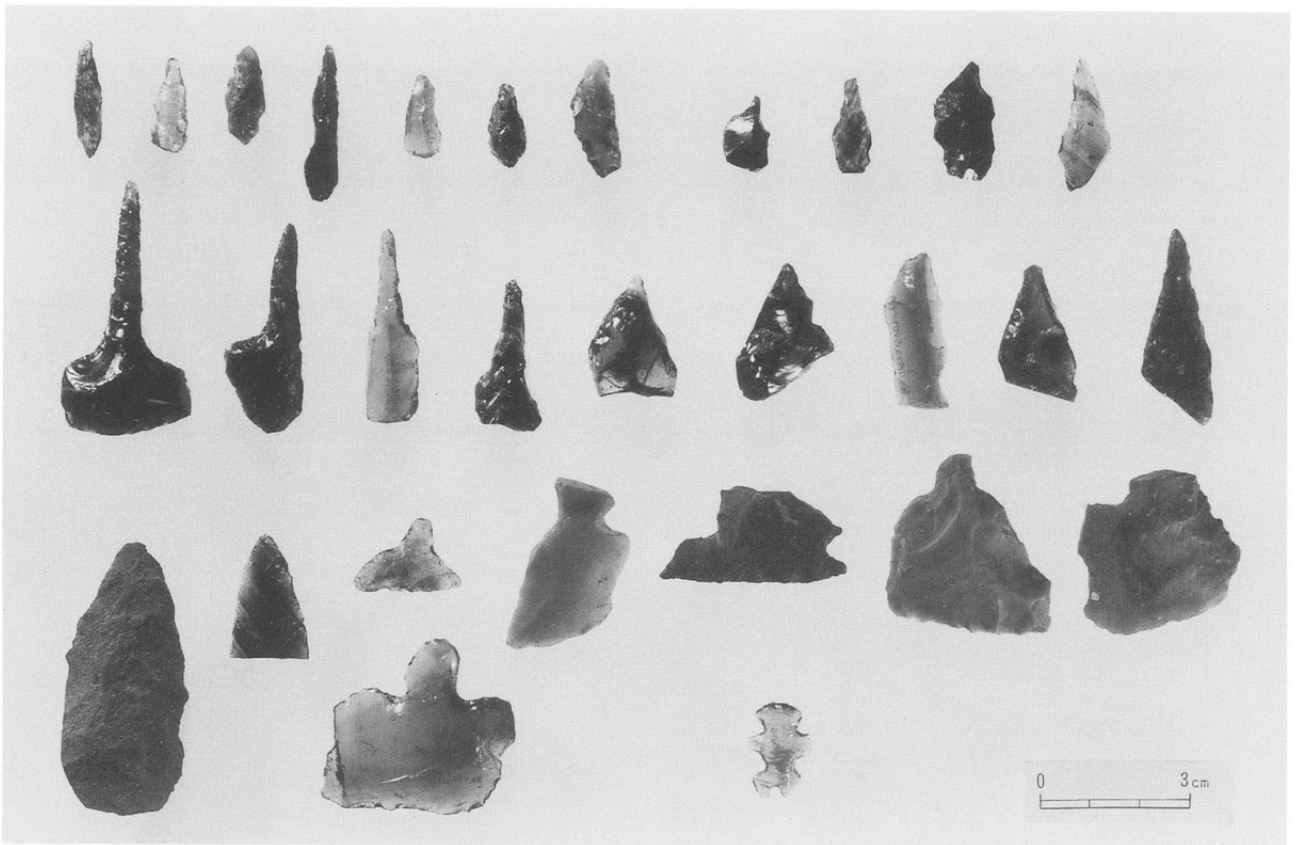
17 石鏃未製品



18 石鏃未製品



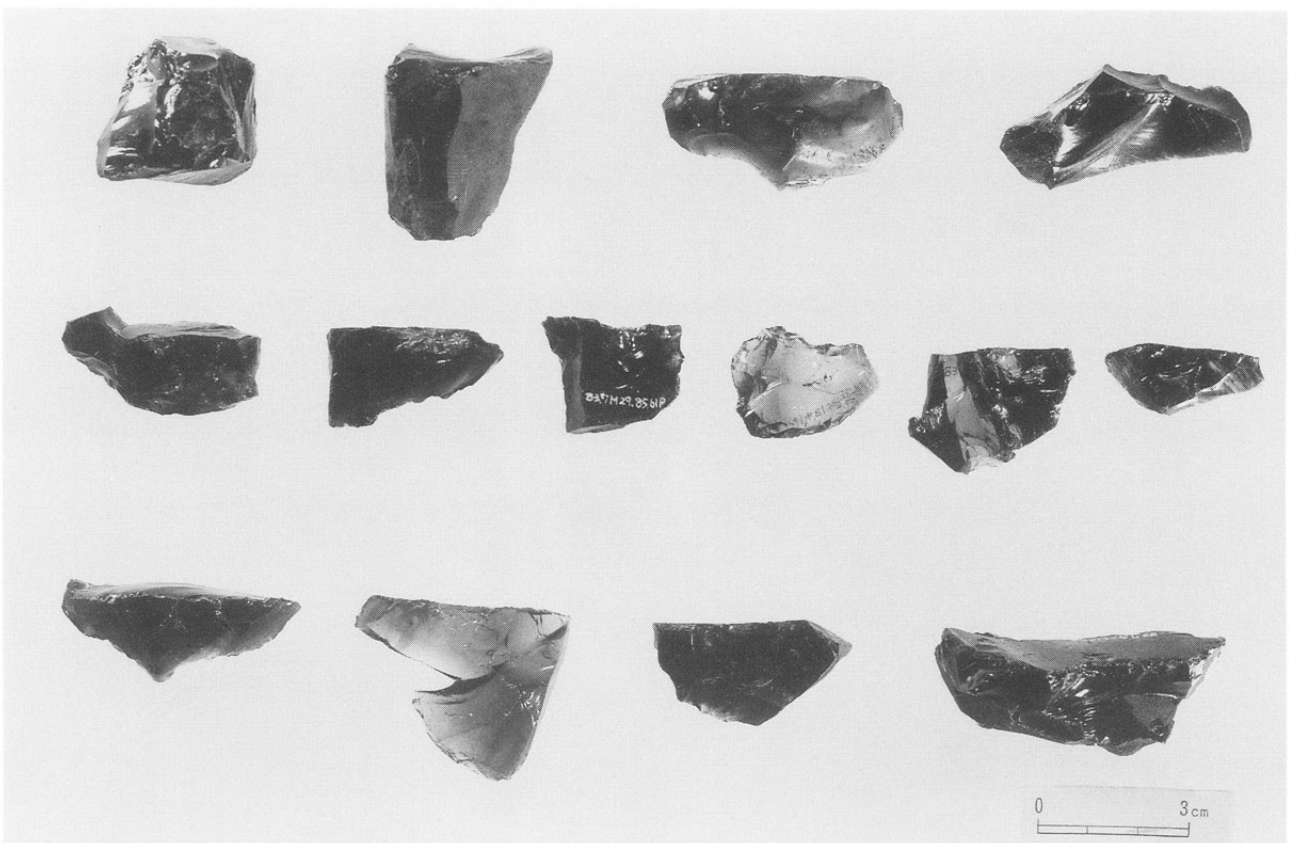
19 石鏃



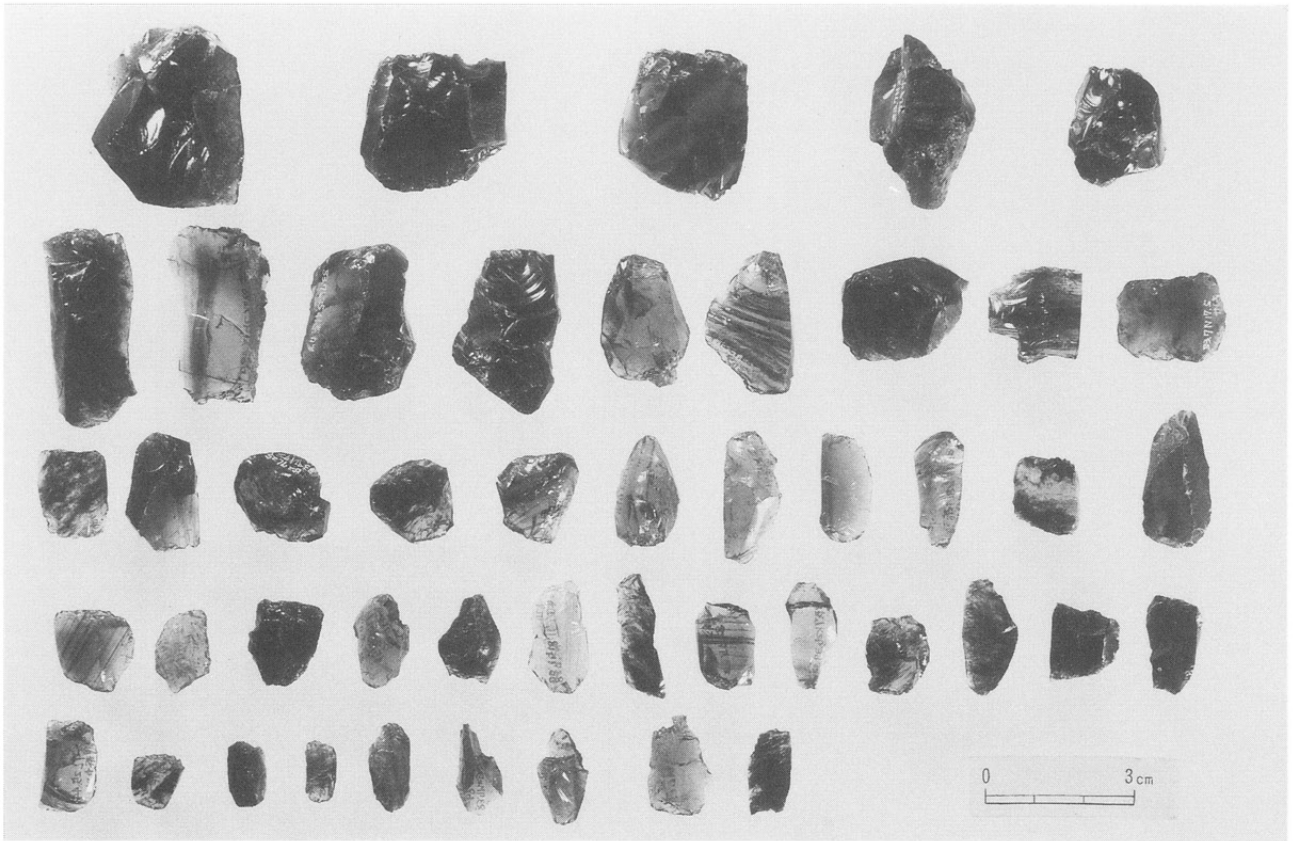
20 石錐・尖頭器・石匙・異形石器



21 スクレイパー類



22 彫器



23 両極剥離を有する石器



24 剥片類

報告書抄録

ふりがな	ましたまるやま							
書名	間下丸山遺跡							
副書名	平成18年度国庫補助事業・総合流域防災事業に伴う間下丸山遺跡発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	郷土の文化財							
シリーズ番号	28							
編著者名	長野県岡谷市教育委員会							
編集機関	長野県岡谷市教育委員会							
所在地	〒394-8510 長野県岡谷市幸町8-1 TEL 0266-23-4811							
発行年月日	西暦 2007年3月16日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ' / "	東経 ° / ' / "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ましたまるやま 間下丸山	ながのけん 長野県 おかやし 岡谷市 やましたちよう 山下町	20204	83	36° 3' 53"	138° 2' 40"	20060530 ~ 20060608 20060726 ~ 20060925	1486.44	山下町調節池 設置工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
間下丸山	集落	縄文時代	住居址1棟 小竪穴54基		縄文式土器			

郷土の文化財28
MASHITAMARUYAMA SITE

間下丸山遺跡

発行日 平成19年3月16日
発行 岡谷市教育委員会
〒394-8510 長野県岡谷市幸町8-1
TEL 0266(23)4811
(生涯学習課分室埋蔵文化財整理室)
〒394-0028 長野県岡谷市本町4-1-39
TEL 0266(23)4811
制作 マルモ印刷株式会社
印刷 〒394-0027 長野県岡谷市中央町1-7-13
TEL 0266(21)1100
編集 有限会社みやび
